二十九日、酉、内裏造營の段錢を越中に課す、

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕

拾八貫廿五文、五月二十九日、二十六日定、送狀アリ、請取出　等持寺領、越中國、小布施庄、段錢、
拾二貫五百文、同日　同日　三寶院御門跡領、貳ヶ郷、越中國段々、錢、
四貫文　同日　同日　三條八幡宮領、越中國御服之庄、吉川之段錢、
五百文　五月三十日、廿二日定　大原備中入道、越中國新川郡、段錢、
五百文　五月廿日　同日　武田下條殿、越中國塚原保、段錢、
五貫九百文　同日　同日　進士隱岐守殿、越中、濃州、江州、因州、作州、五ヶ國之段錢、
拾貫文　六月十一日、自七日、至八日定　堤新次郎殿、越中國段錢、般若野庄、
參貫文　同日　同日　同前　四御社領　北向三位殿、越中國段錢、吉良庄、
二百卅文　六月十五日定　十八日　權太慶德丸、越中國婦負郡田中保惣領、段錢五分一、
四百六十文　六月廿日定　廿二日　疋田孫左衛門殿、越中國婦負田中保内、段錢、

寛正元年庚辰　紀元二千百二十年

九月　朔甲戌

二十六日、己亥、幕府、畠山政長を召し、義就の封邑河内紀伊越中等の地を與ふ、

〔長祿四年記〕　九月廿六日、畠山政長次郎殿出仕、裏打路次馬也、供兩人、游佐次郎、神保孫三郎、各うら打進物、出仕以前に游佐新右衛門尉持參、走衆五十人計在之、御對面御盃御給也、安富筑後入道宿所ニ御渡、則今日少々禮在之歟、河内國紀伊國越中國、其外諸國知行之御判、同今日御拜領、仍重而出仕在之、

寛正二年辛巳　紀元二千百二十一年

十月　朔戊辰

十七日、庚申、幕府、越前尾張守護斯波松王を廢して、澁川義廉を嗣と爲し、是日、守護代朝倉敎景に、越前越中の地を割き之に授く、

〔大乘院寺社雜事記〕　九月二日、次武衛事、又澁川息（十五、六、義廉）之躰被仰付、既被移屋形、元息松王丸ハ被成僧分云々、依之甲斐八郎三郎（光敏）被召上、朝倉彈正（景數）可罷上分及其沙汰云々、

十月十六日、今日武衛參賀室町殿云々、甲斐朝倉上洛ハ爲此也、十七日自公方越中越前兩所ニ領所七ヶ所分朝倉ニ給之了、越前守護代事可被仰合由、御内書同給之云々、

是歳、參議藤原隆賴をして、越中權守を兼ぬしむ、

〔公卿補任〕　參議正四位上藤隆頼　月日兼越中權守、十一月廿三日叙從三位、

○寛正二年の條

寛正五年甲申　紀元二千百二十四年

二月甲申朔

二十五日、戊申、京都本能寺日隆寂す、

〔本化別頭佛祖統紀〕　十八　京兆本能寺開山日隆上人傳、

師諱日隆、初造日立、於後改之、字深圓、號精進院、呼桂林房、越之中州人、桃井氏左馬頭尙儀之子、師之叔父有日存日純、其龍華齋公門人也、師羨之、遂出家獄、仕于齋公、呼桂林房、不幸蚤羅齋公之喪、時師二十二歲、存純誤走本迹勝劣之異路、築妙蓮寺而居、師亦隨之、於後存純者、識其逆路、造告文謝罪於月明僧正、師獨不移、執弊確如、終構別廬、今之本能寺是也、又築攝之尼崎本興寺、而弘通接度矣、時有本果院日朝、甲州立正寺、駿州光長寺兩山主也、（休息立正寺岡宮光長寺共中老隨一法寺主、職岡宮、矣、）上都謁師、朝素挾勝劣之見、師竭懷傾倒、終日不違、兩人丕喜和者、亦聚、一時呼西隆東朝也、月明僧正聞之、大愕、召至、礼之、師不屈、及議論、累日不眠、工夫千般、一時開悟、獨醒待旦、疾走謝罪、僧正不肯、尙執舊執、於是師造告文、講信、其文曰、敬白起證文、劣弟誤生邪見、爲逆路伽耶陀、後悔千萬、今依師策、捨邪歸正、再浴先師眞正之慈澤、重復造背此旨、現世蒙法華經中三寶池涌大士十羅刹女三十番神日本國中大小神祇冥罰、後生墮在無間捺落者也、仍誓狀如件、應永二十五年三月二十八日桂林房日隆、（花押、師之直筆、）以岡宮迄今不捐異端、惜乎朝亦是時在洛、其師踏吾與國、休息之黨、者細知其非、親炙身延、龍華月明僧正傳所謂河帶山勵者是時之事也、寛正五年甲申二月二十五日、感疾、泊然而化、壽八十一、本能寺今復云勝劣、弗師之志、兒孫之過悲夫、捨邪歸正之誓詞、現爲龍華藏物、不可誣、依而如今係正傳、

後土御門天皇

應仁二年戊子　紀元二千百二十八年

出名寺、飛驒國より婦負郡に移る、

〔八尾郷土史〕　聞名寺の開基は願知坊永承とす、元台家の徒にして美濃の國各務郡平島大御所村に住す、正應三年春、本願寺第三世覺如、其祖跡を慕ひ北陸東關を經遊せしとき、始めて覺如の弟子となり、覺淳と號す、覺如乃ち高祖上人眞筆紺紙金泥九字の名號並に自筆六字名號を授く、蓋し附法の驗なり、是より、布教に從事すること三十三年、元享三年春、飛驒國益田郡武原に移り、一宇を立つ、又吉城郡高原郷吉田村に遷り、一宇を立て、普く道俗を化す、嘉暦元年、大谷に詣る、覺如即ち覺淳が功を賞し、執時鈔一卷（覺如著）與飛驒國願智坊記を書して之に與ふ、並紺紙金泥十字名號と聞名寺の寺額とを授與す、蓋し飛驒國に於て該宗の弘通せしは全く願智坊の力によれるを以てなり、〇略中第四世覺證、應仁二年、越中婦負郡土村に居住す、其後西野積金ヶ谷村に通寺を立て道俗を教化し、越中の末寺門徒多く之に歸す、本願寺第八世蓮如、其功を賞し高祖の影を與へて自ら裏書す、蓋し該宗僧侶の榮とせし所なり、文龜二年飛驒國茂住銀山に一宇を立つ、慶長十二年三月十三日類燒も、大永四年第五世覺證、野積谷の内乘峯村に草庵を造り、又同郡田中の保内福島村に一宇を建つ、〇略中第六世覺照、三男圓秀を飛州聞名寺の留守居となし、婦負郡南部を巡回し布教を努む、時に天文二十年なり、永祿五年八月織田信長制札を與ふ、今尚同寺に存せ、之れよりさき覺照八尾に桐山聞名寺を開く、實に三百六十八年前即ち天文元年なり、覺照は八尾に於ける祖先とも謂ふへく、彼は婦負郡の南部に向て歴世布教に努めたる餘響として、末寺門徒の歸依多かりしより、尤も便利なる地を相したるものにして、八尾の今日あるを致す其功沒すべからざるものとす、時に婦負郡は過半城生城主齋藤氏の領する所たり、齋藤氏乃ち桐山下野等の地を與へて之を保護す、（今同寺に齋藤より與へたる永代寄進狀永祿六年三月二十四日と書たるもの存す、）この緣故により齋藤氏佐々成政と戰を交ふるに及んでは、每に衆徒を集めて齋藤氏を援く、後齋藤氏亡び成政越中の領主となるに及び、聞名寺を保護し、制札を立てゝ庶民の非禮を禁するに至る、（制札に元龜二年十二月二日とあり、）成政亡ぶるに及び、秀吉第七世覺順に朱印の制札を與ふ、（天正十二年八月）金盛五郎八入道の添翰あり、之より越中を本坊とし、飛州吉田村を通坊とす、

文明三年辛卯（紀元二千一百三十一年）七月（壬申朔）

佐渡國勝興寺、礪波郡土山に遷る、

〔雲龍山勝興寺系譜〕　本願寺第八世御留主職中興蓮如上人、即チ存如上人ノ嫡ナリ、諱兼壽、信證院ト號ス、法印權大僧都、寛正年中、宗門大ニ繁昌ス、山徒之ヲ憤嫉シ、寛正六年正月八日、叡山西塔院ノ執行慶純一山ヲ觸メ、十日ノ夜大谷ヘ押寄、堂宇不殘燒失ス、コレニ依テ開山尊像ヲ守リ奉ツリテ、近江國志賀郡南別所近松ノ坊ニ移リ玉フ、寛正六年上人五十一歳、文明三年初夏上旬、近松ノ坊ヲ出テ、北國ニ下向シ玉フ、其ユヘンハ存知上人舍弟宣祐法名如乘律師加賀ノ國二俣本泉寺ヲ開基シ、寛正元年正月廿六日四十九歳ニテ寂ス、コレニヨリテ蓮如上人ノ次男蓮乘ヲ二俣ノ坊ニ住持セシム、故ニ其所縁ニヨリ北國ヘ下向シ玉ヒ、マツ加賀國二俣ノ坊ニ着シ玉フ、夫ヨリ越中ノ國ヲ經廻シ玉ヒ、ツキニ利波郡袋谷庄內土山ニ於テ一宇ヲ建立シ玉フ、文明三年五月二日ト云々、土山御坊トハコレ也、則チ一宗相傳ノ法義ヲ弘宣シ玉フ、餘閑ニ庭砌ヲハラヒ、石ヲ立テ樹ヲウヘテ、シハラク足ヲ憩ヒ玉フ、時ニ往昔宗祖聖人佐渡國ニオヒテ順德院ノ勅ニヨリ草創シ玉フ、勝興寺ノ干戈ノ際ニテヤ、頽廢ニ及ヒ、門徒ノ輩モ離散シ、魏々タル靈場モ破壞ニ及ヒヌヽ、ニ彼ノ佐渡勝興寺ノ門徒某等薩花村住人四郎助橋、資時左四郎與五兵衛等、彼ノ勝興寺ニ安置アル處ノ聖人ノ眞筆ノ御本尊ヲ持シテ、蓮如上人御座所土山ノ御坊ニ來リコノ旨ヲ申シヌ、○中略御本尊ヲ土山坊ノ本尊トシ玉ヒ、四郎助等ノ乞ヘニ任セ、マツ此草坊ヲ殊勝誓願興行寺ト銘シテ勝興寺ヲ再興シ、佐渡ノ勝興寺ノ遺跡ヲ悉ク遷シ玉ヒ、先ツ二男蓮乘權少僧都ヲ住職ト定メ玉フ、○中略

嘉祿元年佐渡國ニ於テ殊勝誓願興行寺成ル、仁治三年親鸞聖人ヨリ元祖信念上人ヘ北陸ノ衆生化益附屬アリ、文明三年七月、越中國土山ニ移リ、彼ノ佐渡國ニ於テ北國ノ化益附屬ニヨリテ前來ノ通リ北陸道七ケ國ノ法頭職トナシ玉フ、明應三年高木場ニ移住、永正十六年二月、堂宇燒失ニ付安養寺村ニ轉住、法頭職前來ノ通リ兵乱ノ砌礪波半郡ヲ領ス、天正九年四月十二日、兵火ノ爲メ灰燼、同年古國府(今ノ地)ニ移住ス、

〔三州志〕　雜錄餘考六　今年丁巳本願寺ノ顯如十一世也、一本ニ實如ニ作ルハ非ナリ越中ノ勝興寺ヲ勝興寺ハ射水郡古國府ニアリ、寺號スル四ニ此頃ハ越中安養寺村ニアリ、寺號四ニ按北陸七州ノ僧錄トシ、僧錄ノ字「參支語錄」ニアリ、是謂ニ僧錄ニ唐立ニ兩錄司於京邑、是北出處也、俗作ニ總錄、是謂ニ僧錄ニ唐立ニ兩錄司於京師者非也ト寺號スル四周之ヲ辨正ス、勢ヒ强大ナリト云、今猶與力寺ト號スル四派ニ子院四百許寺アリ

〔勝興寺文書〕　○射水郡伏木町

其御坊御寺號之儀祖師北地御在居之時分於佐渡國順德院御歸依御建立之寺

號斷絶有之儀ニ候之間此度爲相續其御坊被稱勝興寺與候樣ニ被仰候此段難有可被思召旨御申入可有之候恐々謹言

永正十四丁丑　上野法眼

七月二日　頼慶花押

下間源五郎殿

〔雲龍山勝興寺系譜〕　信念上人ノ古墳及ヒ寺跡ハ、佐渡國雜太郡竹田村ナツワタリニ草創梵刹ノ地ナルヲ、後同國羽茂郡砂金山笹川エ移轉シ、之ニテ元祖ノ墳墓並ニ寺跡アリ、信念上人ノ守リ本尊ト云阿彌陀佛阿彌陀堂ト唱ヒ、今ニ存セリ、墓碑ヲ法名塚ト、寺跡地ヲ野田ト云、明治二十七年三月、檀家總代鹽田幸助荻原撲佐渡國出張、實地ニ取調、該村古老ノ口碑ヲ得、當寺由緒舊記ニ符合確然セリ、

寄附證

善空房信念上人墓地

一反別三畝拾五歩

右金山笹川組字法名院塚往者親王御陵ト唱ヒ、勝興寺元祖ノ舊地ト傳ヒ來候ニ付、舊ニ依リ今般勝興寺ヘ寄附仕候也、

佐渡國羽茂郡小布勢村西三川金山笹川組惣代

明治二十七年三月三十日

金子勘五郎
島倉桂藏
稲田佐吉
査山權十郎
金子石松
吉倉甚作
金子熊次郎
佐々木万次郎
溝口藤三郎

越中國勝興寺御住職

土山澤映殿

前記ノ墓地後ニ公簿登記ヲ得、勝興寺所有ニ復歸セリ、

十月己巳朔

十六日、甲申、幕府、越中守護代に命し、二尊院をして舊領富山柳町の所務を全くせしむ、

〔二尊院文書〕山城

二尊院領越中國富山柳町事、早任奉書候旨、爲直務可被沙汰付寺家雜掌之由、被仰下候也、仍執達如件、

文明三
十月十六日

（飯尾肥前守）爲種（花押）
（齋藤下野守）貞基（花押）

島山尾州代

當院領越中國富山柳町事、如元令直務可被致寺家再興之沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年十月十六日

（飯尾爲種）肥前守（花押）
（齋藤貞基）下野守（花押）

二尊院住持

○永享二年六月九日條、參看すへし、

文明五年癸巳　紀元二千百三十三年

十月己未朔

二十三日、辛巳、大内政弘、畠山義就、游佐越中守等を遣りて淀を守らしむ、

〔東寺執行日記〕十月廿三日、淀へ國方勢下向、游佐越守（脫字カ）譽田、齊藤新右衛門（右衛門佐カ）也

文明六年甲午　紀元二千百三十四年

閏五月乙卯朔

二十四日、戊寅、二尊院領越中富山柳町の地を濫妨するものあり、是日、幕府、守護代に命して之を停止し、寺家の所務を全くせしむ、

〔二尊院文書〕山城

二尊院領越中國富山柳町事、可被直務之旨、先度御成敗之處、於國有難澁之族云々、太不可然、所詮堅被加下知、可被沙汰付下地於寺家代官、若猶不承引者、可被處罪科之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明六年閏五月廿四日　沙彌（花押）

畠山左金吾代

丹後前司(花押)

甘露寺按察中納言殿御添狀

富山柳町事、令奏聞、全勅裁被進候地下事、于今不渡進之條、太以不可然候、爲寺家堅被仰遣、猶難澁候者、忩可有御注進候也、恐惶敬白、

文明七　二月一日

二尊院方丈　(親長)(花押)

御寺領富山柳町事、就當時之儀預給候、心得申候、御年貢等渡分加增候之樣、可致執沙汰候、兩方一途候者、不可有違亂之族候間、則可渡進之候間、如前々可有御直務候、恐々謹言、

文明十九　二月十二日

政長(花押)

二尊院

御報

○永享二年六月九日條參看すべし、

文明七年乙未　紀元二千百三十五年　七月戊申朔

十六日、癸亥、僧蓮如、礪波郡瑞泉寺に來り、眞宗を弘む、

〔賢心物語〕　蓮如上人當寺○瑞泉寺へ文明七年七月十六日御下向ノ時、蓮乘時ノ御住持ナリ、河上ノ衆ヲ始トシテ、當國ノ御門徒衆ウチコリマカナイ申サレ候、順如ヲハジメ申御兄弟衆男女トモニミナ々々御下向候ツルヨシ、了如御物語リアリケリ、○中略　蓮如上人二俣ヨリ當寺ヘ御越ノトキ、ダウケヘ御アガリ候テ御覽ゼラレ候ヘハ、御ハシリ衆サキノ人數ハハヤ井波ヘツキ候トミヘ申スノヨシ仰ラレ候、御ハシリ衆ト申ハ河上ノ御門徒衆ワカキ衆一ヤウニシロキカタビラニカチンノカタギヌノバカマニテハシリ申サレ候ガ、トヲク御覽セラレ候ヘハ、白鷺ノトビ候ヤウニ候ツルトナリ、實如上人被仰候ツル、處聞坊モ度々コノトアリ物語リ申サレ候ツルナリ、蓮如上人坂東ヨリ御上洛ノ時、當寺ヘ

御出ヲナサレ候時ハ、御供衆五人上下トモニ六人御座候エツル、丹後玄永手塚ナド御供申サレ、一人ニテモ御門徒衆モ不被參候エシ、如蓮ト申尼公當寺ノ御留守被申マカナイ被申候、中二日御滯留候エドモ、誰御出候トモナク候エツルニ、文明七年ノ御下向六年以前トヤランノコトニテ候、六年ノ間ニ佛法ヒロマリ申カサネテ御下向ノトキ貴賤群集無限候エツルコト不思議ノ次第ナリ、正了慥ニオホエ申カタリ候エヅルナリ、コトニ御ホカキヲ御供衆失念候テトリヲトサレ候ヲ、正了横根マデモチテハシリ候シツルヨシ語リ候ナリ、如蓮ト申尼公ハ杉谷慶善ムスメナリ、時宗オチニテ候ナリ、文明七年蓮如上人當寺ヘ御下向ノ時、アマリ群集候テ、諸人出入申候事モ一向ニナリ候ハデ、參詣被申方モセメテ一目拜ミ申度ト望被申事モ不叶候ヘキ、シカレドモナニトモ參ツキ候ヘキヤウモナク候ヘテ堪忍被申トコロニ、蓮如上人仰ニハ莊川ヲ被御覽度ノヨシ仰候所ニ、各申サルニ事カホト群集中ノ路次モアキ申ガタキト御供衆被申候所、イカヤウニ候トモ御出ヲナサルベキト御意候間、御コシニメサレ坪野ノソトノ野ヘ御コシカキ出申サレ候ヘハ、貴賤上下男女老少トモニ奉拜賽錢ヲマイラセ候事雨ノフルガゴトク、マタ野カツラニ鳥目ヲ念數ノヤウニツナギ、

御コシカキ衆ノ首ニコレヲカケ候ヘツレトモ取候テハクセ事ト御意候間、トルマジキト仰ラレ候、又マイラスベキトセラレ候ヤウテカナカ申ックシガタク候ヨシ候ヘツルナリ、諸人ノ志ヲ思シ召シ萬人ニアマネク御見ヘアルヘキトノ御調法ノチニサゾト各申合リ候ナリ、其後河原ヲソト被御覽御歸寺候トナリ、

〔蓮如上人御法語〕　文明五年歟ノ年吉崎ノ御坊ヨリ出タマヒテ越中國礪波郡蟬ノ庄ノ内井波村瑞泉寺ノ坊マデ御下向ナリケルニ、此國モハヤ當流門人ヒロマリ、コノ時ハヤ、當宗繁昌ノコトニテ、御下向トテ、人々カズオホク群集セルコトカギリナクシテ、毎日人オホクオサレテ五人十人死セルコト侍レハ、此村ノハヅレニ野尻野ト云所アルニ、カリ屋ヲカマヘテ、人々ニ御見參アリシガ、ナヲ人コゾリテ國中ノ武士ノ輩マデ、マイリコト〳〵ク人オホクテ、御修行ノ道中モナリガタクテ、瑞泉寺ヨリ夜中ニ御忍ニテ又吉崎ノ御坊ヘ御カヘリタマヒヌ、然レハ第三箇度目ニハアマリ一宗繁昌ニヨリ、御修行モナラサリシコトナリ、

〔參考〕

〔大谷寺誌〕

第八世　蓮如上人

名ハ兼壽、童名ヲ布袋丸ト云、存如上人ノ長子ナリ、稱光天皇應永廿二年二月二十五日誕生ス、年市テ六歳、母堂上人ヲ膝下ニ召シ、一宗ノ再興ヲ懇諭シ、言畢リテ去ル、其之ク所ヲ知ラス、十五歳永享元年深ク萱堂ノ遺訓ヲ念ヒ、慨然興宗ノ志ヲ立ツ、三年中納言廣橋兼郷卿ノ猶子トナリ、同年青蓮院尊應和尚ノ室ニ入リ得度シテ中納言兼壽ト稱ス、後チ南都大乘院經覺僧正ニ從ヒテ法相ヲ學フ、文安四年五月、關東ニ行化ス、寶德元年東北ニ下リ、加越ヲ歷テ越後ニ赴キ、宗祖ノ遺跡ヲ訪フテ、國分ニ暫住シ、教化ヲ布ク、道俗德ヲ慕ヒテ歸スルモノ多シ、長祿元年六月十八日、嚴父上人遷化後、職ニ就ク、寛正元年六月、金森善從ノ請ニ應シテ正信偈大意ヲ著ス、同年以後、時機ヲ鑑ミ經論章疏ヲ和解シテ數十通ノ要文ヲ作ル、文辭平易ニシテ凡俗ト雖モ解シ易シ、之ヲ文ト稱シ、凡夫往生ノ手鑑トナス、寛正二年、宗祖ノ二百年忌法會ヲ修ス、當時屢ハ宮闕ニ伺候シテ殊寵ヲ受ク、嘗テ日華門ヲ賜ヒ、之ヲ大谷本寺ニ建ツ、叡山ノ徒之ヲ嫉ミ、同六年正月十日、襲フテ之ヲ破毀ス、上人佛祖ノ影像ヲ奉シ難ヲ大津ニ避ケ、近松坊ニ住シ、

又金ケ森ニ轉ス、山徒三百人再擧シテ金ケ森ヲ襲フ、應仁元年堅田ニ移リ、又佐々木如光カ請ニ依テ三河ニ轉シ、土呂ニ於テ本宗寺ヲ建ツ、文明元年、大津ニ還リ三井寺ノ南別所ニ於テ一宇ヲ設ケ、祖像ヲ安ス、翌年攝津和泉ニ行化ス、三年四月北陸ニ行化シ、七年越前細呂宜郷吉崎ニ於テ一宇ヲ建テ宗義ヲ弘通ス、東北七國ノ宗徒雲集シ、守護代朝倉景敏モ深ク之ニ歸シ、大ニ土木ヲ資ク、六年正月、吉崎ノ僧徒及ヒ來集ノ道俗ニ對シ、三箇ノ要條ヲ述フ、一諸宗諸法トモ之ヲ誹謗スヘカラス、一諸神諸佛菩薩ヲ輕シムヘカラス、一信心ヲトラシメ報土往生スヘキ事、同年三月、吉崎ノ堂舍回祿ス、七年七月、下間安藝不軌ヲ謀リ、富樫政親ノ厄アリ、是ヨリ先、上人他ノ譏嫌ヲ憚リ退去ノ志アリト雖モ、道俗ノ抑留スル處トナリ、果サザリシカ、是ニ至テ吉崎ヲ出テ海路若狹小濱ニ達シ、丹波ヲ歷テ、河内國出口ニ至リ、光善寺ヲ創ス、又攝津富田ニ於テ教行寺ヲ建テ時々來往ス、十年金ケ森善從ノ請ニヨリ山科野村ニ至リ、本寺ヲ經營ス、十一年工ヲ起シ、十二年祖堂成ル、十一月大津近松ノ祖像ヲ遷シテ之ヲ安シ、十四年本堂成リ慶讃法要ヲ修ス、上人常ニ以爲ラク本寺ハモト龜山伏見兩帝以來ノ勅願所タリ、本堂ナクシテ可ナランヤト、是ニ至テ本堂祖堂共ニ備リ、遠近ノ緇素朝昏群ヲ

ナシテ詣ス、(山城名勝志ニ曰山科本願寺ハ寺中廣大在家又洛中ニ異ナラス)七十五歳延德元年職ヲ法嗣實如上人ニ讓リ、信證院ト稱ス、在職三十三年、退隱シテ南殿ニ住シ、尙ホ處々ニ遊化シ、明應初年播磨英賀ニ於テ本德寺ヲ創メ、又大和飯貝ニ於テ本善寺ヲ建テ、五年九月、大阪東成郡生玉庄石山ニ於テ地ヲ相シ、一宇ヲ建立シテ菟裘ニ備フ、嘗テ言ヘラク、我レ今ハ諸方ニ臨回スヘシ、我ニ近クモノハ眞信ニ歸スト、七年四月疾ニ罹リ、八年二月山科ニ歸ル、三月十日自ラ病中ノ容貌ヲ寫シ辭世ヲ題シテ曰、

獲一念信　今詣安養　穢身永絕　法性速證

同廿五日正午頭北面西ニシテ遷化ス、享壽八十五歳、上人夙歳ヨリ世路ノ艱嶮ヲ涉リ、人事ノ苦辛ヲ嘗メ、儉素己レヲ持シ、遂ニ一宗ノ荒頽ヲ興復シタマヒ、其懿德洪績開祖ニ亞クヲ以テ中興上人ト稱ス、明治十五年三月、今上天皇勅シテ慧燈大師ノ諡號ヲ賜フ、

文明十五年癸卯　紀元二千百四十三年

三月　癸巳朔

十日、壬寅、蜷川親當卒ス、

〔三州志〕來因概覽　一書ニ、北面士蜷川新右衛門親當、應永ノ頃(按ルニ應永ハ應安ノ誤カ)、マテ太田城ニ在テ、婦負郡ヲ領ス、新右衛門墓位牌等今新川郡蜷川村最勝寺ニ存スト云、蜷川系圖ヲ按ルニ、親當ハ蜷川七郎親直ヨリ四十八世ノ孫也、親當ノ後猶九世アリ、本氏ハ宮道氏也、親直ヨリ二十五世ノ孫蜷川親吉ニ越中守ノ號アリ、其他ニハ越中守ノ號見エス、親當ノ通稱ニ新右衛門ミエス、三十二世ノ親世、曁ヒ三十三世ノ親長ニ新右衛門ノ通稱ミユ、蓋シ親當ハ連歌ノ達者ニテ、宗祇法師竹林抄七子ノ一人也、後ニ智蘊法師ト號ス、後朝戀ノ歌ニ(憂時ノカタミモトメス起テ行朝露消ヌ道ノ笹原)、又越中ニテノ發句ニ(名モシラヌ小草花サク河邊哉)是等世人今ニ膾炙スル者也、(泉逢錄)ニ蜷川氏元祖河州野崎ノ住士蜷川隱岐守平氏庸天子上北面ノ士也、後小松帝ノ朝、故有テ退居シ、越中多賀庄ニ來リ寓ル、氏庸其子五郎康親、其子新右衛門親忠、其子新右衛門氏榮、(後親成ト改ム)、其子新右衛門親榮、其子新郎九郎親貞、其後ヲ蜷川彦右衛門親重ト云、此人關東ノ旗本トナル、今ノ彦右衛門家是也、又左馬允氏貞ハ氏榮ノ二男也、關東ニ至リ程箇谷ニテ討死ス、其子成人旗本トナル、今ノ八右衛門ノ家是ナリ、氏庸ノ子康親、畠山義則(按ルニ義則ハ誤カ、應仁ノ頃ナレハ義統ナリ)、應仁二年

能州ニ在テ越中ヲ領スル頃、親忠ニ多賀庄ヲ分チ與ヘ、改メテ蜷川庄ト號ス、此地ニ蜷川氏代々ノ墓アリ、最勝院ヲ建ツ、親忠ノ遠祖ニ最勝院光岳ト云法號アルユヘナリ、文明三年一休和尚ヲ招キ、造立ノ師トス、今ニ二百餘歳ト云、畠山氏亡ヒテ親忠閑居シ、蜷川庄司親成ト云、一休ハ康親親忠親成親榮四世ニ相逢ト云、親榮ニ子ナシ、伯父ノ子ヲ養ヒ家ヲ讓ルトナリ、又新郎九郎入道シテ閑微庵ト云、今ノ蜷川寺是也ト云、

〔三州志〕來因概覽二　「白石紳書」ニ蜷川氏宮道親元藏人貞增第一子新右右衛門ト云、剃髮名上壽、善和歌、其弟新右衛門親長剃髮名道標、善書及和歌トアリ、水戸丸山可澄ノ「花押藪」ノ說モ同之、景周近者文化甲戌、安達淳直カ此蜷川館迹測量ノ正圖ヲ按スルニ、今新川郡最勝寺境内ニ存スル蜷川氏ノ古墳墓七ツ並列ス、其第一碑面ニハ蜷川治部少輔永正寅正月廿日卒、其第二碑ニハ蜷川五郎親綱元仁元二月十五日卒、第三碑ニハ蜷川七郎親直建久八年八月廿八日卒、第四碑ニハ蜷川新右衛門親當文明十五卯三月十日卒、第五碑ニハ蜷川新右衛門親熙元祿十四年正月十七日卒、第六碑ニハ治部少輔妻永正六三月五日卒、第七碑ニハ蜷川八右衛門親和元文二六月四日卒トアリ、最勝寺ハ禪宗ニテ、開基ハ五郎親綱也、法名ハ蜷川院大岩親綱大居士トアリ、

〔古今書畫鑒定便覽〕三　蜷川親當

宮道氏ナリ、後法名ヲ智蘊ト號ス、世々伊勢守ニ任ス、武術ニ長シ、和哥ヲ好ンテ大ニ修シ、終ニ精巧ニ至ル、世ニ集外哥仙ト稱スル者ノ一ナリ、家集筑波集アリ、

○續群書類從和歌部所收の蜷川親當百首は略す

〔最勝寺過去帳〕　蜷川氏

家紋右巴

菩提所　最勝寺、

越中國新河郡蜷川里

所之產神代々　諏訪大明神、　祭九月廿七日、

元祖

親直―蜷川七郎、越中國新河郡蜷川庄有館、
　　越中國利波郡、新河郡之內有二食邑一、
　　延久八丁巳年八月廿八日卒、

蜷川元祖諸西親直大居士

治承四庚子年賴朝三十四歳於豆州擧義兵、此時七郎親直供奉勤前驅、

親綱　蜷川五郎、越中國新河郡蜷川庄有館、利波郡、新河郡之内食邑有之、
元仁元甲申年二月十五日卒、

當寺開基太嚴親綱大居士

○中略

親當　右衛門尉、蜷川新右衛門、親元　實親當弟、右衛門尉、蜷川新右衛門、法名公壽、耿人能、
法名知溫、耿人能、
後花園院御字　將軍常德院殿義尚公代、

○中略

當嗣　蜷川治部少輔、越中國新河郡蜷川庄有館、
越中國利波郡、新河郡之内代々食邑有之、永祿年中亡、
仕萬松院殿義晴公、

永祿九丙寅年正月廿日卒、

戰勝院殿惠然道劒大居士、

治部少輔妻　曾澤甲斐守娘、

永祿六癸亥年三月五日死去、

大悲院積屋了善大姉

○下略

〔參考〕

〔大日本人名辭書〕下　蜷川親當は新左衛門と稱す、父を帶刀丞親俊と曰ふ、姓は物部、宮道氏、其の遠祖親直始て族を蜷川と稱す、親當足利幕府に仕て伊勢守に任せらる、武術に通じ、和歌を好み、當時の宗匠に參詞して遂に獨脫の妙を得、世に集外歌仙と稱するものの一に居り、兼て畫を善くす、其畫く所の自像及び鹿居士の像幷に山城壬生寺緣起等あり、嘗て夜烏邊野を過く、女あり茶毘の火に向て座禪す、親當怪みて之を咎む、女曰て「夏せみのもぬけ果てぬる身となれば何かのこりて物おぢをせん」と、親當之を聞きて悟道の貴む可きを感じ、遂に一休和尚の弟子となり、薙髮して智溫と號す、文安五年（一に四年に作る）五月二日卒す、其の病篤きや族友を集め談笑して終ると云、著はす所筑波集あり、（皇朝名畫拾彙、龍門夜話、鑒定便覽）

九月辛卯朔

十七日、丁未、越中の人椎名某、游佐長直と兵を合し、河内楠葉に進み、犬田城の應援をなす、是日畠山義就の兵と戰ひ、犬田城陷り、某戰死し、長直傷き走る、

〔後法興院記〕 八月廿三日癸未晴越中勢椎名上洛云々、

九月十八日、戊申、昨日河州犬田城被責落椎名令生涯、其外數百人打死云々、依是山城水主城沒落、敵宇治邊ニ責入間、引宇治橋云々、自五ケ莊有註進之子細、

〔實隆公記〕 九月十八日、戊申、晴、傳聞河州合戰、左衛門督失其利、越中衆椎名、、落合、當國水主城同敗北云々、驚歎無比類、々々々、

〔親長卿記〕 八月廿八日、雨下、自越中國椎名管領被官上洛、發向河州云々

〔大乘院寺社雜事記〕 八月十八日雨下、古市勢自山城退丁、山內儀、難義之故也云々、豐田吉田各違今市之堤方而寄付古市之手、堤此外(以ヵ)腹立也云々、凡近日越智方合戰不被宜云々、山城河內儀大事、剩越中勢可罷上之由、近日必定々々、旁以難義千萬也云々、

九月六日雨下、去二日遊佐河內守椎名同道三千計犬田ノ後ツメ也、越大川云々、

九月九日、越中椎名出陣樫室町殿、可有御見物由間、夜中ニ京都於罷通云々、甲二百ニ不可過由聞者也、相加テ遊佐之手而楠葉邊ニ出陣也、惣而左衛門督方勢三千許在之、悉以近日楠葉邊ニ取陣了、狹之犬田城之加力用也云々、

九月十八日、昨日河內國サキノ犬田城ノ後ツメ衆與責手ト合戰、後ツメ衆遊佐長直椎名以下大勢打負了、椎名被打云々、遊佐ハ淀川ノスソ楠葉ノ川ニ落入不見云々、數百人頭共畠山右衛門佐方及實撿云々、古市衆井上等高名無是非、少々手負死人在之、敵方死不知其數云々、

〔大乘院日記日錄〕 九月二日、野崎犬田城後ツメ、遊佐椎名三千計出陣

九月十七日、合戰、椎名被打了、遊佐負手、數百人死了、打負退散了、

文明十八年丙午 紀元二千百四十六年

六月乙朔乙亥

十一日、乙酉、幕府、齋藤基守に令し、越中松尾莊を松尾社に還付せしむ、

〔松尾神社文書〕

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀令退轉云々、右不可然、所詮任由緒之旨、早全領知、可被專神役之由、所被仰下也、仍執達如件

文明十八年六月十一日　　沙彌花押

肥前守花押

當社神主殿

當社權神主殿

〔東相愛文書〕

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀合退轉間、被返付當社神主相卿權神主相冬等訖、早可被去渡代官職之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八　六月十一日　齋藤次郎左衛門尉殿　宗勝花押　爲脩花押

越中國利波郡松永庄內松尾社領事、任去六月十一日御下知之旨、可被沙汰付當神主再拜神主代之由候也、仍執達如件、

文明十八　九月十六日　齋藤次郎左衛門尉松長代官　基守花押　越中國同處代官　直秋花押

遊佐新右衛門尉殿

倘々當御年貢事、度々申下候、定近日可到來候、然者即可社納申候、松永庄御停事、度々御催促通、國へ堅申下候處、相賀御時より爲請切申合候、御停不納申候由、返事仕候、當社も御照覽候へ、於拙者非難澁候、南方邊事一途其申談候て、如先々可致了簡候、恐々謹言、

十月二日　齋藤二郎左衛門尉　基守花押

松尾　南殿　御返報　越中國松永南方代官

長享二年戊申（紀元二千四百十八年）　六月（癸巳朔）

九日、辛丑、加賀越中の一向宗徒起り、富樫政親を高尾城に攻む、幕府、朝倉貞泰に命して之を援はしむ、是日城陷り、政親自殺す、宗徒更に能登越中を略す、

〔蔭涼軒日錄〕　五月廿六日、天快晴、賀州土一揆蜂起、相國、富樫介城、以故朝倉合

力之事、自江州御所被仰付使節之事可然仁躰書立之早々可進上之由被仰出、仍大館彈正少弼殿、結城越後守、二階堂山城守、自三所狀來、結城越後守別又內狀有之、以瑞順西堂有內議可被書立之云々、

六月九日、賀州富樫城被攻落、富樫介生害之由、有風聞、

廿二日叔和西堂自越前歸洛、來于當軒云、自越前之合力勢亦無其曲、賀州富樫介之城被攻落、介一黨並生害云々、

廿五日、今晨於香嚴院、叔和西堂語云、今月五日行越前府中、其以前合力勢赴賀州、雖然一揆衆二十萬人取回富樫城、以故同九日被攻落城、皆生害、而富樫一家者一人取立之、

〔後法興院記〕　六月十五日、丁未、傳聞、去八日於加州富樫介令生涯云々、加賀國一揆衆、其外能登越中之一揆衆相加間、及數萬人云々、

〔親長卿記〕　六月廿三日、終日雨下、今日人々來雜談云、富樫介於加賀國與土一揆有合戰事、已生涯云々、去比有沙汰、不請受之處、實事云々、去十日合戰云々、

〔富樫記〕　去ル臘月ヨリ當年五月迄、前鉾相柱、西陣ノ間、纔二十餘町也、角テ日次ヲ送ル處ニ、越ノ兩國御奉書ヲ頂戴スルノ上急キ打立富樫ヲ合力スヘキノ由、其聞ヘ隱ナシ、去程ニ國中諸勢談合ス、傳ヘ聞ク呉子骨ハ眼ヲ拔、呉ノ東門ニ懸、終ニ越ノ蜂起ヲ看ル、彼ル先跡ヲ聽ナガラ、爰元遲ク張防三方セハ、事可爲敗北之基、急キ腹心ノ病トシテ高尾ノ城ヲ責落シナハ、合力ノ諸勢自退散スヘシトテ打立ケリ、先河北ノ軍旅越中口ニ指向ヒ俱利伽羅、笠野、松根城ニ陣ヲ取、又江沼郡ノ諸勢ハ越前口ニ指遣シ敗地福田ニ陣ヲ取ル、同廿六日ニ國中ノ諸勢打立、所々ニ陣ヲ取、先政親祖父泰高、當國ノ守護職ヲ奉仰間、家ノ子郎等ヲ引卒シ、其外諸勢都合二千餘騎、野市ノ大乘寺ニ陣ヲ取、鳥越、吉藤、磯部、木越、彼四頭ノ衆寄合々々僉議ス、〇下略

長享二年六月上旬、一揆等高尾ニ押寄セ、日夜攻之、同九日高尾落城シ、政親自害ス、

明六日、早天ニ諸陣ノ面々大將ノ御陣大乘寺ヘ打寄セ、思々評議ス、〇中略　斯ル處ニ從越中口註進申ス次第ハ、越中四郡ノ郡代奉書ヲ頂戴スト雖モ、賀與越ハ如唇如齒、唇ナクンハ齒寒カラン、今度ノ合力如何可有ト僉議スト雖モ、上裁頻ナル間、不及力去來打立、東方郡諸勢濱放生津ニ陣ヲ取、中郡之衆吉江、日澤ニ陣ヲ取ル、利波郡ノ軍兵蓮沼ニ打寄セタリ、爰ニ當國ノ牢人阿曾孫八、小杉新八郎被

申、我等爲本人之間、一番合戰仕ルヘシ、都合其勢二千餘人俱利伽羅口ヨリ乱入、去程ニ河北ノ軍旅莫田ノ光濟寺ヲ大將トシテ、不敢取遂合戰、入來戰負引退處ニ追懸追懸、究竟ノ兵矢庭ニ三十余輩討捕ル、其首進上申シ、猶々是競ヒツヽ、通霄諸陣可打立用意也、山城籌火映天、連星寄手籌火地ニ滿、日ニ續ク、

〔賀越鬪爭記〕　故本願寺門類不安思テ別ナル子細ナシ、富樫介殿則法敵ナリトテ、長享二年賀州申不及、能登越中諸國類葉籌策ヲ廻シ、一揆悉打莅テ富樫城四面取卷、晝夜數日火水ニナレト攻ケル程ニ、富樫既打負、城中ニ於テ、九月九日ニ腹ヲソキラレケル、○中略去程賀州ノ一揆等富樫介ヲ退治シテ、喜悅ノ餘リニ一天四海ヲ此一宗ニナスベシトテ、先越中國ヲ打タイラケ、又能登國ヲ責フセケル間、畠山修理大夫ハ江州余吳ノ庄ヘ牢人有テ、暫ヲワシマシケル温井備中守ハ越前ヘ退、堀江カ館ニ居レケルナリ、如此加賀越中能登國モ一揆ノ手ニ入ケル程ニ、奢侈ノ餘リニ越前退治ノ同文ヲ諸國ノ門徒ニ遣シケルトナリ、

〔續武將感狀記〕　山崎長門守勝資ハ越前國ノ人ナリ、長享二年加賀能登越中ノ一向門徒亂ヲ與シ、加賀ノ國ノ守護富樫介政親ヲ攻テコレヲ殺シ、能登國ヲ襲テ畠山修理大夫ヲ追出シ越前國ニ打入ントス、○中略抑コノ亂ノ張本ヲ尋ヌルニ、加賀能登越中ノ國々ニハ高田專修寺ノ眞佛上人ノ門徒多カリシニ、文明ノ頃蓮如上人北國ヘ下向アリテ、越前ノ國吉崎ニ一宇ノ道場ヲ建立アリテ、勸化說法繁昌セシカハ、終ニ北國ニ本願寺派高田派ノ兩門徒ヲ爲セリ、兩派互ニ宗義ヲ讚譚シ、最負ノ法論ヲ起、其終ニハ合戰ニ及フ、是ニ於テ守護ノ富樫介高田派ハ古シ、本願寺派ハ新シケレハ、是ヲ停廢スヘシト云、門徒ハ高田ハ枝葉ナリ、本願寺ハ根本ナリ、何ソ根本ヲ停メテ枝葉ニ循フヘキヤト云テ、忽ニ怨嫉ノ念ヲ募テ殺伐ノ鼓ヲ擊、富樫介ヲ寃殺ス、

〔參考〕

〔瑞泉寺記錄帳〕　文明七年八月廿一日夜、富樫介政親カ下知ニ依テ、能美江沼侍ニ高田專修寺之門葉之坊主百姓トモ、吉崎ヘ押寄、放火シテ一宇モ不殘燒亡ス、夫ヨリ本願寺之門葉トモ、一揆ヲ起シ合戰止事ナシ、サルニ依テ石川河北之二郡ニ有ル所之本願寺之門葉之坊主百姓等之首ヲ切、其外一味モセサル者ハ國ヲ追出、故ニ當御坊加州ヨリ逃來ル坊主二百餘人、百姓町人男女共數ヲシラス越中ヘ逃來リ、我カユカリ有在所ヲ賴テ居ルモアリ、先坊主分ハ大半當寺江寄集ケル、然ルニ文明十三年之春、山之雪モ消、世ノ中物騷、加州ニハ冬中ヨリ合

戰止事ナシ、爰ニ福光城主石黒右近光義トテ其頃利波郡大半領シ家富ケルカ、加州富樫介政親カ方ヨリ申送ケルハ、近年本願寺派ノ坊主百姓一揆ヲ起、言語同斷之フルマイ、去ヌル頃石川河北之坊主トモヲ追出ケル所ニ、瑞泉寺ニ寄集メ候條、貴殿之軍勢ヲ以テ瑞泉寺ヲ燒亡シ、坊主トモ首ヲハネラルヘキ由密ニ頼ケル、是迄越中ニ本願寺門葉多シト雖、末國主地頭ヘタイシ弓ヲ引者ナシ、然ルニ石黒右近政親カ頼ニ應シ、一家一族ヲ集評定致ケル所、センキマチ〳〵ナリ、石黒申ケルハ、近年一向宗ハヒコリ、ヤヽモスレハ國主ヘ對シ我儘之働、其上瑞泉寺江加州ヨリ辻來リ集坊主トモ、若一揆ヲ起シ加賀ノコトク騷動及ハヽ、國ノ亂ト申モノ也、未其企ナキ中ニ瑞泉寺ヲ燒亡、院主坊主トモカラメトルヘキ也ト申ケル、是ニ一決シテステニ文明十三年二月十八日ニ出陣有ヘキト密ニ支度ヲ致ケル、此事當御坊聞ケルハ、御院主兵部卿（遊乘御事也）慈セ給、竹部豐前ト御示語有テ、若シ押寄來ラハ、當寺堀土手モナシ、其上武具ノルイモナシ、イカヽセント有ケレハ、一座ノ人々申ケルハ、御下ノ坊主百姓ヘ此樣觸一戰ニヲヨヒ、若味方軍ニ利ナキ時ハ栃原ヘ引登テ五ケ山ニカクレ時節待ヘシ、先急々坊主百姓ヘ申聞ヘシトフレケル所ニ、此事ヲ傳々一味坊主百姓共數ヲシラス、然ル

ニ石黒右近軍ハ不意打コソ道ナレトテ、青王仙惣海寺之衆徒ト示合ケルニ、衆徒近年一向宗ハヒコリ、天台宗門葉モ日々一向宗成コトイキトヲル時分ナレハ、衆徒三百余人石黒ニ一味シテ、二月十八日ニ、福光ヲ出馬スル、先陣ハ野村五郎、石黒次郎左衛門五百余人、二陣ハ惣海寺衆徒三百余人、本陣大將石黒右近五百余人、後陣千余人、都合其勢千六百人押出シケル、然ルニ當寺ヘ馳集者ニハ、五ケ山勢三百余人、近在百姓二千余人、山田谷又ハハンヤ野郷之百姓千五百、其外射水郡百姓千人、斗坊主二十三人都合五千余人、竹鑓クマテ棒鎌ヲ持テ井波ヨリ一里西山田川ヘ押出シ、今ヤヲソシト待ニケル、石黒カ勢案ニ相違シケルカ、坊主百姓ハラノ事ナレハ、ケチラカサント、先陣五百余人衆徒三百人一手ニ成テ押寄火花チラシテ戰ケル、爰ニ二俱本泉寺ハ富樫介カサイソクニ應テ有ケル、依テ其儘ニサシヲキケルカ、此事ヲ傳聞加州山湯涌谷者トモ馳走集二千余人二手ニ成、一手ハ青王仙惣海寺（泰澄大師建立ナリ）ヘ押寄、折節衆徒ハ井波ヘ赴、留主ナレハ老僧達斗也、然ルニ百姓共一宇モ不殘火放燒亡ケル、寺院凡四十八坊有シ所一夕煙ト成ニケル、一手ハ千余人福光城下ヘ押寄町ニ火ヲ懸城ヘ込入ケル所ニ、大方井波ニ出陣之留主ナレハ、女ハランヘ逃走ハカリニテ、アセク者壹人

モナシ、然ルニ石黒カ物見申ケルハ、育王仙惣海寺院坊燒失ト見テ、谷々ヨリ煙立登事ヲヒタヽシトノ注進ニ、三百人衆徒フリカエルニ、山々谷々ヨリ煙立登コハ不シキト思中ニ、福光之城下一面ニ燒登、石黒勢前ニハ一揆坊主百姓五千余人支タリ、又福光ヨリ加賀勢二三千押寄城ニ火ヲ掛ル由申來ケレハ、石黒千六百余人我先ニト逃散ケル、石黒ハ主從三十六人安居寺サシテ引ケル、井波勢逃ヲ追テ首取ル事七百余人、馬物具ヲ奪取テ引ケル也、夫ヨリ野尻ヘモ押寄ケレハ、坊主ニ叶スト思テカミヲソリ衣ヲ來テ井波ヘ來ケレハ、利波郡ハ瑞泉寺領ト成ケル也、爰ニ加賀山ノ衆示合サルニ起ケル事ヲ尋ルニ、坊阪四郎左衛門ハ石黒分家ニテ桑山城ヲ預ケルニ、委細有テ四良左衛門ヲ追出ケル、四良左衛門ハ桑山立退出、土山安養寺有ケルカ、石黒企ヲ密ニ聞テ加賀衆ヲカタライケルニ、早速一味シテ育王仙燒拂、福光江押寄、火ヲ懸ケル時ニ、安養寺大將ト定ケル軍濟テ後、山田川之事ナルカ、西ハ安養寺領ト定ケル、川東ハ瑞泉寺領也、石黒ハ富樫介頼ニヨツテ一揆起シケルニ忽燒亡ケル、然ルニ川上坊主百姓安居ヘ押寄ケレハ、石黒主從十六人腹切テ相果ケル、首ヲ取テコクモンニカケケル、是ヨリ利波郷士國侍地頭ノコラス降參シテ井波ヘ來ル也、夫ヨリ井波ヲヨウカ

イニカマヘケル、安養寺ハ神田入ニ再建、時ニ文明十五年也、

〔三州加越能名跡志〕○石埼記錄所收　誓尊傳　傳ニ曰ク、誓尊ハ當寺九世誓海ノ孫ニシテ、慧燈大師四子權大僧都蓮誓公ノ長子ニシテ、母ハ海カ女ナリ、曾テ誓公私ニ當寺ニ入ル、兄ノ蓮乘公土山坊（本郡土山村ニ在リテ、蓮師ヨリ轉シテ加州二俱創セラル、乘公初テ嗣カル）本泉寺及本郡井波瑞泉寺ニ入嗣ガルノ時、誓公當寺ヨリ出テ土山坊ヲ嗣カル、後ニ此坊ヲ本郡安養寺村ニ移シ、安養寺ト改號ス、其後加州江沼郡山田ニ光敎寺ヲ創シ之レニ遷ラル、誓公ノ子實玄律師安養寺ヲ嗣キ、其弟顯誓法印光敎寺ヲ嗣ク、是ヨリ先誓尊ハ當寺ニ於テ生ル、誓公土山坊ヲ嗣カルノ時ニ、尊ヲ止メテ置ル、因テ誓海ノ嗣トス、文明十五年尊カ幼稚ナルヲ窺ヒ本郡木船城主石黒左近光重當寺ヲ燒擊ス、當時本郡福光ノ城主ヲ石黒右京ト云、是石黒氏宗家ナリ、其一族ノ暴政ヲ百姓大ニ怨ミ、一揆蠭起シ、屢福光木舟二城ヲ攻ル、百姓又蓮乘蓮誓二公ヲ推テ君主トシ敢テ背カス、福光木舟非ニ封ヲ割テ講和ス、因テ其他ヲ瑞泉安養二寺ノ有トス、爰ニ於テ當寺再建ノ事業ナリ、盛隆古ニ倍セリト云々、

八月　壬辰朔

後土御門天皇長享二年

二十七日、戊午、義熙、美作遠江加賀越中の地を常在光寺に寄す、

〔蔭涼軒日錄〕　八月廿九日、上略、晩來常在光寺住持文和和尚、同二才首座一來云、昨自鈎之御所一被二召出一、二階堂山城守、松田丹後守以二兩人一被二仰出一、子細者伊勢鶴壽丸跡四ヶ所御寄進于常在光寺云々、御寄進狀云、

寄進

常在光寺

美作國鹽湯郷公文職

遠江國深見郷加賀國

中興保越中國和澤村

等伊勢鶴壽跡

右所寄進之狀如件、

長享二年八月廿七日

右近衛大將源朝臣御判

御禮事談合、恐云、三千疋折紙、副以二杉原十帖一、此分可二然乎一、可二被相尋一、二階堂城州云々、仍美作國鹽湯郷公文職代官事者、此方江可二被仰合一、定庄主可二白付一云々、住持並

才首座領掌之、下略

九月四日、常在光寺住持文和和尚來云、參二江州御陣一、致二御禮一、皆以二二階堂意見一相定、禮物二千疋進上、千疋松田丹後守、千疋二階堂城州、五百疋結城越後守、其外所々奏者、御奉書立紙、守護方江同折紙、地下江加判飯尾左衛門大夫爲規、伊勢鶴壽知行五ヶ所四ヶ所、御寄進于常在一ヶ所、丹後國第一之所領也、結城七郎賜之云々、

十一月　庚申　朔

十二日、辛未、越前以下十五國に令し例に依り采女料を進めしむ、

〔宣秀卿記〕

當國役采女養料、任例可二令進濟一、給二天氣一、執達如件、

十一月十二日　左少辨宣秀

越前守殿　○中略　越中守殿　○中略　駿河守殿　以上十三通一采女來申之

土左守殿　三采女申之　近江守殿　十二月五日　甘露寺

明應二年癸丑　紀元二千百五十三年　乙未　朔

四月

十八日、壬子、妙傳寺日敎寂す、

〔本化別頭佛祖統記〕　二十

越中高岡邑妙傳寺開山日敎上人傳

師諱日敎號大覺院弘化度生所往饒益也越之中州新川郡太田庄之間有陀羅尼村應仁元年丁亥師經過斯地意有所感營造法流山妙傳寺於後六條大僧都日助呼爲北地弘通處其後權僧正日禎佐州參拜之時寄寓富山造法流山妙傳寺蓋驗助公盛意也其後加州金澤府造法流山妙傳寺是以六條一派北地弘通處有三之法流山妙傳寺而寶幢盛然蓋師陰德之陽澤乎明應二年癸丑四月十八日泊然而化壽七十五而生前行業轉經二千餘部說法七百六十三座云、

六月甲子朔

二十八日、辛卯、細川政元、大將軍義材を小豆島に流さんとす、是夜、義材脫して越中に走り、神保長誠に投し、檄を諸豪に傳へて兵を徵す、

〔蔭涼軒日錄〕　六月廿六日太郎右衛門來、勸一盃、話云、正恕之御所者、可有御座于小豆島、讃岐說有云云、廿八日今夜義材將軍御沒落、人皆不識之、七月旦初人皆傳之語也、

七月朔、癸巳、今夜暴風暴雨、其中間義材將軍御沒落云云、

○日錄二十八日沒落に作る、蓋實を得たり、其朔日條は傳說を記するのみ、諸實錄二十九日に作るもの亦同し、

〔後法興院記〕　七月一日、癸巳、傳聞、今出川殿去夜逐電云々、此間上原紀伊守宿所ニ被移住、自去々月頃事也、曇花院○又通玄寺と云ふ、義視細々被云々、定日來有計略之儀歟、未知落所云々、去夜警固番香河云々、定可及生涯歟、

十六日、戊申、傳聞、今出川殿下向越中云々、神保致警固間、近國少々申御禮云云、高運至也、天下安危在此時乎、○越中は畠山政長の管國なり神保長誠は蓋其守護代なるへし、

〔親長卿記〕　七月一日、陰晴、今日或人云、去夜將軍義材當時人々號正覺寺御所、俄御逐電、不知其行方、去四月自河州陣御落之後、奉押籠上原左衛門大夫許了、後聞落留越中給云々、

〔拾芥記〕　六月廿八日、河內御所落、行衛門大夫所給云々、

〔大乘院寺社雜事記〕　七月二日、上原在所ニ御座、公方晦日夜遁出給、田村衆悉御共申、何方ニ御出哉不知之云々、木阿ミ相殘之間、召取之云々、

七日、楠葉備中守自京都罷下、公方ハ三乃國ニ御座之由云々、

十一日、去七日通玄寺殿ハ入御御臺御方、今度御沒落事、一向無御存知云々、此子細則可被仰細川云々、公方御在所未聞是非者也、旁以希有也云々、

十二日、石左衛門尉昨日自京都下向、此間三乃國ニ在國也、是心院殿御返事持來、國中無殊題目、

將軍ハ御在所未聞者也、

上原紀伊守進退事、細川名字ニ可加之旨、自屋形一族並內者共ニ申之、得其意、但重而申合可返事申旨、返報申云々、希有事也、

或說、又紀守細川內物申合、可令生涯之由必定間、自屋形以誓文自今以後一切題目、紀守爲一人申事不可聞入之由云々、仍先以無爲云々、隨而一天下公事、細川不可成敗旨申之、仍沙汰事無之云々、是又不思議云々、

十六日、公方ハ越中國江御下向、大綱必定旨、聞之和州牢人、越中下向、罷上於路次、參會間、則又御共申罷下了云々、

八月十一日、高矢辻子此間自北國罷歸將軍御所ハ越中ニ御座、七月一日ニ江州ニ御下向、自其越中御下向也、其後能登國守護參申、加賀國司參申、越後上杉以代官申入之、武田ハ細川與申合事在之、自身ハ京都ニ可罷上、若狹一國事ハ御上洛ニ可被召具之由申入之、近々各仰天云々、近習者七十人計ハ參申了、所々御內書以下被進之、大內方ヘ被仰遣事在之、御返事ハ不承及罷上云々、

三年、三月廿六日、是心院殿御文到來、披見之、去八日御文也、松殿祗候云々、北國御所無用人共馳參計也、無御憑者共云々、

廿八日、松殿使馬場九郎左衛門來、書狀十四日付也、十六日立國云々、京都ニ直在之、持是院無等閑之間、心安在國、是心院殿御祗候云々、自北國ハ度々御內書到來、畏入旨申上云々、

十一月十六日、去月九日松殿越中ニ參申、持是院申入子細在之、五六ヶ國間事、子細在之、今月十日比可歸來云々、

三年附加

近日浮說共

公方御使田村ハ去月廿七日越中御所ニ歸參、大內出陣、定日事伺申、大內方ニ令返事云々、大友以下西國衆各可上洛云々、（正月十六日御內書、四月四日大友拜見之、同廿三日御請、）

細川於津國可相支之由、內々用意云々、

〈大乘院日記目錄〉　六月廿九日、公方自上原在所御沒落、御共少々、細川方仰天

云々、越中國ニ御下向歟云々、神保奉守護之、近國皆以參上、

〔興福寺寺務方記〕　七月、去廿九日夜、今出川殿樣上原紀伊守館ヲ忍テ御出云々、方々人ヲ遣尋雖申無御見云々、仍御遁世者木阿召取云々、○遁世者ハ卽同朋ナリ

辛丑日○九

出川殿樣越中國ニ御座之由、其沙汰アリ、

〔勸修寺文書〕

西林院　神保越前守
御同宿中　長誠

其後者久不能拜顏候、御床敷存候、仍世上之儀言語道斷次第候、就中公方樣之七月初御下向候、不慮之儀爰元馳走此事候、隣國各不存疎略之樣候間、目出存候、御新念肝要候、將又我々自去正月初冷半中風于今散々式不能判形候間、以印申候、其恐不少候、猶々逸見民部丞方ヘ御懇被仰下候、恐悦候、年內無餘日候間、來春ヲ早々可申候、恐惶謹言、

十二月十三日　長誠印

西林院
御同宿中

逸見駿河守殿御返報　伊地知民部丞　直質

就勸修寺御門跡制札之事、預御狀候、雖從方々被申候、未遣候、雖然其より承事候之間、調進之候、諸事目出度、重可申入候、恐々謹言、

七月廿日　逸見駿河守殿御返報　直質花押

〔狩野文書〕諸家文書所載

就今度不慮之儀、供奉輩馳上之處、相殘堪忍一段感覺候、殊當國下向之處、馳參之條、誠忠節至極候、彌抽戰功者可爲神妙候也、

明應三年二月二十四日　狩野左京亮とのへ　花押

〔相良文書〕

相良左衛門尉殿　義興

誠年甫之嘉祥珍重候、抑近日之無音、殊舊冬開陣之時、宜巨細自是可令啓候之處、依遼遠之儀、書狀之參着彷彿之樣候間、乍存打過候、結句遣而御懇問、雖不始之儀候、祝着無極候、既敵及對陣、度々合戰、得勝利候之刻、公方樣至越前被移御座候、就其被仰下旨候之間、先令歸國、可相談之由、年寄共依申之、任衆議候○略○下

正月晦日○明應三年ナラン　義興花押

〔武家年代記裏書〕　明應二年六月廿九日、御忍行、則御下向越中國也、

相良左衛門尉殿○續ヵ

〔金言和歌集〕

九重乃　都れうとも　見さ淀あ〜れ　世れ中いとゝ　うたふ谷の　よるへ
もさらぬ　人さゝろ　さゝめなけれゝ　あもの川　ぬちゝせとなる　なら
ひのゝ　代ゝ乃むら〜も　ゑめ〜あと　おとさらさたの　御所さほの　御
身のうへと　いろ〜ゝ　人の物いひ　さらふくき　との葉草と　さろ〜
め〜　年乃ならとれ　六月れ　夜半の雨風　とけさくも　かゝなとさゝく

よまきさゝ　都れうちと　さのひいて　あ〜ゝまかせて　とちこちの
ゑつきもさらぬ　山中と　おほつらおくも　さとりつゝ　いまみうゑう
き　さ賀れさと　花をのもきて　樂らさきや　見きとゝさてる　一まりと
御身ゝゑくへて　たほ〜さら〜　とほへとるらゝ　行なやゝ　いふせた小
屋ゝ　御あ〜と　さむ〜　ゑもめ　夜乃うちゝ　あ〜とけ小舟　さ〜て行
さよりの風ゝ　まらせつゝ　かたゝのうらと　うちもたて　まゝの入ゑ
の　さゝおゑれ　とともたひて　兵ゑらむ　といらゝおほ〜　め〜さる
ゝ　人ゝともゝ　うき〜りむ　身乃行もゑと　やもられと　思ひ谷らひて
もろ〜の　神ゝいのりと　かけまくも　かさ〜けな〜や　との りら
ちくふ〜ま狩も　ぬ〜たらゑ　心のみちと　もとめきら　さて〜も為に
れ　むく井ゝら　おもひのやら　うき身世の　かくなる事の　つらさの
ゝ　思ひなけゝゝ　袖のつゆ　さのゝこほるゝ　ゑちの色の　草むらとく
る　たひころも　さやれ行こそ　あとれなれ　さかるところゝ　その事と
たもひて　さもや　都ゝは　ゑらきいや〜き　もろ〜の　家の人〜
たり〜ゝ　うたひさらもり　さふ谷うゝ　心狩のふる　まりあそひ　犬
らさらけゝ　日とくら〜　御代乃おさまる　まつりこと　道れ道ある　せ

いたひを　はふ〳〵　さたも　おらりけり　ぬきやうどう人　ひまあれは
ゑいいさつらま　よりあひて　むくちをゆこ六　おふひふは　非をうりを
ミれ　もぬけるふ　あヒれ　おゝろとひる返〳〵　諸家れ人ゑ　ぜんちよくゑ
ゐ〳〵や本所領　返〳〵つけきんちうおれる　時代ゑも　あふさら山の　さ
ねらはふ　かゝるおろ〳〵も　國〳〵れ　民乃らはとも　ヒたとひて　四方
もゆさらふ　君ら代れ　やもくおさまる　時と〳〵もら能
たさまれる時り御代ゑそあふさりのせきれ東の國も去りりふ
越中國とのさくあひふまゐいろ〳〵きいりやくとめくら〳〵侍るとなん

紀友持

いれち身とまつゑくをちて神保い雪れ山よりいてんものゝふ
都鄙のらくちやくとおもんとのり身とのへヒと侍りてゐ〳〵や本所ヒやう
等古のおとくと〳〵く返〳〵つけ侍ら〳〵と給らひ々るまゝよめる

紀貫恒

越中とひとりゑくめるれとの國加賀越前もぜんちよくゑなれ
神やうくヒんらくゑよりさんちんとそおヒヒ々るおゝろとよめる

まりいさそくる〳〵らるらん神ほうとうらみかやなる左衛門のおと

紀貫恒

〔小早川什書〕　御判　本書モ寫故、御判無之、
云馳參正覺寺陣云越中國供奉忠節之條爲勳功之賞所宛行也早吉見右馬頭義
隆領掌不可有相違之狀如件、
明應四年七月廿八日

〔蔭涼軒日錄〕　明應二年四月六日、悅菅來話之、藤也看病於越中、神保逝去云々、
有姪一跡相續云々、（長祿中風ヲ憂ルコトヲ勸修寺文書ニ見ユ逝去ハ訛傳ナリ）

〔和長卿記〕　明應七年九月四日、丁晴、傳聞去朔日、北州前大樹著、或京都將軍爲
追討云々、或又於越中國、神保越前守依奉厭、却而沒落越前國云々、未知實說之間、
不能是非候歟、

〔下總集〕　明應の比將軍家越中國ゑ御座の時、常光院堯盛はいり侍しつ寸て
ゑきたりて、歌よゑけるに、春雪、
らすゑていおも影きえ〳〵山の端とうはをあらいす今朝の雪哉
越中國ゑ侍〳〵比、堯恵法印藤坊きたりて歌よを侍り〳〵に、雨中待花、

時日よりそふゝ木のめも春の雨はおも影ちらく花そまさるゝ

明應の比加賀國若松とゝふ所ゝ侍りゝ時よめる歌の中ゝ

たもひるゝ四方ゝこもゝ乃花ゝたゝゝおゝゝろのうちの山さくら哉

越中國ゝ侍ゝ比越前守長誠神保もとゝて、開郭公、

關守も今夜やゝゝゝんゝとゝきゝなく一こゝゝゝ人とゝゝめて

明應の比將軍家越中ゝ御座の時飛鳥井中納言入道家下ゝゝいり給て、和歌御

會申さゝ侍ゝゝ雨中橘といふとゝゝらうまつりし、

雨もくゝる軒のゝち花のゝゝゝもみもゝゝゝゝゝゝ斗おもき露哉

明應のころ將軍家越中國ゝ御座の時法印堯惠旅宿ゝて題とさくりて、歌ゝ

み侍ゝゝ、古郷秋夕、

別ゝゝ古郷人乃ゝゝへてもむゝゝゝゝろもいりゝ秋の夕くれ

將軍家越中國へ御座とうつされゝ比九月ゝりにゝれひて馳參とて、伊勢

尾張美濃國とへて飛驒の山中とゝえけるゝ今年生の楓の二葉なるゝもみ

ちさるゝとりてともなひきゝる、法印々秀三井寺法實院ゝ中待ゝ、

二葉よりもみちそめていく秋の時雨ゝ色とまさんとすらん

明應三年甲寅　紀元二千百五十四年

七月丁亥朔

十七日、癸卯、前將軍義材越中にあり、將に京に入らんとし、命を紀伊の諸寺に傳へて力を効さしむ、

〔座右集〕後鑑所載

七月十七日、就上洛之義、此時一段致精誠忠節者、可爲神妙候也、

御判

惠林院殿明應三七月十七日

大傳法院衆徒中○紀伊那賀郡にあり世に根來寺と云

大傳法院預衆中

大傳法院行人衆中

金剛峰寺衆徒中○紀伊那郡

粉川寺衆徒中○同國那賀郡

熊野山本宮衆徒中○同國牟婁郡下

熊野山那智衆徒中

熊野山新宮衆徒中

右各一通宛被成之御文言同之

○九月二十一日擧兵の條參看すへし

〔附錄〕

〔大乘院寺社雜事記〕　正月十二日、將軍御上洛事、細川方色々申沙汰云々赤松以下計略云々、畠山左衛門督政長存命、自伊賀國罷出、下向越中國、所々へ書狀在之、號庵主令入道了、

六郎左衛門

土井同入道出入浦上方云々、

大內雜掌——在京都、

畠山和與事、及其沙汰云々、

九月丁亥朔

二十一日、丁未、前將軍義材、兵を越中に擧く、

〔大友文書〕伯爵立花寛治所藏

以前遣內書候之處、於于今一途之注進未到來候、候無心元候、先度其懇切之間、無比類候、旁以雖不有疎略候、重而之仰候、早々上洛之儀、憑覺候外無他候也、

五月十四日　（花押）

大友修理大夫とのへ

就上洛之儀、條々以親久申之旨、誠憑敷覺悟、通難盡、短書候、定日之事、九月廿一日相定候、可達本意事、可依戰功候上者、偏憑思食候也、

七月廿三日　（花押）

大友修理大夫とのへ　○親材

就上洛之儀、條々修理夫夫懇申間、感悅候、相共抽戰功候者、可爲神妙候也、

七月廿三日　（花押）

大友豐前守とのへ　○政親

去月廿一日出陣候、早々參洛待入候也、

十月三日　（花押）

大友修理大夫とのへ　○親材

只今之仰子細段被成其覺悟候ゝ、尤可爲本望候、猶親久被傳語候也、

十月十日　大友修理大夫とのへ　（花押）

就上洛之儀懇切之至無比類候、殊九州悉相調由候、併依調法如此之條、大慶非一候、彌忠節肝要候也、

十月十九日　大友修理大夫とのへ　（花押）

雖度々被仰候、猶早々參洛待思食候、殊對親久書狀披見候、密談之兩條不可有相違之由候、尤憑敢候、彌不被移時日者、可爲神妙候也、

十二月一日　大友修理大夫とのへ　（花押）

南鎌壹到來候、畢神妙候、仍太刀一振吉平進之候也、

十二月二日　（花押）

大友修理大夫とのへ

〔前田家所藏文書〕

就今度御上洛諸國諸被官人事相催之、可被供奉、然各於所帶以下者不可有相違、若有令違背之輩者、可被加其成敗由、所被仰下也、仍執達如件、

明應三年八月廿一日　若狹守（花押）　沙彌（花押）

吉見右馬頭代

〔後法興院記〕　八月十一日、丁卯、世上物云（然カ）以外事也、自越中正覺寺可有上洛云々、

九州衆悉令同意可賣上云々、

八月廿七日、癸未、陰及晚小雨、灑民部卿來、世上之儀種々雜說滿卷云々、來月五日、自越中大樹可有上洛云々、

十月廿日、乙酉、傳聞九月廿二日、大樹於越中被上旗云々、○廿二日は廿一日の傳聞の誤

〔和長卿記〕　七月廿日、丙辰、晴、天雨、近日北州前將軍可有入洛之由風聞、定是天下亂逆之基歟、鎭西輩大内介等新奉結搆、

〔大乘院寺社雜事記〕　十月廿一日、彌五郎白賀州罷上、越前事無殊儀、越中事來

三月ニ御延引、去月廿一日被上御幡了、

十一月六日、越中御所ハ如風聞、九月廿一日神保館ニ御座被上御幡了、無殊事、

〇大友文書に出陣の文あれとも、之を雜事記に參すれ、蓋出征の儀を擧行せしのみ、二年六月廿八日條參看すへし、

明應六年丁巳　紀元二千百五十七年

九月己亥朔

前將軍義材、將に越中より京師に入らんとす、果さず、

〔大乘院寺社雜事記〕　五月五日、越中御所、六月可有御上洛旨、必定々々、河口口〇内ハ正覺寺左衛門督〇畠山政長ハ存生必定旨、有其說云々、希代事也、自去年世間ニ申事也〇政長存生の說は固とより訛なり

十六日、越前者相語、今出川殿ハ來八月可有御上洛也、朝倉御共可仕云々、於彼國中沙汰云々、

廿一日、今出川殿與細川間事、岸田以子、相尋細川何共不覺悟旨返事、仍岸田令安堵、向河內了云々、

七月三日、越中神保之內者、藏河、去月廿三日立國罷上、料足濟々持之、來日又上留之數千貫云々、是公方御歸京之用意云々、子細如何、來八月御上洛云々、

八日、世間浮說、寶仕院養春院領悉公方御料所ニ被成、花頂殿領悉以被成御料所、圓滿院殿分歟、如何、所々爲新將軍之御料所可有隱居、北國公方可有御上洛之儀、必定故云々、不思議々々々々、

廿二日、越中使鞍川十四日細川在所ヘ出仕申合云々、

八月廿六日、難波下向、京都事相語、山城道不通、來月十六日越中御所可有御上云々、

〔附錄〕

〔梅花無盡藏〕

越之中州放生津之小坂凝清老人求詩、老人蓋神保一族也、是時將軍在越之中州、來移蹕於越前、傳聞越有放生津、爲護將軍皆仰神、今日逢翁髮雖雪、如花笑語意猶春、

明應七年戊午　紀元二千百五十八年

九月甲午朔

二日、乙未、前將軍義材、上洛を圖り、越中を發し、是日、越前に至り、守護朝倉貞景に依る、

〔後法興院記〕 五月十九日、甲寅、越中大樹ニ被召仕吉見右馬頭、自去正月末邊罷上坂本ヨリ河内江罷下、此間自河内上洛、下京ニ逗留云々、自細河京兆有申談事云々、從諸家令音信之由聞及間、今日以使者遣太刀、持畏存之由、種々懇有返答、越中大樹事、大概必定云々、京都可爲和睦云々、

八月六日、庚午、晴、入夜宗栢來、有一盞事、密々相語云、越中大樹上洛事、以隱密細河京兆○政元領狀間、來月邊可有上洛云々、

九月五日、戊戌、傳聞越中大樹近日可有上洛云々、去二日越前朝倉館マテ被越云々和睦之儀云々、未知實否、

七日、就越中大樹事、種々有雜說、其間事難盡筆、

十月廿五日、丁巳、晴、世上儀種々有雜談、

〔實隆公記〕 九月五日、戊戌、晴、爲俊卿・番代參內、舊將軍密々移越前朝倉館、給云々、未知其謂如何、

〔和長卿記〕 九月四日、丁酉、晴、傳聞、去朔日北州前大樹著越前國、給云々、處々有注進之事、但其說不一樣、或京都將軍爲追討云々、或又於越中國神保越前守○長誠依奉厭却、忽而沒落、越前國云々、未知實說之間、不能是非候歟、

〔大乘院寺社雜事記〕 正月廿七日甲子

一自越中御所河州○畠山尚順御使、田村式部大輔之一名字者也、昨日杉川春四大在所へ招請之、一兩日在奈良云々、自寺門公方御禮申入之云々、御卷數折紙歟云々、

二月大一日丁卯、北方和與事、且聞之尤珍重々々、

六日、越中御所御使種村刑部少輔之代官杉川平左衛門尉在此方之間、申合事付之御卷數一合進上之、種村方油煙十挺遣之、杉川ニ五挺給之、良祐使也、東林院僧正奉書也、

七日、雨下、越中御所御上洛事ハ種村以下所存ハ大內○興義上洛、每事公方被得御力而、御上洛有之者、可目出、不然者不可然事也云々、其餘奉公近習以下ハ細川無相違、可奉守御主之由申入者、以其面可有御上洛條、可然、神寶之所存且此儀也、倉川在京計略之由也、

十日雨下、公方御上洛事ハ種村刑部少輔使杉川平左衛門御無力、御上洛不可然旨申、河州春行得業申、次其餘近習以下ハ就細川申早々御上洛事可然旨申、河州使吉見殿也、神寶代藏川兵庫助自去年在京者也、吉見殿與同道下向河州了、申合

大内子細在之間不及覺悟之由、春行得業ハ申河州云々、
自去年細川内者共ニ數千貫料紙、倉川致其沙汰之間、内者以下申合之、右京大夫
ハ一切不入心題目也云々、行末無心元、
十一日、越中御所御上洛事ハ必定之由、皆以申之、右馬守以下御迎ニ可參申用意、
自越中ハ近日吉見殿以下上洛云々、○右馬守は細川政數にして右馬助なるへし、
二月十二日、越中御所御上洛必定、細川右京大夫可隱居云々、
十月廿六日、雨下、塔阿彌自越前罷上、公方事外無御威勢、以下御作法也云々、國中
ニ御座、
閏十月十日、去月廿六日、越中御所奉公吉見被切腹了、細川同意之故云々、如何事
實歟、

後柏原天皇

文龜元年辛酉　紀元二千百六十一年

正月　庚戌朔

五日、甲寅、瑞泉寺豐壽寂す、

〔日本洞上聯燈錄〕七　新豐天叟祖寅禪師法嗣

越中州瑞泉龜阜豐壽禪師江州人也、出源氏、自幼逸群、不受世緣控勒、夙入空門、禮
新豐雪叟和尚得度、振策北邁、依慈眼希明親炙者已久矣、復回新豐、時天叟據席、化
門孔熾、纔及參見、機語相契、叟以遠大期之、文明十四年、受請視篆諸嶽、指山門云、百
千總持門、在山僧腳跟、驟步、顧視左右云、大人境界唯我獨尊、佛殿指左右云、小男拂
冀髮、長子拂蛾眉、能仁古佛、三界導師、便禮拜土地堂、承諸佛勅護我伽藍、最好一堂
無事客前三三與後三三祖師堂先天爲心祖西來是恁麼咦、將錯就錯迷逢達磨、據
室叉手云、端居丈室、是何心行、橫拈竹篦云、鎮鄉在手誰冒向、置卓上云、永日寥寥賀
太平、拈衣不是黃梅密、授亦非靈山流傳、尚耐吾斯舊伽黎、卽今抖擻挂老肩、上堂祝
聖、能懷中香記天叟之嗣、自是聲光日顯、雲衲接踵而至、下總太守藤顯泰成田鎮越
州請徙瑞泉、後檀信創最勝爲開山、文龜元年正月五日唱滅於瑞泉寢室、壽六十七、
臘五十六、

永正三年丙寅　紀元二千百六十六年

四月庚戌朔

十六日、乙丑、越中一向宗徒侵奪する所の地を其主に還さんことを請ふ、幕府、社寺公卿に令して之を收めしむ、

〔尚通公記〕　四月十六日、乙丑、越中國本所領渡由、有其沙汰間、今日差下上使、南都使下向、

十八日、越中國如加州（○加賀寺社本所領の本願ならず、加州は本願寺の專有する所なり）一向衆等相計云々、寺社本所領如形可返付之由、有其沙汰、

〔實隆公記裏書〕

依無差事、此間不申入候、背本意存候、抑今度越中一變不思儀之題目候、門跡領等大略可有御還着分候、時刻有其憑樣ゟ候、乍去御到來時ゟ為てハ不可爲治定候、次能州以同事候、相應院門跡知行分、當國ゟ為をハ、正躰ゟき候人候て、悉放券しハて候、遠國知行ハ、有名無實にて候、然而能州少分御領候間、只今此砌自然事行事もや候へき、彼方へ罷下候者にことつけ候て、可申歎之由存候、あまりに無證據に候へハ如何に候、元來門跡御管領左右に不能事ゟ候へ共、内々被經奏聞、勅裁一紙申請度候、當國御知行ゟるとも、又ハ[illegible]ゟんゟらゟて、御手に入事もあるへき事ゟて候歟、尊海恐惶謹言、

六月廿一日　尊海

○實隆公記裏書に、門跡等大略可有御還着の文に據れハ、尚通公記に所謂其沙汰とは幕府の命なること知る可し、蓋し當時一向の亂略鎮定し、其徒相議して奪ふ所の地を其主に還さんことを幕府に請ひしならん、本年六月に至り、加越復亂る、此事遂に行ハれさりしなるへし、

七月己卯朔

十五日、癸巳、加賀、能登、越中の一向宗徒兵を合せて越前に入る、

〔東寺過去帳〕（諸寺過去帳所載）　永正三年丙寅於諸國（大和、河内、丹後、越中、越後、能登、越前、加賀、美濃、三河等）在々所々、或從京都發向、或就土民、宗一向蜂起合戰之間、夭亡之輩不知幾千萬云々、

〔加越闘諍記〕一

加賀、越中、能登三ヶ國之一揆越前江亂入事

去程ニ惡將ハ惡鬼ヲ請シ、惡鬼ハ災異ヲ生ト云ヘハ、時日不移、類葉馳集ル、然ハ則去ル永正三年丙寅七月十五日ニ越前ノ國中ノ一揆越中、能登一統蜂起シテ、川ヨリ北ニ入在々所々ヲ放火シテ、兵庫長崎村々里々ニ陣ヲ取、○中略扨又九頭

口ヘ向ヘル敵ハ能美一郡江沼墨瀦後藤小杉金子松永湯淺其外越中ノ大坊主安養寺瑞泉寺越前先方ノ窄人衆都合八萬八千餘騎ノ兵共同時ニ馬ヲ打入テ馬筏ヲ組テ打渡ス越前勢ハ高木ノ要害ニ楯籠リ十死一生ノ合戰セントテ寄來ル敵ヲ待掛ル、

九月丁丑朔

十九日乙未越後の守護上杉房能、長尾能景をして越中に入り、一向宗徒を伐たしむ、能景、神保、遊佐等と蓮臺寺に戰ひ、是日、又般若野に戰ひ、遂に敗死す、

〔上杉文書〕

先年於越中國爲始亡父正統國中士卒數輩討死各御存知上、一々不及申顯候、下略

二月二日　爲景(花押)

長尾彌四郎殿御宿所

〔讀史堂文書〕

父又三郎景家去九月十九日於越中國般若野合戰討死、神妙之至候、雖爲女子、遺跡事相計、以代官軍役奉公勤之當知行領掌不可有相違之狀如件、

八月十八日　婦負郡寒江

蓮臺寺〈神保殿合力事

被申候間遣勢候處則敵取

懸候条神宗右被官屋後与

御前ニ而被矢疵候尤御忠

節候彌御走舞專一候恐々

謹言

永正三　八月廿日　慶親(花押)

遊佐新右衛門尉

埴生與七殿

進之候

〔上杉文書〕

先年、於越中國、爲始亡父正統國中士卒數輩討死、各御存知上、一々不及申顯候、下略

二月三日　　爲景（花押）

長尾彌四郎殿御宿所

〔讀史堂文書〕

父又三郎景家、去九月十九日、於越中國般若野合戰討死、神妙之至候、雖爲女子、遺跡事相計、以代官軍役奉公勤之、當知行領掌不可有相違之狀如件、

八月十八日　婦負郡寒江

蓮臺寺（神保殿合力事

被申候間遣勢候處則敵取

懸候条神宗右被官屋後与

御前ニ而被矢疵候尤御忠

節候彌御走舞專一候恐々

謹言　　遊佐新右衛門尉

永正三　　慶親（花押）

八月廿日

埴生與七殿　　進之候

自越後長尾信濃守能景爲合力亂入之時也

遊佐慶親書狀　西磯波郡埴生村護國八幡宮所藏

永正參年閏十一月廿六日　　房能花押

水原祢々松女

〔護國八幡宮文書〕○西磯波郡地生村

八月十八日、婦負郡寒江蓮華寺へ神保殿合力事被申候間、遣勢候處、則敵取懸候條、神宗右被官屋後（八代カ）與御前ニ而被矢疵候、尤御忠節候、彌御走舞專一候、恐々謹言、

永正三　八月廿日　　遊佐新右衛門尉　慶親（花押）

地生與七殿　進之候

自越後長尾信濃守能景爲合力亂入之時也、○典書

去十九日、於芹谷合戰入鑓、其儘城中ヘ御籠候、御忠節無比類候、彌可被抽御粉骨事、肝要候、恐々謹言、

永正三　九月廿六日　　遊佐新右衛門尉　慶親（花押）

地生次郎兵衛殿　進之候

於越後山之［　］○此典書不明

去十九日於芹谷合戰入鑓、其儘城中へ御籠候、御忠節無比類候、猶可被抽御粉骨事肝要候、恐々謹言、

永正三　九月廿六日　　埴生與七殿　　遊佐新右衛門尉　慶親（花押）

〔實隆公記〕　十月廿一日、玄清宗坡來、越後衆多以落命、越中國又一向衆得利之山語之、言語道斷次第也、

〔塔寺八幡宮長帳〕　永正三年越後ノ長尾殿越中とすぬまにて生涯、九月二十六日也（本書ニ十六日に作るは非なり、）

〔本土寺過去帳〕

高岳、越後長尾信州吉景、越中ニテ戰死九月十九日、

春忠　越後運田内匠助同越中ニテ戰死日理兄、

〔東寺過去帳〕（諸寺過去帳所載）　永正三年丙寅、於諸國（大和河内丹後越中越後能登越前加賀美濃三河等）在々所々、或從京都發向、或就土民（一向宗）一向蜂起、合戰之間、夭亡之輩、不知幾千萬云々、

〔編年上杉家記稿〕　八月十八日、是コリ前キ越後守護上杉房能、守護代長尾能景ヲシテ越中ニ入リ、一向宗徒ヲ伐タシム、此日、能景神保良衛遊佐慶新等ト婦負郡寒江蓮臺寺ニ戰フ（前田家藏埴生文書）

按に八月二十日遊佐慶親埴生與七に與る功狀あり、越後より長尾信濃守能景合力として亂入の時なりと記す、又按に能景の子爲景の此役に出戰せさるゝ五十嵐石田大須賀の餘黨を誅助して蒲原方面に在陣せし故なり、

九月十九日、前越後守護代長尾信濃守能景越中礪波郡般若野に戰死ス、其將水原又三郎景家等亦之ニ死ス、（上杉古文書讀史堂文書古蹟文徵本土寺過去帳）

按に長尾系圖米澤林泉寺過去帳能景の死を以て明應七年九月十九日となし、招靈棚古牌名單に九月十九日と記す、能景の明應七に沒せさるゝ本文記する處の如し、但し能景戰沒の年歲未ゝ之を確記するものを得す、然れとも永正三年以降能景の文書一も傳る所なし、則ち能景の此の役に戰する疑ふに足らゝ、況や本土寺過去帳の如き明に九月十九日能景の越中に戰沒するを記するものあるをや、又況や埴生八幡文書遊佐慶親九月二十六日を以て埴生次郎兵衛に芹谷の戰功を賞するの感狀あるをや、又按に越中礪波郡芹谷村千光寺過去帳に、能景の法名あり、眞光院殿高岳正等大居士天文十五年五月十五日と記す、其誤謬辨を俟ゝ、又越中に爲景塚と稱するもの二あり、

永正參年閏十一月廿六日　　房能花押

水原祢々松女

〔護國八幡宮文書〕○四礒波郡埴生村

八月十八日、婦負郡寒江道臺寺へ神保殿合力事被申候間、遣勢候處、則敵取懸候條、神宗右被官屋(八代カ)後與御前ニ而被矢疵候、尤御忠節候、彌御走舞專一候、恐々謹言、

永正三　八月廿日　　遊佐新右衛門尉　慶親(花押)

埴生與七殿　進之候

自越後長尾信濃守能景爲合力亂入之時也、○香奥

去十九日、於芹谷合戰入鑓、其儘城中へ御籠候、御忠節無比類候、彌可被抽御粉骨事、肝要候、恐々謹言、

永正三　九月廿六日　　遊佐新右衛門尉　慶親(花押)

埴生次郎兵衛殿　進之候

於越後山之□□□○香不明此奥

去十九日、於芹谷合戰入鑓、其儘城中へ御籠候、御忠節無比類候、彌可被抽御粉骨事肝要候、恐々謹言、

永正三　九月廿六日　　埴生與七殿　　遊佐新右衛門尉　慶親（花押）

〔實隆公記〕　十月廿一日、玄清宗坡來、越後衆多以落命、越中國又一向衆得利之由語之、言語道斷次第也、

〔塔寺八幡宮長帳〕　永正三年越後ノ長尾殿越中とすぬまにて生涯、九月二十六日也○（本書二十六日に作るは非なり、）

〔本土寺過去帳〕

高岳、越後長尾信州吉景、越中ニテ戰死九月十九日、

春忠　越後運田内匠助同越中ニテ戰死日理兄、

〔東寺過去帳〕（諸寺過去帳所載）　永正三年丙寅、於諸國（大和河内丹後越中越後能登越前加賀美濃三河等）在々所々、或從京都發向或就土民宗（一向）蜂起、合戰之間、夭亡之輩、不知幾千萬云々、

〔編年上杉家記稿〕　八月十八日、是ヨリ前キ越後守護上杉房能、守護代長尾能景ヲシテ越中ニ入リ、一向宗徒ヲ伐タシム、此日、能景神保良衛遊佐慶新等ト、婦負郡寒江蓮臺寺ニ戰フ（前田家藏文書、埴生文書）

按ニ八月二十日遊佐慶親埴生與七ニ與る功狀あり、越後より長尾信濃守能景合力として亂入の時なりと記す、又按に能景の子爲景の此役に出戰せさるハ五十嵐石田大須賀の餘黨を誅助して蒲原方面に在陣せし故なり、

九月十九日、前越後守護代長尾信濃守能景越中礪波郡般若野に戰死ス、其將水原又三郎景家等亦之ニ死ス、（上杉古文書讀史堂文書、古蹟文徵本土寺過去帳）

按に長尾系圖米澤林泉寺過去帳能景の死を以て明應七年九月十九日とな し、招靈棚古牌名單に九月十九日と記す、能景の明應七に沒せさるハ本文記する處の如し、但し能景戰沒の年歲未ゑ之を確記するものを得す、然れとも永正三年以降能景の文書一も傳る所なし、則ち能景の此の役に戰（死脫カ）する疑ふに足らス、況や本土寺過去帳の如き明に九月十九日能景の越中に戰沒するを記するものあるをや、又況や埴生八幡文書遊佐慶親九月二十六日を以て埴生次郎兵衛に芹谷の戰功を賞するの感狀あるをや、又按に越中礪波郡芹谷村千光寺過去帳に、能景の法名あり、眞光院殿高岳正等大居士天文十五年五月十五日と記す、其誤謬辨を俟ゑス、又越中に爲景塚と稱するもの二あり、

想ふに其一は能景にして、其一は爲景なるべし、蓋し爲景越中戰沒の事は世に赫々たれ共、能景戰沒の事の如き、我が舊藩人士且つ未だ之を知らざるもの多し、故に所謂能景塚も亦遂に爲景塚と傳訛せしに非るか、

〔東礪波郡栴檀野（常高等）小學校報告〕　永正三年九月十九日、長尾信濃守能景椎名藤親と芹谷に於て戰死す、

法名　高岳正統

此役に於て宇佐美某水原某等諸將戰死す、

〔參考〕

〔續本朝通鑑〕　六月是月加賀國一向宗一揆蜂起、寇越中國、國士遊佐神保（長誠下總集仏教史仍據）長誠（家臣）に越中國に侍し比叡（明応）中越前守護もとにてトアルに據）土肥椎名戰敗到越後國、求援於長尾能景、一揆等又侵能登國、國主畠山義隆避之、漂江州余語浦、溫井氏（畠山家士）逃到越前、匿堀江氏館、於是加賀能登越中悉屬一向宗、彌聚諸國黨將、入越前國、此國亦邪徒多、而約刻期蜂起、北陸大亂、（畠山等逃走スルハ長享二年ノ事ニ係ル本書誤レリ）七月丁未、長尾能景率越後兵、與遊佐神保椎名等出陣越中國、（本書越中出陣以後ノ事闕ク）

〔上杉長尾系圖〕

平姓

長尾家系統略

頼景　信濃守　法名意德院通窟行永、山内、

重景　六郎、信濃守　法名林泉寺　宴溪正眞

能景　信濃守　法號天德院高嶽正統　明應七年戊午九月十九日卒、春秋四十八

房景　大郎　越前守　早世

爲景　六郎　信濃守

〔三州志〕（故墟考）　蓮沼（古肥ニ或閑ハ蓮又蓮蓬ニ作ル、松永郷蓮沼村領ニ在、東西二十六間、南北三十六間、堅亘五間、跡存ス、平地也、廓内樹木陰森、今所々畑トナル、要害ノ地ニアラス、埴生村入町許、）

兒賊游佐新左衛門慶親（游佐一左ニ右ニ山本ニ作ル）永正、大永ノ頃蓮沼近郷ヲ押領シテ此城ニ據ル處、同郡木舟ニテ慶親討死ト云、（舊肥ニ何人ノタメニ殺サルヽ、壯藏ニ遊佐新右衛手書一通アリ、又同緣起中ニ階級坂石壇ハ蓮沼領主遊佐ノ則近ノ寄進所築トアリ、疑フハ慶親則近同人ナラン、此人武田信玄ト通書ノ寫ト、古案肥筆ニ見ユ、能登遊佐ノ族カ、）其後椎名肥前泰種コレニ據ルヲ天正四年三月上杉謙信攻テ泰種之ニ死ス、

十月丁未朔

十日、丙辰、越中の一向宗徒、越前の豊原寺を襲ふ、

〔三州志〕十月十日、再ヒ賀登越中ノ賊黨越前ノ豊原寺眞宗ヘ寇ス、克スノ歸ル、越前ニ加能ニ今年河合藤八郎越前ニ於テ討死ノコト未全詳可參考、

永正六年己巳　紀元二千百六十九年

七月辛卯朔

二十八日、戊午、上杉顯定等、武藏上野の兵を率ゐて越後に入り、長尾爲景を討つ、爲景敗れて越中に走る、

〔讀史堂古文書〕從越中定實切紙具令披達、則及御報候、然者合力之事承候、委細之旨黑川方其方一通ニ申候間、不能詳候、恐々謹言、

大膳大夫尙宗

九月十一日

謹上　中條殿

以旁御動揚北一篇加地庄張陣之由候、無是非次第候、依之早速合力之事承候、尤雖可成其行候、可諄定實一切無御余儀之由、度々被露書中候、然處芦名方和談之儀、可有之之由、以小倉軒被申越候間、相任然儀候、雖然自然有相違及鉾楯、自越中至御入國者、一事可得御意候、恐々謹言、

尙宗

九月十八日

黑川彈正左衛門尉殿

中條彈正左衛門尉殿

〔村上文書〕今度此國迄復先臣罷上候、悅入候、殊父越中守討死不便次第候、イツグニモ居住、來春千萬一再興事候者、重忠信可被存候、恐々謹言、

定實花押

十月五日

村上源六殿

〔築地文書〕不慮題目、故于越中入馬候、年內及風雪候間、行延引候、京都上意御嚴重候間、來年越中能登飛驒信濃相談西濱口高梨口可成調儀候、其口事伊達方懇切被申越候間、偏相憑候、有兵談入國之砌、彌被厲軍功候者、可爲感悅候、本意之上、努々不可疎略候、何樣來春重可申送候、謹言、

定實

十月六日

築地修理亮殿

〔上杉古文書〕 先年於越中國爲始亡父正統、○能國中士卒數輩討死、各存知上、一々不及申顯候、然而彼國へ被入馬刻、種々合力義申屆候處、終無其義、野伏一人不被相添段、無千萬候、殊自畠山尾州御書を一通不給候、誠無御情、次第候、畢竟神保所行跡候、○中略

永正十六年三月二日　爲景花押

長尾彌四郎殿

御宿所

〔相州兵亂記〕 カヽル處ニ上杉ノ家老長尾六郎爲景逆心ヲ起シ、越州ヲ乘取リシカハ、管領顯定入道當屋形憲房ヲ相伴ヒ上州ヨリ打立越州へ押寄、永正六年七月廿八日長尾六郎ヲ責玉ヘハ、爲景軍ニ打負テ、越中ノ國西濱へ落行ケル、可淳憲房戰ニ打勝、猶國中並近邊ヲ下知シテ在國シタリ、

〔湘山星移集〕 サテ當屋形樣ヲハ顯定ト申、是ハ當國相模守房定二男ニテ御庄、御年十四歲ノ時、關東越山四十三年御在テ、越州ノ御舍弟九郎房義臣長尾六郎爲景ト鉾楯有テ、終ニ雨溝ト云地ニテ御腹被召候、依之顯定鬱積ヲ散ンタメ、

永正六年七月廿八日、武州ヲ御立アリ、八月越州發向有、大概國中御本意ニ屬、爲景ヲ越中ノ境西濱ニ追越トイヘ共、翌年土揆代ハリ、六月廿日御年五十七ニシテ御生害アリ、

〔附錄〕

〔上杉謙信公年表〕 天文五年十二月廿四日、爲景病死ス、林泉寺ニ葬ル、法名大龍寺殿紋竹庵主道亡沙彌、

○爲景越中戰死の說は能景と誤混したるものあるべく、本書病死となす蓋し其實を得たるものならん、故に今之に從ふ、但戰死の說は世に喧傳せらるゝものあるを以て、姑く下に收めて異を存す、

〔三州志〕 二來因概覽 天文七年戊申夏四月、爲景宇佐見駿河守定行ヲ將トシテ松倉城唐人兵庫山下左衛門介之ヲ守ル、瀧山城光秀之ヲ守ル、増山城國波郡神保越中ヲ圍ンテ三城共ニ陷ツ、兵庫小出城ニ走リ越中國五箇山ニ隱ル、播磨守自殺シ左馬介ハ戰死ス、因テ越中風ヲ望ンテ爲景ニ降ル、斯時越中ハ暫ク爲景ノ領地ノ如シ、

〔三州志〕 雜藁餘考六 十四年乙巳夏四月、景周之ヲ今年ニ係ル者ハ實ニ通卿ノ歿年ヲ誤トスル也 越後ノ長尾信濃守爲景越中ヲ略セント、上杉兵庫定實越後上條城主ニ乞テ宇佐見駿河定行ヲ

要將トシ、「春日山日記」ニ爲景ノ盟ヲ子景虎十二三歳ノ頃回國シテ叡山ニテ字佐見駿河ニ逢テ君臣ノ盟ヲナシ同道シテ歸ルト云未タ何レカ是ナルヲ知ラス

兵ヲ發シテ松倉城ニ攻ム、城主畠山修理太夫種長一本ニ植長ニ作レリ然レトモ系圖ハ大永ノ頃日耶泰越新川郡ニ在リ

按スルニ河州若江高屋ニ種長、植長共ニ見ヘタリ其一説ニ畠山氏ハ越中ノ家臣神保左京亮衛椎名小四郎泰越中ノ産ニ出ル

將トシ利兵ヲ陳ネテ守禦タラシムルトイヘトモ本月三日定行部下ノ兵二千

純、土屋三郎兵衛尉、松岡長門及江波五郎、其臣唐人兵庫山下左馬介ヲ首

山本左馬介、摂美庄助五郎等ハ本記ト齟齬ス

唐人兵庫ハ永閑二年野及下野中ト云今ハ因ル

城ニ在シテ城陥ル、山下曁ヒ府兵之ニ死スル者四百人許兵庫ハ走テ小出

ヲ率キ夜襲シテ城陥ル、山下曁ヒ府兵之ニ死スル者四百人許兵庫ハ走テ小出

放生津城ノ射水郡也古ノ遺跡今ヲ攻取ル時ニ德大寺大納言實通卿京都ノ擾亂

ヲ避ケ此城ニ在シニ卿ノ臣藏人右馬助懷世等九員ト俱ニ討タルルト云○略ス註

十一日神保左京進良衛同宗右衛門椎名肥前守泰種「武德編年集成」ニハ泰胤ニ作ル椎名氏傳ハ「越中故墟

考ニ「雲」ニ注スル天正四年紹炊玉リ江波五郎後ニ颯ヲ參河守ト波號スアリ永禄六年謙信ニ誠ノサレ館

ヲ遺跡ト以上ハ前土註著ノ畠山種長ノ臣等ト梅檀野俗ニ千檀ニ作ル

市郎村ニ古至テ般若野是也般若今ハ郷名ト抵庄川ヲ南ハ三谷村ヨリ別北ハ春日吉江村德

ナ松岡長門ト按スレトモ皆ハ中ノ非也

ル今婦負郡ノ山ニ唱ヘフル彌波東山詳ト庄

芦谷野ノ山ニ隣ル也其詳ト庄

倉ニ在テ敗卒ヲ集メ、松倉城中ノ糧倉ヲ開キ米穀ヲ土民ニ施シ民ノ歡心ヲ結

ヒ越後ヘ退ク因チ土民弓銃ヲ持シ定行ヲ衛護シ、境河四越ノマテ解到スト云

「甲陽軍鑑」ニ「謙信村上討義清ニ於テ死セシ語リ爲景越中能登加賀三國ニ合戦勝利此爲景戦ニ

ヲ中ニテ越ノ中ニ於テ北陸ヲ

相模ノ守ノ所ノ正ノ考ル永正三年ノ諸説紛々ヲ雨濤ノ役ニ酬ニ爲景ニ

死ヲ正ノ永ノ正ノ三年ノ諸説紛々ヲ雨濤ノ役ニ酬ニ爲景ニ

保、椎一名答ト構堡野ニ此ニテ越後ノ大軍ヲ帥キテ越中ヘ攻入リテ新川郡ニ苦戦シテ死ス桃井直ア

リ又ハ爲景ニハ爲景ニ越後ノ中軍ヲ不意ニ擊ツ越中ヘ攻入リテ新川郡ニ苦戦シテ死ス桃井直ア

和ノ氏族所々ニ城ヲ陥ル之ヲ防ク自ヘシ城陥ル爲景ト連勝シテ進ム夫ヨリ增山城爲景神保播

慶守長光ノ龍山ニ逃ル因テ構堡野ニ陣ス取ル時ニ敵風波ニ難ニ苦戦シテ死ス桃井直ア

越中守ニ越ヘ爲景ニ中ヘ逃ル因テ構堡野ニ陣ス取ル時ニ敵風波ニ難ニ苦戦シテ死ス桃井直ア

安近安養坊山寺ヘ村出テ興不意寺中目村ノ勝ツ爲景得成カ寺等爲メ彌波ニ苦射擊水シテ郡死ス桃井直ア

新爲景川婦ノ負遺二墳郡負郡ヲ牛威ヲ振滑フ村トニ在ト云、又「北」越爲軍談陣」ニ亡ノ云ノ庚後子神保七月越爲中守宮魚津城ノ板移屋リ

州刑部放生津ノ盛江ニ波養河中ノ守安及養寺加瑞州泉ノ寺賊等板坪屋坂坪伯書守ノ等勸内メ應ニ因サセテ射愈ニ水ニ郡加

ヘ發スル越ノ波中ノ河ノ守及養寺加瑞州泉ノ寺賊等板坪屋坂坪伯書守ノ等勸内メ應ニ因サセテ射愈ニ水ニ郡加

高岡邊廿四日(一本ニ十一日)波ノ海濱道ナ作ル(齊藤ノ檀野地ニ陥テ苦馬死坑ヲ殺アケリ爲周ニ按爲スル是ニ庚陥

同月ヨリ彌ニ波ニ海一濱日道ニナ作ル(齊藤ノ檀野地ニ陥テ苦馬死坑ヲ殺アケリ爲周ニ按爲スル是ニ庚陥

ヲ之ニ于ハ天文九年也今年ヨリ後二年ハナリ之ヲ天武家十閑一説年ニハ繫爲ケ景ノ曰死ヲ爲天文擊十越四中年

按「賊」ス「賊」ル々謀此殺ニ陥ル「北」越「亘」軍「歎」ト相似ヘリ類ニ陥ル又「導」ニ公此入ニ加爲景ノ死爲景信天之文面七年三月下ア

「賊」ル々謀此殺ニ陥ル「北」越「亘」軍「歎」ト相似ヘリ類ニ陥ル又「導」ニ公此入ニ加爲景ノ死爲景信天之文面七年三月下ア

旬トス「長尾」系圖ニモ信濃守爲景天文又北七年四月十一日於越中國千檀野ニ討死ス定行ト

アリ然レトモ是亦確徵ト爲カ爲景ヲ「尾」ニ是ニ信濃守ヲ

島山種長ノ被官唐人山下左馬介ヲ放生津ノ守ル松倉城ヲ拔ク所ヘ引入ル爲景ト戰死以上諸説聞ヘニ定行

神保椎名ノ道拂ヒ放生津ノ守ル兵ヲ倉城ヲ拔ク所ヘ引入ル爲景ト戰死以上諸説聞ヘニ定行

セス上杉家ノ祖祀トイヘトモ猶矛盾セリマシテ世間ノ傳聞ニ於テナヤ

〈三州志〉來田概覽　十四年乙巳爲景放生津城ヲ攻取リ○註時而シテ江波五郎ト椿檀野ニテ苦戰シテ亡フ是ニ於テ神保越中守光氏富山城ニ據リ新川婦負二郡ニ威ヲ張テ守護ノ如シ是ヨリ後越中士答ノ士椎名井上譽田石黒金木等ニ割據シテ交刃止ムコトナシ天文十七年日リ天正六年マテ凡ソ三十一年ノ間上杉謙信越中ニ出軍神保ト相擊鬪スルコト都テ十五度也永祿百七代正親町帝此時石黒椎名等神ヨリ礪波郡ヲモ幷呑セルカ如シ保ノ麾下ニ隸ス

〈芹谷山千光寺過去帳〉○正德元辛卯年初冬日調製

十八日

鴻桂院殿寶光榮量大居士　天文七戊戌四月字佐美氏駿河守定行事御布施備前長船太刀後定實公獻

十九日

眞光院殿高岳正等大居士　天文十五年五月越後國爲景長尾謙信弑虎父

永正十二年乙亥　紀元二千百七十五年

四月戊午朔

二十四日、辛巳、光嚴寺宗洋寂す、

〈日本洞上聯燈錄〉八　龍淵旗雲祖旭禪師法嗣

越中州光嚴東海宗洋禪師、本郡神保氏子、生而岐嶷、經書一覽輒誦、不甘處俗、辭親出家、禮旗雲和尚薙髮進具、徧扣禪扃、凡五載未有所省、再復省覲旗雲、一日室中舉香嚴樹上話、於爭鋒之際、倏然領悟、出衆禮拜、徵酬無爽、雲拊而印之、接應住光嚴、次遷總持、及入寺日、祝大雲下、指三門曰、天開普賢門容金輪、統御看好、雲片片不落、別處佛殿、爛嚼眞彌勒、橫呑老釋迦、盡大地黃金殿、向什麼處扃土地堂、把汝智慧棋、行我般若船、佛敕神力、覺海湛然、祖師堂、第一西乾、第二東土、花名牡丹芍藥、凡艸木不足數、據室拈竹篦曰、開甘露室、飲甘露漿、打卓一下曰、難勖甘露鼓、出現甘露王、拈衣、這箇是三百斤鐵、枷因甚麼、今日掛在野僧肩、噫、罪過彌天、登座須彌峰不高、世界海不闊、今朝倒騎牛、上三十三天、臘八上堂、看來大地無衆生、誰使狸奴遮眼睛、認我三千丈愁鬢、誤成一夜滿天星、六祖讖曰、祖室剛言投密機、老樵日暮下嵩扉、嶺南柴子價多少、束換黃梅金縷衣、居兩歲謝事、歸光嚴、永正十二年四月二十四日示滅、遺偈曰、夢幻空華、五十八年、末後一句、問不容髮、出竹遊與、始春派竹莊鶯三人、有語錄、傳于世矣、

後奈良天皇

享祿元年戊子 紀元二千百八十八年

三月 癸酉 朔

二十一日、癸巳、土肥平右衛門尉二尊院領富山柳町を違亂す、是日、幕府之を停止し、寺家をして所務を全くせしむ、

〔二尊院文書〕 山城

二尊院領越中國富山柳町事、爲普廣院殿御寄進之地、當知行之處、近年土肥平右衛門尉違亂云々、太無謂、被退彼妨上者、早如元令直務可被全所務之由、所被仰下也、仍執達如件、

大永八年三月廿一日

散位（花押）

信濃守（花押）

當院住持

○永享二年六月九日條參看すべし、

天文十四年乙巳 紀元二千二百五年

四月 癸巳 朔

九日、辛亥、權大納言德大寺實通般若野に來り害に遭ふ、

〔公卿補任〕 權大納言正二位藤實通三十三、右大將、三月二十五日在國、越中國知行分、同四月九日於國生害云云、藏人右馬助藤懐世以下九人、

〔言繼卿記〕 四月十六日戊申、從廣橋使有之、德大寺實通雜談有之、如何之由被申之、重使者有之、尋遣之處、去七日ニ下國之處、八日曉天押寄、右大將物加波藏人懐世以下十三人悉生害云々、人數一人逃上洛云々、越中國於知行分之事也、先代未聞之儀、言語同斷之儀、不能分別題目也、

德大寺ヘ罷向、無心元之由申之、女房衆上下一向無正躰云々、鴨光雄卿同相尋、物加波實父也、同無正躰云々、

十九日辛亥中御門已來了、次諏方若狹入道來、德大寺官位以下女房不被知云々仍尋之書遣之、彌治定云々、一盞勸候、暫雜談了、

五月十六日丁丑、從德大寺舍弟之闕伽井坊可來旨罷向德大寺相續之儀被申候、久我弟有之、是ハ入道以後之子也、又他姓也、幼少也、旁如何、又一條殿御次男有之、淨土寺ヘ被成候、是申請度可有同心哉否不知、先內々叙慮可伺之由被申候間、則

罷歸今參內、以新大典侍殿披露申候、內々可仰出之由被思食之處、相續之事被申入候、神妙思召候、就其久我弟之事平人成共入道子相續之事不可然、況半家ニ不可然之間、一條殿若公申請可然之由了、然者爲禁裏モ內々一條殿へ可被申云々、則又德大寺へ罷向、其由申了、近衞殿御猶子之由候間、猶近衞殿へ可被申之由示之、一盞有之、

十七日戊寅、德大寺へ又被呼候、問罷向、近衞殿へ之儀爲禁裏被仰出候樣ニと有之、中〳〵不及是非、只爲本家可被申之由示之、罷歸了、

當番之間、暮ニ參內、予万里小路中納言以緒朝臣三人也、被召御學問所、予万中兩人四時分迄御雜談了、以次從德大寺昨日御返事段忝之由、令披露了、

十九日庚辰、昨日德大寺ヨリ使ニ少外記康雄來、一條殿若公之事、近衞殿御猶子無之事也、一向無御存知之由、被仰候間、內々此分可申入云々、猶不審也、然者近衞殿大政所殿御書可被取之由申之處、今日到來相違之儀也、雖未御入室之間、兎も角も〇御文也御同心云々

一條殿へ參、從德大寺若公所望之由予申之、淨土寺へ御約束之間、不及是非候、內々勅定なと候ハヽ可有御同心也、是も不慥候、

廿日辛巳、暮ニ參內、德大寺申一條殿若公之事、急度被仰出候樣ニ披露、御心得候由了、然者言繼可參申之由、被仰出候、存旨有之間、以他人可被仰出之由、申入候、去夜之分外樣番中院代ニ祝候了、內々ニ祝候番衆廣橋大納言伯二位兩人也、

六月三日甲午、德大寺へ罷向相續之事談合了、

十日辛丑、暮ニ德大寺へ罷向、闕伽井坊昨日上洛云々、相續之事談合了、一盞有之、

十二日、從闕伽井坊昨日又今日書狀有之、相續之事從近衞殿如此文にて被申云々、案文被見候、

德大寺相續之事、先日之以後如何候哉、重被仰出候樣、內々可被申入候、彼一流之事難見放之由、一位申間、乍御酌申入候、爲朝爲家候間、旁以宜樣可爲申沙汰候、猶期面談候、かしく、

廣橋大納言殿

十九日庚戌、從德大寺瓜一蓋被送了、廣橋へも一蓋被送、從此方申遣了、

七月十日長橋へ罷向、一昨日トクリ祝着之由申之、又德大寺相續之事催促申了、

〔古今消息集〕

細川高國狀

德大寺殿御家領越中國般若野事、連々如申急度被返付候、以可然候、殊至于只今者不成余所被仰合之上者、國之儀堅可被仰付、事肝要之、委細使者申含候、恐々謹言、

七月廿六日　勝山院　進覽之候　高國花押

正親町天皇

永祿二年己未　紀元二千二百十九年

神保光氏、礪波郡本願寺派の諸寺を攻む、

〔三州志〕 鍵蕗餘考 六 二年己未勅シテ本願寺主僧顯如ニ門跡號ヲ賜ヒ六院家ヲ許サル 是正親町帝即位ノ爲ニ數百金ヲ以テ也 因テ諸國本願寺ノ黨縕素ヲ擧ケテ献シ其禮義ヲ盛ヘシナ以テ藤兵上洛ス此虚ヲ獲テ神保越中守光氏長光ノ子石黑左近光治木舟ノ城主ニシテ藤兵衛ノ子ナリ 永祿年間ニ見ユル 福光ノ城主光弘ノ後 七流トナリ木舟ノ左近コレヨリ出テ正系ナリト云フ 其子左近之ヲ繼キテ國祖ニ仕ヘ其子天スルニ至リテ途ニ絶祀セリ今本藩ノ臣石黑權太夫、湯原長太夫等ハ此ル藤兵衛子ヲ左近藏人成綱ト有テ光治ノ實名ナシ疑ラクハ光治ハ初ノ實名カ其詳ハ「古墟考」ニ略ス 此石黑氏ノ支流ナリトシテ此ニ辨シテ

道ノ後ナルヘシ 廊下トナシ大ニ威ヲ振フ此時神保長職 一按ニ長元ニ作ル ニ按ルニ長元諸記長職ヲ越中守トス然レトモ越中守光氏アレハ疑ラクハ越中守長職ニ改號スト也 嘉吉元年越前守勝重ト云シヲ後ニ神保越中守長職ニ改號ス 或ハ云長職初メ水越前守勝重ト云シヲ後ニ神保越中守トナスト者誤ナラン

瀧山城ハ若ハ此後カ光氏系ニアラス 瀧山城 婦負郡ニ在リ 「古墟考」ニ詳也 或云、此時光氏ノ將寺島牛助小島甚介之ニ據リ齋藤常陸入道淨丹 一ニ長門守ニ作ル 或ハ法白ト號ス 一ト云淨丹ヲ常丹ニモ作ル 次耶右衛門一ト守ルト也 鵜ノ父也一說ニ六波羅ノ齋藤太耶左衛門後行ノ後ト云 詳ハ「古墟考」ニシルス 城生城ニ據ル

永祿三年庚申　紀元二千二百二十年

三月　丁卯朔

三十日、丙申、上杉輝虎、椎名康胤を援けて、神保良春を增山城に攻む、

〔上杉謙信公年表〕 三月晦公椎名康胤ヲ援ケ神保良春ヲ越中增山城ニ攻ム良春奔ル、公尋デ凱旋ス

十月　癸巳朔

十七日、己酉、武田信玄、越中の一向宗徒に書を送りて、謙信の背後を窺はしむ、

〔上杉謙信公年表〕十月十七日、武田晴信書ヲ越中ノ一向徒ニ與ヘ、公ノ背後ヲ窺ハシム、

是歳椎名、井口、轡田、婦負新川両郡の地を爭ふ、

〔三州志〕六雜蘂餘考　三年庚申椎名井口（古記ニ名ナシ欠ク按スルニ井口三郎光義ノ後ナルヘシ或ハ七寸五分ト書ク欠ク按スルニ下文ニ見ユル壹後守備前守ノ内ナルヘシ或ハ作ル宮山領ニシテ轡田ニモアリ今新川村名ニ杏和田アリ之ナ轡田ナスモアリト云）轡田（古記ニ名ナシ）婦負新川ノ地ヲ角ソヒ礪波郡ニ於テ石黑左近勝興寺、瑞泉寺（礪波郡城端ニアリ此寺三年ノ創建ニシテ今猶領寺五世ノ主僧緯如明德三百五十餘アリ）善德寺（礪波郡城端ニアリ此寺中興ノ三男周如ノ創造シ永祿三年ノ剏ナリ）等ト交戰ス

永祿七年甲子　紀元二千二百二十四年　八月辛未朔

二十三日、己巳椎名康胤、賀積三十俵の地を、常泉寺に寄進す、

〔常泉寺古文書〕川下郡新○康胤の妻補菩提賀積手作分之内參拾俵所、停止代官策亂百姓前爲賀運慈慶見氏の法名直令寄進畢、於末代不可有相違候也、仍如件、

永祿七　椎名

為賀運慈慶

菩提賀積手作

分之内參拾俵所

停止代官策亂

百性前直令寄進

畢於末代不可有

為賀運慈慶
菩提賀積手作
分之内参拾俵所
停止代官策亂
百性前直令寄進
畢於末代不可有
相違者也仍如件
永禄七　椎名
八月廿三日　康胤（花押）
常泉寺

（綽如ノ三男周発加州砂子坂村ニ一殺テ能登ニ移リ瑞泉寺ト俱ニ越中東派ノ頭寺ナリ等　文亦
中ニ城端ニ移リ瑞泉寺紀元二千二百二十四年）

永禄七年甲子　辛未朔

八月

二十三日、癸巳、椎名康胤、賀積三十俵の地を、常泉寺に寄進す、

〔常泉寺古文書〕○下新川郡

爲賀運慈慶○康胤の妻紹菩提賀積手作分之内参拾俵所停止代官策亂百姓前
直令寄進畢、於末代不可有相違候也、仍如件、

椎名

永禄七

椎名康胤寄進状　下新川郡魚津町　常泉寺所蔵

八月廿三日

常泉寺

〔武隈文書〕○下新川郡松倉村　椎名氏菩提所雲門寺兵火掛、終ニ沒落ス、折節住持入寂ニ付、寺再建モ不叶、依テ巖谷山常泉禪寺三世松室文壽和尚代、永祿七甲子八月廿三日、椎名氏菩提所ニ被成、三拾俵ノ田畝之寺領寄附也、且又紋立葵畫匲雙親念珠雪下安陀衣、其餘種々什物寄附有焉、常泉寺者松倉之府内ニ有リシヲ、天正丙子四年三月十日、椎名氏康胤公沒落之後、東城村被引越居住ト云云、○前後の文は、天正四年三月十七日の條に收む、

○康胤の事は永祿十一年七月十六日、十二年九月、元龜二年三月十八日、天正四年三月十七日の諸條に見ゆ、

永祿八年乙丑　紀元二千二百二十五年　六月丙寅朔

武田晴信の屬將山縣昌景、兵を率ゐて越中に入る、

〔甲陽軍鑑〕　永祿八年乙丑六月、山縣三郎兵衛御先を仕り、越中へ御馬を出されし、飛驒國侍大將江間常陸守才覺仕、越中の内一郡あまを持候椎名と云侍大將

八月廿三日　康胤(花押)

常泉寺

〔武隈文書〕○下新川郡松倉村　椎名氏菩提所雲門寺兵火掛、終ニ沒落ス、折節住持入寂ニ付、寺再建モ不叶、依テ嚴谷山常泉禪寺三世松室文壽和尚代、永祿七甲子八月廿三日、椎名氏菩提所ニ被成、三拾俵ノ田畝之寺領寄附也、且又紋立葵畫匲雙親念珠雪下安陀衣、其餘種々什物寄附有焉、常泉寺者松倉之府内ニ有リシヲ、天正丙子四年三月十日、椎名氏康胤公沒落之後、東城村被引越居住ト云云、○前後の文は、天正四年三月十七日の條に收む、

○康胤の事は永祿十一年七月十六日、十二年九月、元龜二年三月十八日、天正四年三月十七日の諸條に見ゆ、

永祿八年乙丑　紀元二千二百二十五年

六月丙寅朔

武田晴信の屬將山縣昌景、兵を率ゐて越中に入る、

〔甲陽軍鑑〕　永祿八年乙丑六月、山縣三郎兵衛御先を仕り、越中へ御馬を出されし、飛驒國侍大將江間常陸守才覺仕、越中の内一郡あまを持候椎名と云侍大將

人數三千五百餘持候者降參仕り二番目の子幼少成を人質として御目にかけ信玄公を主君とたのみ奉る也彼人質勝頼公ゟ御預け彼成伊奈にさしをかるゝなり、

〔甲陽合戰覺書〕・同永祿八乙丑、六月、山縣昌景越中へ働椎名泰種降參、

〔享祿以來年代記〕永祿八乙丑六月、武田信玄出張越中、

○本條及ひ十年五月十八日晴信越中に入る條、頗る疑ふへし、且椎名康胤の歟を武田氏に通するは始めて永祿十一年（本條にあり）に在る如し、姑く疑を存す、

〔參考〕

〔三州志〕疑蓋餘考七 七年甲子夏四月武田信玄大膳太夫晴信是也信虎ノ子甲斐國主ノ將飯富三郎兵衞昌景飯富ヲ後ニ山縣ト改ム部衆ヲ率キ飛州ニ屆リ夫ヨリ越中ニ侵入ス白屋筑前守秋貞白屋ヲ迩谷又ハ鹽屋又平湯等ニ作ル皆誤ナリ今正本ヲ得テ改ム飛州ノ三木休庵ノ將ナリ江間常陸介輝盛江間或ハ江馬ニ作ル泉周「越後平記」ヲ按スルニ江間ノ祖ハ平清盛公ノ弟經盛ノ妾腹ノ子也壽永ノ亂後其妾其兒ヲ抱テ北條時政ニ據ル時ニ時政ノ養子トナリ江馬小四郎經盛ノ家ヲ繼キ飛州荒城郡高原ヲ領シテ常陸介ニ至ルトアリ又「春日山日記」ニ天正四年謙信越中へ出軍ノトキ常陸介兵五百ヲ率キテ加援ストアリ是ヲ以テ考フルニ江間氏モト飛州高堂城主ナルカ後ニ越中ニ住セシト見ユ怯レテ信玄ニ降リ輝盛ノ弟圓成寺後ニ還俗シテ江間右馬允ト號シ武田家ニテ士卒ヲアツカルヲ以テ質トス「甲陽軍鑑」ニ永祿七年飛驒國江馬常陸弟坊主普立寺甲府へ致進上候常陸無二他事御忠節ノ様子ニテ彼信ヲ俗人ニナサレ知行ヲ下サル江間右馬丞ト名ノル足輕十人預ケルトアリ按スルニ圓成寺ハ此普立寺也

八年乙丑六月武田信玄其將山縣昌景江間輝盛ヲ先驅トシテ越中へ侵入ス輝盛椎名泰種ト新川郡松倉城主舊識タルヲ以テ理會ヲ說テ泰種ヲ降ラシメ其二男龜松ヲ以テ質タラシム此一段「平鑑略譜」ニ見ユ「小橋家傳」ニハ泰種ニ男女三子アリ嫡子ハ魚津禪宗愛谷寺開山文齋二男ハ龜松女子ハ家老神前筑前要ト云小橋先祖九兵衞ハ泰種ノ外孫也泉周魚津「禪宗常泉寺記」ヲ見ルニ此寺ノ三世ハ椎名右衞門大夫子トアリ即此寺藏ニ此人ノ寄進狀一通今存ス併考スヘシ此詳ハ「越中古城考」松倉城ノ下ニ記ス泉周又按スルニ信玄ノ持國ハ甲斐信濃駿河飛驒遠江上野參河美濃武藏相模越中也此内甲信駿ハ全州ヲ領ス父信虎ヨリノ持國也飛遠上ハ半國アテ也參武相越ハ或ハ一郡亦ハ半郡也蓋シ越中ノ地領タルハ此本文ニ云時分ノコトナルヘシ然レトモ何レノ地ヲ信玄領シタルヤ其古記ナケレハ今考フヘカラス

〔三州志〕新川郡・松倉 鹿熊二名一蹤也在加積郷鹿熊村領山城也幅十六間北高一五百七十間西高六百四十八間列嶽峙東角川流西或云升形山之東也北高五百八十間東丸東西廿間南北十七間潤河自南走西爲二三丸要害距魚津一里十四町ト云古昔北國名城云鹿熊俗作角間 元弘中椎名孫八入道居ス〇中略此後椎名右衞門入道道三、其子肥前守泰種據ヲ永祿六年癸亥八月十日謙信此城ヲ攻取城ヲ修理ヲ爲シテ歸國トアレトモ其後泰種再ヒ攻取此城ニ入カ或ハ元龜二年辛未三月謙信復此城ヲ屠リ泰種ノ領六萬貫暨ヒ此城ヲ寵將河田豐前長親ニ與フト云ヒ一說泰種在城後、松倉豐後ト云者居之、其後河田居之トモアリ〇下略

永祿九年丙寅　紀元二千二百十六年

五月　甲午朔

輝虎、兵を率ゐて越中に入り、諸城邑を攻略す、

〔上杉謙信公年表〕六月朔日、公、越中ニ入リ、神保氏春ヲ攻ム、

〔參考〕

〔北越軍記〕永祿九年丙寅、三十七歳、五月謙信越後ヲ打立越中ヘ被攻入、神保越中守長氏カ籠候増山城ヲ被攻、上杉彌五郎義春ヲ遣シ小島城椎名庄助五郎ヲ攻落サレ候、國中方々働キ取出共仕置有テ、七月ニ謙信越後ヘ歸陣、

〔謙信年譜〕永祿九年丙寅春二月下旬、越中ニ御出馬アッテ、神保越中守カ居城増山ニ御手遣アリ、然ル處ニ武田信玄此鏈隙ヲ覬覦シテ北條氏康ニ使价ヲ立援兵ヲ乞、若干ノ軍兵ヲ合テ、沼田庄内ニ出張シ、吾味方ノ城ヲ責取ヘキ計策アル由、沼田味方ヨリ早馳ヲ以テ注進アリ、依之越中表ニハ歴ノ兵ヲ殘シ置、管領ハ先御馬ヲ班サレ、重テ注進ノ待レ、信玄モ早速信州ニ歸陣ノ由、重テ沼田ヨリ申來ルニ付、御陣フレハナシ、

〔三州志〕殘篇餘考　九年丙寅五月上杉謙信増山城（礪波郡増山村ヨリ東南五六町ニアリ神保長氏時ニ守之ヲ攻メ其將上杉彌五郎ヲシテ一説ニ彌五郎實ハ島山義則ノ第也ト云ヒ上杉謙信是ニ到ルヲ聞テ川中島四郡ヲ與ヘ上條某ノ家嗣ト為シ上條太田ニ仕フト云ヒ號セシム後ニ天正十六年小正月退ヨリ四郡ヲ返收セラレ此説詳ナラス）攻ム城陷ル時ニハ長尾小四郎五郎掛美庄助五郎掛美隆守又弓ルトニ作ル小出ニテ助守五郎ト守云リ一説ニ賀ト云ヒ出城ヲ攻メシム城陷ル説ニ信方ヨリ陷城ノ後景隆ヲ守ラシテ謙ラン而シテ所々寨ヲ修メ秋七月越後ニ歸藩フ土人此時相越傳一老尼アリ山城ノ麓浄一極道ヲ斷ツ後ノ兵增山ヲ攻ム昌斷ニツ作ル）ト數十日然レト此尼云此城ノ通兵糧ノ密飢色城ナシ東ノ攻手中屈ニス又ヲ惑ト後ヨリ即之山ヲ斷ツ圍テ攻ス城陷ルコトト數云今日然レト妙昌モケ城陷ハ此老尼因テノ住地タリ手ヲ倦ムニ城中ニ鳥ニ寓テ洗馬ヲ洗ハ然ル其洗馬ヲ以テ水ハ攻ム城ヲ白米ヲ用ヒルシテ悟リ愈日水路山ヲ斷ツ城生城瀧路山城ニ覓ニ城兵渴傳ヲ城陷ルト云ヒ此ニナリ城ハ大川ニ帶道奇ヲ攻ム其水湯布ノ如キ攻兵道見ス此洗馬ヲ以テ水ハ攻ム其集ス攻將ノ老翁之ヲ巷ヘテ此洗馬ヲ以テ米ヲ攻ム蓋シ米キニ城兵白米ヲ洗ヲ以テ沐浴ヲ今其例多シ平將門ノ絶水ノ弟能門ノ城ヲ攻ム蓋シ米キニ城兵白米ヲ洗ヲ以テ沐浴ヲ今其例多シ代記ニ見ユ「陸大徳永三年石見國青石城ニ毛利元就圍城ム」ト攻ムルトキ城主青屋友梅蒲生術貞ヲ用ヒシコト「蒲生記ニ見ユ也又天正十二年記州宋ル」ト説ヲ用ヒシコト「蒲生記ニ見ユ」ト攻ムルトキ城中此術ヲ用ヒシコト「蒲生記ニ見ユ」ト秀祿城ヲ佐々成政攻ム

永祿十年丁卯　紀元二千二百十七年

五月　乙卯朔

十八日、壬申、晴信、越中に入り遂に國境を巡檢す、

〔甲陽軍鑑〕永祿十年丁卯五月十八日ヨ、信玄公甲府を御立あり越中へ御馬

永祿九年丙寅　紀元二千二百二十六年

五月　甲午朔

輝虎、兵を率ゐて越中に入り、諸城邑を攻略す、

〔上杉謙信公年表〕　六月朔日、公、越中ニ入リ、神保氏春ヲ攻ム、

〔參考〕

〔北越軍記〕　永祿九年丙寅、三十七歲、五月謙信越後ヲ打立越中ヘ被攻入、神保越中守長氏カ籠候増山城ヲ被攻、上杉彌五郎義春ヲ遣シ小出城楫美庄助五郎ヲ攻落サレ候、國中方々働キ取出共仕置有テ、七月ニ謙信越後ヘ歸陣、

〔謙信年譜〕　永祿九年丙寅春二月下旬、越中ニ御出馬アッテ、神保越中守カ居城増山ニ御手遣アリ、然ル處ニ武田信玄此鋒蹤ヲ覬覦シテ北條氏康ニ使价ヲ立援兵ヲ乞、若干ノ軍兵ヲ合テ、沼田庄内ニ出張シ、吾味方ノ城ヲ責取ヘキ計策アル由、沼田味方ヨリ早馳ヲ以テ注進アリ、依之越中表ニハ歷ノ兵ヲ殘シ置、管領ハ先御馬ヲ班サレ、重テ注進ノ待レ、信玄モ早速信州ニ歸陣ノ由、重テ沼田ヨリ申來ルニ付、御陣フレハナシ、

〔三州志〕　鞬嚢餘考七　九年丙寅五月上杉謙信増山城（礪波郡増山村ヨリ東南五六町ニアリ、神保長氏時ニ之ヲ守ル）ヲ攻メ、其將上杉彌五郎ヲシテ（一說ニ彌五郎實ハ畠山義則ノ弟也、曾テ上杉方ヘ質トシテ到ルヲ、謙信是ニ川中島四郡ヲ興ヘ上條氏ノ家嗣トシ上條民部少輔義春ト號セシム、後ニ天正十六年正月景勝ヨリ四郡ヲ沒收セラレ太閤ニ仕フト云、按スルニ此說詳ナラス）小出城ヲ攻メシム、城陷ル（時ニ揖美庄助五郎（揖美又弓ニ作ル）小出ヲ守ルト云、一說ニハ長尾小四郎景隆守ルト云、按スルニ助五郎守リシヲ、陷城ノ後景隆ヲシテ謙信方ヨリ置テ守ヲスナラン）而シテ所々寨ヲ修メ、秋七月越後ニ歸落（土人相傳フ、此時越後ノ兵増山城ノ糧道ヲ斷ツコト數十日、然レトモ城兵聯飢色ナシ、攻手屆ス、一老尼アリ妙淨（一ニ妙昌ニ作ル）ト云、此尼云、此城ノ通糧ノ密路城東ノ林中ニアリト、攻手即之ヲ斷チテ城陷ルト云、今ノ妙昌ケ歟ハ此老尼ノ住地タリトア リ、又越後ヨリ増山ヲ圍攻スルコト數日、然レトモ城陷ラス、因テ攻兵水道ヲ斷ツ、然ルニ城中ニテ洗馬ヲナスコト、其水瀑布ノ如キヲ攻兵遠見ス、故ヲ以テ攻手倦ム、然ルニ烏鳶其洗馬ノ邊ニ群集ス、攻將ノ老翁之ヲ考ヘテ此洗馬ノ水ハ白米ナルヲ悟リ、愈ヨ水路ヲ斷チ、竟ニ城兵渇シテ城陷ルトナリ、按スルニ遣奇メレハ絕水ノ說疑フヘシ、ハシ米ニテ馬ヲ洗フノコト古今其例多シ、正曆元年平將門ノ弟能門ノ城ヲ攻ムルトキ、城兵白米ヲ以テ沐浴セルコト「多田滿仲五代記」ニ見ユ、大永三年石見國青石城ヲ毛利元就圍ムトキ、城主青屋友梅此術ヲ用キシコト「陰德大平記」ニ見ユ、元龜二年江州音羽城ヲ攻ムルトキ、城主蒲生貞秀此奇術ヲ用キシコト「蒲生軍記」ニ見ユル也、又天正十二年能州末森城ヲ佐々成政攻ムルトキ、城中此術ヲ用ヒシコト「混目集」ニ見ユ）

永祿十年丁卯　紀元二千二百二十七年

五月　乙卯朔

十八日、壬申、晴信、越中に入り遂に國境を巡撿す、

〔甲陽軍鑑〕　永祿十年丁卯五月十八日ヨリ信玄公甲府を御立ありて越中へ御馬

をむあらは、飛驒乃江間越中○甲斐將士人名考に據るに江馬常陸介輝盛なるもの飛驒に住し、晴信の爲めに江馬飛驒に住し、晴信の爲めに飛驒の椎名此兩人ゟ彼筋御仕置樣子被仰付、旗頭とせらる

〔北越家書〕　永祿十年五月中旬、信玄信州ヨリ飛驒國へ打入、椎名肥前守ニ議シテ越中國ヲ伐從ンノ調略アリ、然レ共魚津小井手ノ兩城堅固故深働叶難ク、信玄兵ヲ引テ六月十四日川中島へ出、越後ノ境目重々ニ手置シ、八月ニ至テ甲府へ入馬ト云々、

〔甲陽合戰傳記〕　武田殿越中江出馬、永祿十年丁卯五月十八日發足、傳云、飛州より越中へ出玉ふ、其道不自由あるゟ依て、過分乃金銀を民にあたへ馳走を得て越玉ふ、椎名も御馳走被申、降參の人ゟも少ゟ有々るゝと也、御歸るさに中島へ出給て、新要害を取立らるへきとの御あらまゝ、長尾を押へん爲引出さん爲と也、

傳云此要害の事催〳〵のミまて止ゟ々り、

○軍鑑家書等盡く信を取るに足らぬと雖も、他書徵證すへきものなきを以て、姑く錄〳〵て後攷に備ふ、

永祿十一年戊辰　紀元二千二百二十八年

三月辛亥朔

十六日、戊寅、輝虎越中に來る、本庄繁長の叛を聞き、乃ち軍を班す、

〔上杉謙信公年表〕　三月十六日、公越中ニ入ル、同月廿五日、公放生津ニ陣ス、會々繁長ノ叛報到ル、乃チ軍ヲ班ス、

四月庚辰朔

六日、乙酉、信玄、輝虎の越中を攻擊せしを聞き、長延寺實了を遣はし、上田石見に說き其徒を援けしめんとす、

〔護國八幡宮文書〕　○四彌波郡埴生村

追而雖輕微金襴進之候

金山逼迫之由候之間、近日爲後詰向于越後令出勢候、然者、任于大坂御內儀、以長延寺申候、此時依貴寺御肝煎、椎名右衞門大夫開運候之樣ニ御調略備要之趣可預馳走候、恐々謹言、

卯月六日　　信玄（花押）

上田石見守殿

〔上杉謙信公年表〕　四月六日、晴信公ノ越中ヲ攻擊セント聞キ、長延寺實了ヲ

遣ハシ、上田石見ニ說キ、其徒ヲ援ケシメ、已レ越後ヲ侵サントスルコトヲ報ス、

〔瑞泉寺記錄帳〕　井波ニハ侍分斗住ス、其頭分ニハ上田石見守・竹部豐前法橋・齋藤刑部・土屋薩摩・稻塚左近・桃井右近・右六人外ニ侍分三十余住、

〔參考〕

〔河合文書〕　○四郡戶出町　西礪波

於金山黃金無出來之間、一月馬壹疋分諸役御免許之由、被仰出候也、仍如件、

櫻井右近助
以清齋
奉之

天正五丑年
二月十一日

黑河也
金山衆

〔文學博士三上參次巡回報告〕　西礪波郡戶出町川合鍋石氏ノ文書ニ、當國黑川鑛山ニ對スル武田氏ノ朱印アリ、以テ一時其所領タリシヲ證スベシ、

七月己酉朔

十六日、甲子、椎名康胤本願寺に通じて輝虎に背き、又欵を信玄に送る、

〔勝興寺文書〕　○射水郡　伏木町

其已來申、遠慮外候、抑椎名右衞門大夫康胤背越後、本願寺門主得高意候、因茲當方へも無二相通候、如此之節、其國靜謐之御調略肝要候、是等之趣爲可申談、玄東齋大坂江指上候、金山江之五日之內ニ可越、長延寺候、彌御調談專要ニ候、定而可有其聞候哉、本庄彌次郎輝虎ニ敵對、常手後詰之備相催候間、致出陣、近日可令越河候、委曲八重森可申候、恐々謹言、

永祿十一年
七月十六日　信玄花押

勝興寺机下

〔謙信年譜〕　同月、○十二月、仰出サレニハ、越中魚津城ニ河田豐前守長親ヲ差置ルヘキトナリ、長親命ニ應ス、然レトモ其身ハ越府ニ在府シテ魚津ニハ長尾紀伊守ヲ大將トシ、古志ノ長尾左馬助・小越平左衞門・下條刑部少・庄田摠左衞門・長親一族ニハ折下土佐守・長谷川右馬助・小野寺治部少・南右馬允等、城番トシテ敵將椎名肥前守泰種ヲ押フ、椎名ハ先考爲景公ニ別シテ好ヲ通シ、其上飯野ノ長尾小四郎景行ヲ養子トシ、無二ノ御味方ナリ、ソノカミ神保安藝守ト椎名合敵ノ時、管領ノ御武威ヲ假リ催シ、强テ御出馬ヲ願ヒ、或時ハ援兵ヲコヒ、已カ危難

ヲ逝レケルニ、去ル永祿十一年ノ頃ヨリ、如何ナル事ニヤ武田信玄ト密通シ管領ニ對シ敵ノ色ヲ顯ハスニヨリ、河田長親ニ命シ是ヲ押ヘ玉フ、

○泰種は越中新川郡松倉城に居り、又金山を有す、元龜二年三月輝虎攻めてこれを取る、勝興寺も亦越中にあり、一向宗に屬す、元龜三年晴信一向宗徒を使嗾し兵を越中に擧け輝虎に當らしむることあり、本條の事、其月日を詳にせざるを以て、姑、是日に係く、是秋、輝虎兵を越中に出だす參看すべし、

永祿十二年己巳（紀元二千二百二十九年）

九月（辛未朔）

是秋、輝虎越中に入り、椎名康胤を攻む、

〔上杉古文書〕

此方客僧歸洛ニ御使小林方被指添候、御狀趣一々令披閲候、今度越中御出張、御表裏無之段御誓詞候、誠御入魂之至、於氏政忝可存候、其以來朝ニ暮ニ、貴國賴の所存之外無他候、就中去秋自柏崎至于彼國御所、其以後神保家中造意有之付而、神通川被取越、御靜謐之由候、此御仕置全御相違ニ不存置候、兩越之境堅固無之而者、信州不可有御長陣候、此處令分別、越中御仕置肝要存候、抑只今深雪之砌、信州御出張本望至極候、恐惶先段由信（由良信濃守成繁）相賴申屆候、御返答之上、重而以使可申入候、委細氏政可申展候、恐々謹言、

十一月十三日　氏康（花押）

山内殿

至于越中御進發御樣躰承度被存、以脚力被申遣候處、北林方被指添御懇答、氏康父子滿足被申候、先月下旬拙者新田迄罷越、由信相談、企使者候キ、抑越中御靜謐被納御馬上、聽而可被成御越山之由、寒天之時分方々御大儀察申候、先書如申遣至于信州御斷念願候、委細從父子直ニ被申入候、就中房州口之事、別紙ニ貴所迄被申屆候、有御鹽味御取成所仰候、隨而拙者ヘ御直書過分之至候、御請申上候、御披露賴入候、恐々謹言、

十一月十四日　遊光（山内）

山孫　康光（花押）

御報

御書謹而拜見、過分之至存候、仍越中鉾楯、彼口へ御進發、無御心元被存、近日新田迄拙者被申付候、然處其以前此方脚力ニ北林方被指添御懇答、爰元父子被存滿足候、殊雖雪中候、被成御越山、至于信國可被及御行歟、御尤候、隨而信州境各被致動、敵五十余人被討捕之由、（上杉武田守境の兵相戰ふ　以之父子心地能被存候、ものか踏者これを載せず）巨細者直被申遂候、此旨可願御披露候、恐惶謹言、

追而密柑一合進上仕候以上

十一月十四日　遠山左衛門尉　康光（花押）

山吉殿

自越中被納御馬、由信中越候、然間以使申屆候、殊越中表不殘御本意之由、誠以目出度、大慶不過之候、委細を以條目申屆候間、具ニ御返答所希候、畢竟者寒氣候共、順速有御越山、信玄可被押詰御行願望候、恐々謹言、

極月四日　氏政（花押）

山内殿

〔北越軍記〕　八月、謙信越後ヲ立、越中ヘ發向、神保安藝守長純ヲ被攻、此時分能州ノ國主畠山修理大夫義則其家始（家臣の意か）遊佐美作守同彈正左衛門長對馬守同九郎左衛門温井備中守平三郎左衛門畠田淡路守謀反シテ、義則ノ馬責ニ被出候跡ニテ、七尾城ニ火ヲ懸ル故、義則ハ城ヘ不歸得、直ニ越中ヘ落行、弟ノ神保長純方ニ牢人ニテ被居候、能州國中大ニ騷亂候ニ付、謙信越中ヨリ直ニ能登ノ七尾ヘ出馬候、

〔謙信年譜〕　同月、（十月）仰出サレニハ、越中魚津城ニ河田豐前守長親ヲ差置ルヘキトナリ、長親命ニ應ス、（中略、此の文は十一年七月十六日條に收む）今年十月始越中ニ御出馬有テ、神通川ヲ取越サル、（中略）

同月越中ノ兵事アリ、是去ル九月上旬ヨリ、椎名肥前守兵士ヲ揃ヘ働キ出ケレトモ、管領ノ嚴命ニ任セ、味方一切不取合、椎名モ流石功者ノ軍將ナレハ奮發ノ色ナシ、其後豐前守越府ヨリ歸城ス、長尾紀伊守・小越平左衛門是ヲ喜ヒ、椎名カ出勢次第、味方會釋ノ始末詳ニ演說ス、然ル處ニ肥前守ハ長親カ歸城ヲ聞ケルニヤ、軍日ヲ期シ大軍ヲ以テ寄來ル、長尾・小越始ヨリ此口ヘ出張スルトイヘトモ、管領ノ御下知キヒシキニ依テ一戰ヲ不始レハ鬱憤今ニアリ、此度豐前守歸城ノ上勝負ヲ決セントス、縱ヒ椎名猛勢ヲ寄タリトモ、爭カ吾武術ヲ撓スベキ

ト勇ミ進ヲ待ウケタリ、豐前守其勢ヲ見テ、面々驕侈法ニ過タリ、如此ニ敵ヲアナトリ、越度出來セハ、管領ノ嚴命ニ背クノミナラス、長親ニ於テイカヽ有ヘシト、以テノ外ニ制シ怒リ、只長親カ計ラヒニ任セラレヨ、軍ノ行ハ管領ヨリ被仰含タリ、心安ク存ヘシト打返シ打カヘシ制シケレハ、各力ニ及ス先城中ヘ引籠リヌ、椎名思ヒケルハ、越兵ハ弱敵ナリト察シ、必スアナトル形勢ニテ諸手ヘツヨク下知ヲ加ヘ、一戰ニ此城ヲ攻落シ、豐前守ヲ打捕、彌信玄ヨリ助勢ヲ乞ナヲモ越中ノ内輝虎拘ヘノ城々不殘セメ落サハ、輝虎後日ノ望絶ヘシト、諸軍ヲ勇ナヲ諸兵ヲ出シ、一文字ニ突テカヽル、御指南ニ任セ、所々ノツマリ横鎗伏兵ヲ分チ遣シ、我勢ヲ寡兵ニ見セ、亦勢ヲ見キラレシト、軍議ヲ相定ム、椎名彌敵ハ小勢ナリト察シテ、勝ニノルコト甚シ、豐前守敵ヲ思フ圖ニ引受、突カヽツテ攻戰フ、然處ニ區別シテ遣シケル處々ノ横鎗相圖調ヘ一面ニ蒐出ル、椎名此横鎗ニ併易シ盡ク敗軍ス、豐前守宰配ヲ揮ヒ敵ヲ追コト疾風迅雷ノ如シ、サレトモ元ヨリ管領ノ御下知ヲ違背セサル長親ナレハ、サシテ長追ハセサレトモ、敵ノ甲兵若干討捕ケリ、管領ノ御工夫ヲ以テ此度大利ヲ得ルコト、豐前守ヲ始メトシテ紀伊守平左工門其外一族等モ深ク感シ、則合戰ノ次第首級ノ注文越府ニツカハシ、管領ノ御一覽ニ備ヘケル、豐前守一身ノ覺悟ヲ以テ敵ト戰爭スルヿ是ヲ始トス、軍忠比類ナキ故、管領モ御滿足限リナシ、此行管領ノ御智謀ヲ開テ、豐前守ニ敎ヘ玉フト、丙々諸人推察シケレ共、椎名諸方ヨリ加勢ヲ求メ大軍トシテ攻來ル、河田モシ敗北セハ如何カアラント耳語キケルニ、豐前守却テ軍利ヲ得コト莫大ノ勳功ナリ、管領ノ御眼力モ淺カラサルト、賞嘆セスト云フコトナシ、〇中略同月、氏康ヨリノ書札到來ス、此度越中ニ向ヒ椎名ヲ責ラルヽコト小田原ニモ聞ヘシカハ、氏康ハ猶モ心悅シテ强テ管領ニ牒シ合、速ニ信玄ヲ討捕ンコトヲ申越ル、其書ニ云、

重而申入儀思慮不淺候得共、椎名進退早速有御赦免、年内之御行一方向被仰付候者、信甲御退治不可廻踵、去迚者信玄極可被押詰、由存間、忘遠慮申入候、恐々謹言、

九月晦日　　氏康

山内殿

〈梶原文書〉安得虎子所載　正親町天皇永禄十二年

如啓候、先書從越中歸陣、不休仁馬、今日倉内江令著城候、義重へ申合處、此度之條、早々手合候樣ニ其方父子急度催促簡要候、百日の越中陣諸軍勞兵半途滯留有之間敗候、○中略恐々謹言

十一月廿日　　輝虎（花押）

梶原源太殿

〔上杉謙信公年表〕四月廿六日小島職鎮、神保覺廣等繁長ノ降伏ヲ賀シ、且ツ兵ヲ越中ニ出サンコトヲ請フ、

八月廿日、公越中ニ入ル、

九月晦日氏康越中ヲ赦免シ信甲二州ヲ攻擊センコトヲ請フ、

十月廿四日、公河田長親ヲ留メ松倉城ヲ守ラシメ、越後ニ班軍ス、

〔上杉米澤家譜〕八月、越中ニ入リ神保安藝守義長ヲ攻ム、土肥・椎名唐人松岡瀧導タリ、遂ニ義長ヲ降ス、

元龜元年庚午　紀元二千二百三十年　甲午　朔

十二月

十七日、庚戌謙信、明春軍を越中に出ださんとし戰捷を祈る、

〔謙信年譜〕同月、○十二月十七日御看經所ニ於テ御立願ノ次第アリ、

一阿彌陀

是ハ眞言三百返念佛千二百返仁王經一卷

一千手

是ハ眞言千二百返仁王經二卷

一摩利支天

是ハ眞言千二百返摩利支天經二卷仁王經一卷

一日天

是ハ眞言七百返仁王經二卷

一辨財天

是ハ眞言七百返仁王經二卷

一愛宕將軍地藏

是ハ眞言七百返仁王經二卷

一十一面

是モ眞言七百返仁王經二卷

一不動

是モ眞言七百返仁王經二卷

一愛染

是モ眞言七百返仁王經二卷

何モ春二三月越中ヘ馬ヲ出シ、留守中當國關東何事ナク無事ニテ、越中存シノ儘一遍ニ謙信手ニ入候者、明年一年ハ必日日看經可申候也、

元亀元年　十二月十七日　謙信

御寶前

管領越中ニ御出馬ノ節ハ、信玄必甲信駿ノ兵士ヲ引率シ、西上州ニ發向シ、厩橋、沼田、白井、新田、足利邊ニ働出、或ハ信州貝津ノ城ニ來リ、飯山、關山ノ壘ヲ責、或關東ヨリ注進アレハ、越中ノ鎮兵ヲ差向、信玄ト戰ヒヲ接フ、然レ共信玄謀ヲ廻シ、サノミ驀々敗軍モナシ、是故ニ越中思召ノ樣ニ御手ニ不入、平日ノ勤行モ猶貴賤ノ徒武運長久ノ懇願ヲナシ玉フ、

〔上杉謙信公年表〕　十二月十三日、公來春越中ヲ平定センコトヲ祈願セラル、署名シテ謙信ト云フ、蓋署名謙信ト稱セラレタルモノ之ヲ初トナス、

元亀二年辛未　紀元二千二百三十一年　癸亥朔

三月

十八日、庚辰、謙信、兵を率ゐて越中に入り、富山城以下數城を陷れ、鹽屋秋貞等を降し、遂に軍を班す、

〔栗林文書〕前羽

昨日之書中ニ口者、喜平次之沼田ヘ可移由申候得共、丹後守高○北條敵○晴信武田退散之由申候間、其地之者共早々召連當府ヘ可登候、越中ヘ出馬之間、一騎不足無之樣ニ傍輩共可召連候、又關東ヘ越人留堅可申付候、○中略穴賢々々、

二月廿八日　輝虎（花押）

栗林次郎左衛門殿

〔上杉古文書〕

朔日之御狀、一昨九日到來、披見、本望之至候、仍向越中御出馬、神通川を被取越、東西一變ニ御本意、敵城十餘ヶ所被付落居、被納御馬之由、誠以目出肝要、氏政大慶

不可過之候、就中信玄出張ニ付而者、則刻可預後詰由、被露御紙面ニ忝存候、恐意
委細伊勢右衛門佐を相雇申屆候キ、定而可爲參着候、敵出張之義於承屆者、夜通
以早飛脚可申入候、恐々謹言

卯月十一日　　氏政（花押）

山内殿

〔甲斐甲府六兵衛所藏文書〕古文書所載

定

節々爲御飛脚越中へ往還神妙被思召候、因茲平井之内六貫文被下置者也、仍如
件、

元亀二年辛未
卯月廿六日　（龍朱印）

土屋右衛門尉奉之
成田之
藤兵衛

〔上杉謙信公年表〕三月十八日、公越中ニ入リ富山以下數城ヲ陷レ、鹽屋秋貞
等ヲ降ス、四月一日公越中ヨリ歸陣、

〔謙信年譜〕元亀二年辛未春三月上旬、越中ニ御出馬有テ、椎名肥前守泰種カ
附庸ノ城富山ヲ攻ラルヘキトテ、富山ノ近所稻荷山要害トス、同月十五日ヨリ
取詰攻ラル、同十八日、越中ノ敵兵鵜川ニ發向シ大ニ挑戰フ、此時越後分取高名
比類ナシ、泰種後援ノ志アリトイヘトモ、河田豐前守ニ押ラレ、働キ出ル事カナ
ハス、遂ニ富山落城シ泰種カ賴ミシ累代ノ家臣飯坂隼人佐ヲ始トシ甲士悉ク
討死ス、此表御隙明ラレ、則富山ヲ御取立、豐前守カ要樞ノ城ニサタメラル、○中略
八月○天正元年なり、是歳の誤、越中ニ御出張在テ椎名肥前守泰種カ居城新川郡松倉庄金
山城夜ヲ日ニ繼テ取詰玉フ、寄手ノ大將ニハ河田豐前守長親、先陣ハ長尾和泉
守秀忠、同左衛門景忠、竹俣三河守慶綱、五十公野右衛門大夫重家、吉江織部佐宗
信、北條下總守高常、小林左京亮等ヲ引卒ス、城中ニモ椎名カ一族家臣其外諸浪
人數多楯籠リ心ヲ金石ヨリモ堅ク、命ハ鴻毛ヨリモ輕シ、城門ヲ開キ突出々々
防戰ス、○中略斯リケレハ泰種モ群勢ニ攻付ラレ、爭カ持コラフヘキ、勇力屈シ、同
國不動山ノ衆徒ヲ賴ミ、軍門ニ降シ事ヲ請フ、泰種素ヨリ國郡ノ蠹害、本所ノ痼
疾ナレハ、根ヲ斷葉ヲ枯シ、屠殺アルヘキト思シ召詰ラレシカ共、管領天然仁義
相兼タル大將故、年來ノ好ミ捨難ク、流石ニ誅戮ヲモ忍ヒカタク、近年ノ不義悉

ク赦免アリ、依之金山城明渡スニ付テ、泰種ハ同國今泉城ニ遣ハサル、〇此事恐らくは非なん　此節越中一偏ニ御手ニ屬シ、金山城經營有テ河田豐前守長親ニ賜ル、長親近年魚津城ニ居住シ、軍功比類ナケレハ、管領モ褒賞有テ御感狀ニ十七萬石ノ地ヲ差添賜ル、長親如何ナル御夙緣ヲ結ヒケルニヤ、〇中略此外越中所々降參ノ輩ヲモ、少々寄騎ニ付ラル、手勢寄騎ノ軍兵ヲ以、領知ヲ相守リ、上口ノ鎮將トナサシム、御一族飯野長尾小四郎景行ハ椎名肥前守逆心ニ付、椎名家督ノ契約ヲ相違ス、然レ共越中諸士ノ存ル所モ是アレハ、景行ヲハ厚祿ヲ賜リ、富山城ニ差置ル、〇景行椎名氏の婿子となるは〇永祿十一年七月景行家臣太田式部少信（十六日條に收む、本書永祿十二年條に載せたり）能横口宮內少親宗ヲ始舊功恩顧ノ輩ニ、又越中降參ノ軍士數多付置レ、是又上口御出勢ノ便リトナシ玉フ、去レハ兼テヨリ管領越中ノ諸城ニ雄威知謀ノ軍士ヲ籠置ル、ニ依テ、越中大國ト雖モ、御手間入ヘキ事ナラネト、神保ハ信長ト一味シ、椎名ハ信玄ト心ヲ合スル故、管領越中ニ御進發アレハ、必ス信州飯山邊カ若クハ上野筋ヘ働キ出是ニ依テ越中ノ御出張度々ニテ思召ノ儘ナラス、角年月ヲ送リ玉フ去レ共武運歸スル處ナレハ此度ノ一戰ニ御靜謐ナリ、

〔參考〕

〔三州志〕 桂齋餘考　二年辛未、間者村田修理亮上杉家ニ屬ス、或ハ名チ繼殿介與十郎トモアリ、樫木村新川ニ在テ津毛城又津氣ニ作ル、新川郡「古墟考」ニ詳也、ヲ新築シ、今年三月二日其家宰村田彌三郎曁ヒ安達清藏三木休庵ノ父ト云、ヲ置ク、白屋筑前守秋貞飛州ノ國司ト云、上文永祿七年ニハ、飛州ノ三木休庵ノ將ト云ス、永祿七年武田信玄ニ降ル、今又信長公ニ謙ス、按スルニ其嫡男監物、二秋貞ハ前後越中ノ椙尾今泉津毛岩木猿倉、細澤ノ諸城ニ居ス、男三平ト父子三人飛州ヨリ越中ヘ出軍シ津毛城ノ南ニ椙尾外川又椙野ニ作リ、新川郡ニ在リ、津毛ト相距三十町猿倉津毛ヲ去ル十町、「飛騨軍記」ニ休庵ノ將小島三八郎時光ノ二城ヲ新築シテ據ル、而シテ福澤、細澤村領ニ在リ、今泉長記」ニ河田豐前ノ今泉城陷ルト云者是也、此後天正六年河田之ヲ攻取リ、ノ二城ヲ攻陷シ、又岩木新川郡ニ在リ、富山口リ三里奇、志賀兵部ヲ置ク、以上皆新川郡ニ在リ、又城尾ヲ攻ム、ニ別堡ヲ築キ其將杉政三郎右衛門ヲ置キ城生新貝郡ニ在リ、「古墟考」ニ詳ナリ、城主齋藤次郎右衛門常後丹ノ子、此時信長公ニ屬ス、事急ナレハ援ヲ越後ニ乞フ、因テ三月、謙信帶甲二萬八千ヲ帥テ越中ニ入リ松倉城椎名泰種之ニ居レリ、松倉ト云フ「北越太平記」ニ魚津ニヲ攻トリ、此城及ヒ其土貫六万貫ヲ河田豐前長親謙信ノ將ニ與ヘ、村田ト作ル、共ニ秋貞ノ椙尾城ヲ攻ム、秋貞利ナク飛州ヘ却ソクヲ西猪谷越飛分界ノ地、マ今ハ口留アリ、テ尾擊スト云、一說ニ、此時島銃ニテ殺スニ、子ハ行所チシレスト云ハ非秋貞下文ニ見エ、〇「北越太平記」ニ、今年八月再ヒ謙信越中ニ入リ椙野城ヲ取リ、小出城ニ長尾小四郎景隆ヲ置キ、中旬ニ帰國スト アリ、桂考スヘシ、

〔瑞泉寺記錄帳〕　越後之高田之瑞泉寺ハ元ト磯郡常願寺ト云、是ハ元亀二年上杉謙信ト當寺御和睦之時、證心之弟小山殿人質ニ行給フ、上杉ヨリ上田隼人ト云者人質ニ來ル、其子五ケ山ニ住シ梨子之市助ト名乘リ、御一流之節ヨリ五ケ山ヲ支配ス、

元亀三年壬申（紀元二千二百三十二年）

六月乙卯朔

十五日、己巳、加賀越中の一向宗徒等、上杉氏の兵と吳服山に戰ひて之を破る、

是日、謙信瑞泉安養二寺を滅さんことを祈る、

〔上杉古文書〕

自此方可申入候之處、先刻御懇札、即如及御返書候、加州之人數河上五位庄へ着陣必定候、早速從貴國御後詰無御遠之樣、御注進奉願候、明日者越府へ以御力可申上候、乍御造作御使相添可被申候哉、御同意奉願計候、此段天神山へも御傳書奉仰候、就中、其許之御備第一存候、恐々謹言、

尙々此間之風聞迄之体ニ而、相替候旨御後詰之段ニ極申候、被遠之樣御注進專用存候、とや〳〵　彼國之人數打出上候旨、有御油斷間敷候、

小六左職鉞（花押）
水孫次職勝（花押）
安藤兵職張（花押）
神近覺廣（花押）

鯵清御宿所

〔上杉家文書〕

急度申遠候、乃昨酉刻從火宮注進如被申者、賀州衆半途へ打出、河上五位庄ニ陣取申之由候、只今時分與申罷出儀不審存候、併注進之書狀三通可懸御目越申候、御披露尤候、爰元之儀、差事御座有間敷存候、殊一揆と半途迄打出候とも打返と、時々在之由申候、但催大軍越河、於申之、御人數之儀を者、兼而被仰付、御後詰候樣ニ

御申成尤候、今度如此之催大般自金山以計策山越ヲ懇引出申、爰元地下人を動
搖させ可申歟と合按量候、實不實之儀承屈重而注進可仕候、然而井上肥後船倉
ニ于今踞様ニ之計策致之候、此旨者下山船倉示合、一兩度太田保内へ相働申候
得共、從當地人數出申ニ付而、敗軍之躰にて罷退候、下山之口迄追籠申候、其以來
二度不罷出候、井上計策者候之旨、爰元休屈存候、乍去當地太田二ヶ所之寄居、用
心堅固、無油斷致之候可御心安候御次第候之、可然様御取成奉懇候、先書如申、從
河豐之十九人々數招越申、吉佐差添、太田之内本郷と申所ニ爲陣取申候、是又御
序候之、御心得奉願候、恐々謹言、

追而申候、已前御藏衆迄申候、鐵炮之玉薬從春中方々可被爲放申候間、多茂無
御座候、玉薬少被下候様御取成奉懇候、ゑひゑよなまりにても不苦候、以上、

五月廿四日　　鯵清
直和　　長實（花押）
山孫叁御宿所

急度奉注進候、仍昨酉刻自火宮如申越者、賀州之人數半途へ罷出、河上五位庄陣
取申之由候、唯今如此之儀何茂不審奉存之由申候、自然椎名以計策、足輕引出申
候らと技量仕候様躰承屈重而可申上候、井上儀、于今船倉路已前太田保内ニ一
兩度相動申候、雖然從當地出人數申候付而、少々者敗軍之躰ニ下山迄引入申候、
其以來者至今日不罷出候、相替儀御座候者、早速言上可申候、此旨可預御披露候、
恐惶謹言、

五月廿四日　　鯵坂清介
長實（居判）
長尼小四郎
景直（居判）

山吉殿
十流系圖飯野小四郎越中目代トアリ

以別紙申入候、雖而も可致言上處、御口留付而、迄々于今雖不始儀候、内々御意得
忝可存候、恐惶之通、岩木江申含候、拙者身上之儀者、何分ニも御諚次第と存事候

之條、御前之儀貴殿偏ニ御取成奉憑候間、御同意可爲本望候、將亦乍輕少三種一荷、并鮎之鮨一樋(桶カ)令進獻之候、御音問驗計候、尙彼口上相付候、恐々謹言、

小六左　職鎮(押花)

六月十六日

〔上杉古文書〕

其地御着陣之儀存候者、可申達候處、唯今之御書中見申候而被成御報非疎意候(間カ)仍一昨日之仕合不及是非候、雖然各無恙候間、可爲御大慶候、定今度之動、聊等之樣雖被下思召候、自火宮夜々ニ以脚力如申越者、御後詰お達者責而五福へ揚人數付力申候由候間、河豐致談合、五福へ上申候處、存之外敵出、備取懸候樣ニ、致防戰候得共、以大軍蒐申候間、神通お渡場少越度候、乍去爲指者樣不申、同心夜更與三水野越度候被聞召ふ般(マヽ)可被思召候、扨々火宮之儀者除度和談石動へ被除候由、一昨日ヨリ取刷、我等ニも被相懸候、然故火宮取詰候人數後心安存候而取出候間、如此候、然而爰元御着陣之儀、天神山有御談合、如何ニ候哉、跡衆相談申候躰被成之候、人數遣尤候、當地備之事者敵取詰申共、可御安心候、畢竟根强御後詰相極候節ニ可申達候得共、路次不自由候間、不能其儀候、努々非疎意候、恐々謹言、

追而被申府へ御注進御申候者、我等今度聊示之行不致之由、御取成被御申上奉願候、

六月十七日

直大　參御報

綾清(實時カ)
長(花押)

當地爲御加勢、半途訖御着陣之由候間、令啓候、仍爰元之儀、一昨日十五名ニ致談合、火宮爲助勢五福山へ打上大手合申候處、敵大軍を以取出降口蒐詰申候、雖然味方中無何事被罷除候、拙者物共ハ野本玄蕃允、四月一日新右兵衛尉木村善助此等之者ともをしめとして廿余人爲討死申候、心底可有御察候、將又當地備堅固ニ候、各々早速有御着陣、爰元御備可有御談合事簡要候、諸餘以面可申承候間、不能具候、恐々謹言、

六月十七日

直和　參

伊豫守
定長(花押)

〔上杉家文書〕

謹而申上候、新庄之儀餘無心元存候而、以飛脚申越候處、從鯵坂清介所之返札至越候間、爲御披見進上候、然者火宮之儀落城仕候、因茲爲始小島六郎左衛門尉何も石動へ罷上之由申候、此上之御備如何可被成之候哉、御先衆之義者、自以前如申上候、未石田ニ滯留仕候、併河田豊前守ニ致談合、何篇も豊前守取計次第ニ被致之、尤之由再三申届候、彼者今度新庄へ召遣申候間、自然御爲も爲可被成之指遣申候、相替儀御座候者、不限夜中注進可申候、爲右我等事者何越も可爲御諚次第候、此等之旨可預御披露候、恐々謹言

六月十八日　　直江大和守景綱（花押）

山吉孫次郎殿

〔上杉古文書〕

願文之所

右意趣者、賀州并瑞泉寺安養寺之一揆可蜂起、由申唱候、依之當郡能化衆六人申付、摩利支天法一七日修行、并仁王經尊勝陀羅尼、千手陀羅尼衆僧ニ申爲讀誦候條、賀州、越中之凶徒悉退散、雜意消失、越中、信州、關東、越後、藤原謙信分國有無事安全長久堅固、諸人得歡喜、可任安堵思者也、仍願文如件

元亀三年壬申　六月十五日　　藤原謙信（朱印）

御寶前

〔上杉謙信公年表〕　六月十五日、公、加賀國瑞泉寺安養寺ノ一向徒ヲ誅滅センコトヲ祈ル、

〔謙信年譜〕

同年（元亀三年）○初夏ノ頃ヨリ、賀州門跡ノ僧侶、并ニ一宗ノ士民、越中ノ曹洞派（一向宗の誤）○瑞泉寺、安養寺、此外黒瀬藤兵衛、小杉新八郎松永平左衛門、湯淺九郎兵衛ト與力シ、一揆ヲ起サントス、是ニ依テ、同六月十五日密宗ノ能化六員ニ命シ、愛染明王ノ法一七日、仁王經、尊勝陀羅尼、千手陀羅尼轉讀有、其加護ニヤ兩國終ニコトナル事ナシ、其願文云、（願文は上杉古文書と同しきを以て略す、本書末段兩國終無事なりといへるは大に誤れり）

○八月輝虎兵を率ゐて越中に赴き遂に富山城を圍むことあり參看すへし、

〔參考〕

〔三州志〕越中一向宗東方

瑞泉寺 礪波郡井波

安養寺 射水郡泉村

東方井波端泉寺城端善徳寺屬下

安養寺 新川郡北島村

古墟考

婦負郡吳服山陣城、或號白鳥城、二名一跡也、在長澤郷金屋村領山、今ハ吉作村領也、麓有白鳥宮、故ニ白鳥ノ名アリ、相傳上杉謙信越中攻ノ時神保越中守長職築テ居ス、

八月乙卯朔

十八日、壬申、謙信越中に入り、加越の諸族及び一向宗徒を擊ち、遂に富山城を圍む、

〔歴代古案〕

今度至于越中出馬、依之喜平次者共可召連、處ニ、關東火急ニ候得者何茂不時越山之儀申付候間、自陣返候得者遲候間、其元差置候、自然厩橋山際候間、南甲之凶徒打出候ゝ、地下人成共集多見得候樣ニ、聽助賴候、爲其爲横目大石藤右衛門其元ニ指置候、傍輩共如在之者候ゝ、以交名可申越候、喜平次ニ申付可爲折檻候、荒角諸口人留肝心候、猶彼者可申候、以上、

謙信

元亀三

栗林二郎左衛門どのへ

〔河田文書〕羽前

態爲音信珍重、具足到來祝着候、仍爲越山之間、越中堅固ニ可申付、ゑめ半途ヘ出馬候、賀州之者共、斷而勞兵故、悃望之樣ニ候間、半途ニ立馬、彼口手堅一際可付事輙候間、可心易候、上口未落居ニ、九越山口得者、其表ニ張陣も不叶、越中も捨事候條、留守中手堅申付、心安爲可張陣如斯候、扨亦彌五郎○輝虎子義春申越候分者、氏政向羽生出陣之由申越候、彌五郎越候、飛脚ハ、南乘出張之義者不知、山申候、吾分茂兎角不申越候、如何實儀ニ候哉、無心許候、東方茂屬一變候上、近日越山前候間、家中ニ付力、堅固ニ可防戰由、細々以飛脚羽生ヘ可申越候、亦歸馬之内者、何方之飛脚も其地ニ留、此方ヘ不越、緩飛脚ニ而可申候、萬吉歸陣之上可申候、謹言、

追而織部子之事、色々申候得共、陣々何茂召連可陣もの無之候間、歸陣候上と

申候、身之歸陣申候者、無理ニ取可越候、其時迎狡可越候已上、

八月十八日　　謙信

河田伯耆守殿

〔前田家所藏文書〕

輝虎出勢一昨日十八日ハ新城表山際ニ野陣仕、此方軍勢過半富山ニ在陣、其間及一里計相歸、然處南多郡ハ上口江州表ヘ可有出陣由、依被仰下、各被得其意之旨候、雖然上口之義、敵陣程遠候之間、先々近被防御敵、御理運之上ハ、四郡共上口ハ罷立、可相働由、北兩郡御多寺を以、御同心如此候、先々一刻も早々此表ヘ出勢候樣ニ堅可被仰付候、彼敵如何樣ニ雖相働、加越之軍勢一同樂合、唯以一戰可相果之由候間、結句早果道此行ニ相極候、依之心掛次第ニ一騎二騎宛成共、早々可被掛付事、可爲肝要由、可被仰付候、恐々謹言、

元龜三　八月廿日　　杉壹（杉浦壹岐法橋）

坪伯入　　玄任（花押）

字丹入

川左次

岸新右御宿所

先日者乍御報御懇書本望之至候、仍南方之儀、樣體具示預、畏入存候、其後相替無御左右候哉、承度候、隨而越中表之義、富山一段堅固相蹈、越後衆失手由候、信玄信州ヘ出馬候間、輝虎人數可被入加との取沙汰候、爰許相替儀候者、從是可申入候、恐々謹言

温井備中守　　景隆（花押）

元龜三　九月四日

坪坂伯耆入道殿　御宿所

〔上杉文書〕

重而申遣候、夕部自敵落來者申分者、當月中ニ大手口ヘ信玄可打出候、日〇九月四温井景隆書參照物裏を可見由申候、何方ニ而も奉公同事候爲、如何とも口掛春日山到事出來候て、勞功有間敷候、早々春日山ヘ移直江談合候而、用心簡要候、一人も爰元ヨリ返候者共在郷ヘ返間敷候、身之事者爰元見合可歸城候、一足も身之出候得者、

爰許敗軍之樣ニ見へ申候、淺間敢程候、身之背下知一人も爰元へ越候者口惜候、
其元之用心千言萬句候、山吉者も嬾而可返候、昨晩江馬方被打着候、爲此迎源五
方被越候得者、自敵陣可乘切樣ニ見へ候つる間、出備候得者、あなたヨリ此方之
武見之衆へ押懸候、豐前守者共助合敵十余討捕、富山へ押籠候、其時惣備敵出候
間、身之事者見知不申候、吉益五十嵐申分者、三千不足之由申候、又身之見量ニハ
四千内外之由見切候、兎角ニ四萬三萬與申つる口不審ニ候、跡之陳ニ者小旗も
人數も一切無之候つる、昨日自未明小旗を卷、惣宮筋へ無際限敵歸候、是ハ越前
衆敗軍と申候、又增山衆拂陣共申候、又能州當方江連々被申候つるが、加樣之義
ニ付而共申候、其故敵之人數無衆ニも候歟、不審ニ候、萬吉重而謹言、
追而爰元者可心安候、見詰候間、留守中さへ來月十日比迄無事ニ候者、本意者
疑有間敢候、以上、又申候此方之人數ヨリとつくん無少々、以上、又申候、其元火
急之義候者ニ當陣へ增人數可越候、其人數先留置、其元之用所ニ可立候、又無
事ニ候者、此方へ可越候、禰知へハ黑瀧を以差越候、不動山へハ庄内越中守越
候間、本庄清七郎をゝ春日山へ可召寄候、開發も同前ニ可召寄候、以上、

九月十八日　　謙信（花押）

山吉孫次郎殿
河田對馬守殿
北條下總守殿
專　柳　齋
長尾喜平次殿

〔南行雜錄〕

於越中賀州衆輝虎對陣、此表を指す出陣遲々意外候、○甲斐畢竟其表堅固御備肝
要候、恐々謹言、

十月朔日　　信玄

謹上朝倉左衛門督殿（義景）

〔勝興寺文書〕

其國之樣子餘無心許候、依以飛脚申候、抑不虛仕合故、富山落居の○傳聞の誤　無是非次
第候、去年以來賀越兩州對陣之事候之間、隨分手合之備無油斷候キ、雖然信玄自
身至于越後亂入之儀者、遠三之動無據故遲々、其已後彼表明隙歸陣候條、直ニ向
越府可動于戈之旨、令儀定、既信越之境迄先衆立遣候之處、於于途中得病氣躊躇

之砌、輝虎退散ニ付而無役ニ納馬候、信玄煩も平元之形候、然則後詰之行聊不可有用捨候、無二父子可令出馬候間、加州衆重而出張、其國靜謐候之様御肝煎尤候、委曲期來信之時候、恐々敬白、

十月朔日　　信玄（花押）
　　勝頼（花押）

勝興寺九下

〔歴代古案〕

○前略従所々申來分者、賀州凶徒可敗北由申來候、左様ニも候歟、初椎名何も敵躰之者共雖個盟候、とても見詰候間、此度聚取向後迄此口爲可心易、何をも申拂候、如何様ニ只者除間敗候條可心易候、乍去夜中敗北候者無了簡候、○中略

十月十八日　　謙信

河田伯耆守殿

〔武家事紀〕

就越中和與之儀、被加上意之條、同事ニ去秋以使者申候儕之處、○諸將感狀下知狀に申演之處に作る信玄所行定○下知狀に作る前代未聞之無道、且者不知侍之義理、且者不顧都鄙之嘲

其國之様子餘無心許候条、以飛脚申候、抑不慮之仕合、故富山落居無是非、次第候去年以來賀越兩州對陣之事候之間、隨分手合之備無油斷候ヽ雖然、信玄自身至于越後亂入之儀、遠三之動無據、故遲々其已後彼表明隙歸陣候条、直ニ向越府可動干戈之旨令儀定、既信越境迄先衆立遣候之處、於于途中得病氣、躊躇之砌、輝虎退散、付而無役ニ納馬候、信玄煩、平元之形候、然則後詰之行聊不可有用捨候、無二父子可令出馬、間加州衆重而出張其國靜謐候之様、御肝煎尤候、委曲期來信之時候、恐々敬白

其國之樣子餘無心許候
条以飛脚申候抑不慮之
仕合返富山落居無是
非次第候去年以来賀越
兩州對陣之事候之間
隨分手合之備無油
断候キ雖然信玄自
身至于越後亂入之儀者
遠三之動無據故遲々
其已後彼表明隙歸陣
条直ニ高越府可動干戈之
旨令儀定既信越境迄
先衆立遣候之處於于
途中得病氣躊躇之砌
輝虎退散付而無役ニ
納馬候信玄煩平元之形候
然則後詰之行聊不可有
用捨候無二父子可令出馬
間加州衆重而出張其國
靜謐候之樣御肝煎尤候
委曲期来信之時候恐々敬白

十月朔日　信玄（花押）

勝興寺　九下　勝頼（花押）

勝興寺九下

〔歴代古案〕

○前略從所々申來分者賀州凶徒可敗北由申來候左樣ニも候歟初椎名何も敵躰之者共雖悃望候とても見詰候間此度聚取向後迄此口爲可心易何をも申拂候如何樣ニ只者除間敗候條可心易候乍去夜中敗北候者無了簡候○中略

十月十八日　謙信

河田伯耆守殿

〔武家事紀〕

就越中和與之儀被加上意之條同事ニ去秋以使者申候儀之處○諸將感狀下知狀に申渡之處に作る信玄所行定○下知狀前代未聞之無道且者不知侍之義理且者不顧都鄙之嘲

○下知狀に作る

武田信玄勝頼連署書状　射水郡伏木町勝興寺所蔵

十月朔日　信玄
勝頼

[illegible]寺

哢次第無是非題目候、

一信玄既如此之上者、以專柳齋如誓約、永可爲義絶事勿論候、自其方兩度之將文加披見候、先書之御返答者、自他不入子細候、今度改テ被仰越候一義專要候、信長ト信玄間之事、御心底之外ニ、幾重之遺恨更不可体候、然上雖經未來永劫（下知永切）に作る候、再相通間鋪候、以誓詞蒙仰候越ト思意令啐啄、則飜牛王血判、長與一（郷）虎の部下顯眼前候、貴邊與信長申談、信玄退治不可移年月候、行等之儀切々可申承候、

一遠州表信玄備之躰、一向無首尾之由候、駿遠間之通路慥切留候、然而自此方令出勢之條、信玄近日之陣場ヲ引崩、信州ヲ後ニ當山與ヘ夜中ニ執入候、信州ヘ道ヲ作可往還候ハン、是も深山昔河人馬之足も輙不立之由候間、可爲難儀候、旨、畢竟可敗軍候、

一越中富山表之模樣具承屈候、一揆等并諸牢人種ニ懇望申由候、雖不珍候、堅固ニ被仰付之故候、就夫、思意可啓達之旨候間、乍憚申試候、敵陣廿日卅日之間ニ可相果候趣ニ付而者、押詰可被使事尤候、若又來春迄も可續之樣ニ候ハヽ、先日差赦候而、信上表御行可然候ハン、左候ハヽ、從此方、信州伊奈郡其外成次第可發向候、遠州者家康與此方加勢之者トモ一手ニ備、信玄ニ差向候、其彼是以敗軍案之

圖ニ候、信玄足長ニ取出候事、時節到來幸之儀候間、不可遁此期子細ニ候、信玄ヲ被打果候上ニ至テハ、賀越之一揆御成敗難何時候、更以不可入手間候ハン、前後之處御校量、御分別專要候、

一江北小谷表之事、落居不可有機程候、朝倉義景歸國之調儀無油斷候ヘトモ、歷留候間、不任心中由相聞候、士卒之難堪不過之旨候、然間籠城之體沙汰限候、

一度々如申候處、御前山其外諸城ニ人數陣々入置候、信長自由ニ可働支度聊無越度樣ニ令覺悟候、於時宜者可御心安候、尙長興可爲口上候、恐々謹言、

（元亀三年）十一月廿日　下知狀廿一日ニ作ル　信長（判）

不識庵進覽之候

〔大行院文書〕　新編會津風土記所收

前ノ去秋當口越中ニ是時鄰虎ヘ爲自出馬、度々勝利當陣及二三度敵間近押詰候故歟、正月賀州越中之凶徒令悃望候間、關信之依心懸、伺悃望口口爲號富山地利爲出城、半途迄納馬候、中

（天正元年）二月五日　謙信（花押）

游足菴

〔歷代古案〕

不思儀之世上故、其以來者不申屈口惜候、仍去秋越中表ヘ出馬、向敵地數ヶ所向地取立、暫可立馬處、可有其聞候、信玄向遠州參州、立武色之條、德川家康織田信長依好深、家康信長無二無三信玄ニ事切、當方ヘ入魂、信玄可押詰內談事終而、信長意見早ゝ從越中、恐老納馬、關信當秋一切肝要候、左候者家康申合從參濃後詰涯分可致之由、堅ゝ殊上口之義者小敵於信玄難者以其鉾不及弓箭、可消由ゝ之條城ゝ人數無不足、籠置當廿一日至于春日山納馬候、信玄事者信長家康令談合輙候、氏政者信玄押詰者以其足けた汰もへく候、蒐角ニ只今之分ニ有之者、關東無正体候之條、此度有御分別、其筋被執繩、當群於越山者一際御稼肝心候、依此挨拶重而可申候、恐恐謹言、

天正元

四月廿四日　謙信（判）

小田太郎殿

〔上杉謙信公年表〕　五月廿四日、越中ノ守將長尾景直等加賀ノ一向徒ニ越中ニ侵入セントスルヿヲ報シ、銃火藥ヲ輸送センヿヲ請フ、蓋シ晴信嗾シテ蜂起

セシメ公ノ越中ニ入ルヲ俟チ、氏政ト共ニ上野ヲ侵掠センヿヲ計ルナリ、

八月十八日、公越中ニ入リ新庄ニ陣ス、同月廿日、越中の一向徒杉坂玄任等公ノ出陣ヲ加賀ノ同徒坪坂壹岐等ニ報ジ、累リニ援ヲ請フ、同月廿六日晴信書ヲ杉浦玄任等ニ與ヘ、將ニ男勝頼ト出援セントセルヿヲ報ジ、更ニ加賀ノ宗徒ヲ招カシム、

〔上杉家譜〕

元亀三年、椎名神保ノ族黨魚津、小出、増山ノ士兵万人ヲ招集シテ富山城ニ據リ塞ヲ七所ニ築テ、之ヲ守ル、○十月、輝虎越中ニ入リ、七塞ヲ陷レ、遂ニ富山ヲ攻メ、之ヲ拔ク、

〔三州志〕七 機密餘考

謙信屠富山城

三年○元亀壬申秋謙信越中ヲ略セントス因テ魚津衛門一書ニ此時松倉城主椎名右衛門此城ヲ兼守スト云フ、保ンテ別ニ七堡ヲ七堡ノ名増山神保長純居ス等ノ國士富山城ニ椎名神保ノ族及ヒ諸浪士數十保シ守ルト云フ、舊記欠ク、築ク、冬十月、謙信歩騎一萬ヲ帥テ來リテ、七堡ヲ居リ、富山城ヲ攻ム、府兵モ一万堅守ス、然レ𪜈、十二月陷城、城兵二千之ニ死スト云フ、射水郡中老田村領ニ三十三塚アリ是此時

謙信斬取首三十三級ヲ攫出シ、爲氏ノ靈ヲ祭リ此塚ヲ築ト云、按ルニ此說非也、此塚ハ原九左衛門元成先祖九左衛門元次所築ニシテ、寛政五年五月元成家藏ノ舊圖ニ引合セ、此處ニ石碑ヲ建テ證之、然ルニ、武眞匹夫抄解ニ、越中岸川際ニ原九左衛門築タル首塚三十三アリシト云フ、是亦非也、岸川ハ礪波郡絲岡郷也、今此處ニ甲申塚ト呼ヒ方五六間ノ塚殘レリ、其餘ハ皆耕シテ田トナル、元次何ソ兩所ニ築カン、然レハ其岸川ニ在シハ謙信今年所築ノ塚歟、然レ𪜈、謙信既ニ永祿六年橋下條ニ築キ今年又築塚不審也○富山ノ陷落ヲ十二月トスルハ北越軍記ノ誤ヲ襲ヘルナリ

九月甲申朔

十七日、庚子、飛驒將江馬輝盛、越中に來りて謙信に謁す、

〔上杉謙信公年表〕九月十七日、飛驒將江馬輝盛越中ニ來謁ス、

〔參考〕

〔謙信年譜〕同國○飛州大原城主江間常陸介輝盛兼テ管領ヲ背キ甲州ニ好ミヲ通スル處ニ、去年管領賀州御出馬ノ武威ニ懼レ、近國甚々恐震スレハ、飛州ノ敵士是ヲ聞テ盡ク畏服シ、前非ヲ鑒ミ、不日ノ間ニ使節ヲ遣シ、分國ノ好ミヲ結フ、此皆管領ノ威名逐日増長スルカ故也、監物父子相議シ國中ノ義隨分沙汰シ畏、此上ハ越府ヨリ軍將一人差越シ、早ク平均ニ仰セ付ラレ然ルヘシ、吾儕父子ニ於テハ彌二心ナキ由誓言書ヲ調ヘ差上ル、去レハ去ル天正元年ノ夏輝盛管領ニ隨順シ越中御陣下ニ來謁ス、此時越中ノ逆徒蜂起シテ所々ニ充滿ス、輝盛

カ兵士若シ逆徒ニ途中ヲ遮レン事ヤ有ントヲホツカナク、則山浦源五ニ命シ迎働ニ遣サル、管領賢察シ玉フ如ク、富山ノ城兵是ヲ聞テ下知シケルハ、飛州ノ軍士管領ニ志ヲ通スル間、一人モ漏スマシ、況ヤ敵ハ小勢ナリト頻リニ兵士ヲ勵シケレハ、案ノ如ク敵悉ク蒐出シ、山浦ト江間カ間ヲ乘切ントス、亦先ニ遣ス我カ武見ノ騎馬ヲモ打取ントス、敵士我先ニト馬蹄ヲ進メ追蒐タリ、河田郎黨等取合助來リ、敵數十人打捕、富山ニ追入ケレハ、江間山浦モ富山勢少々打捕、渠モ又悉カナク陣ヲ班ス、此度山浦ヲ遣ハサレスンハ一定江間ハ利アルマシト諸人評議セリ、角テ管領江間ニ御對面有テ飛驒一國ノ治術輝盛ニ任セルヘシ、然レハ軍議ヲ錬擇シ、逆徒ヲ打隨ヘ、平均ノ外他ナシ、若救援ノ輩アラハ何時ニヨラス、兵士ヲ遣スベシト念比ニ仰セ含メラレ、常陸介ハ歸國ナサシム、其後輝盛又信玄ノ計策ニヲトサレテ、忽心ヲ變シ管領ノ厚情ヲ亡失シ、甲州ニ志ヲ通シ、近年ハ混ラ不義ヲ盡ス、去レ共飛州ハ小國ト云、遠方ト云、差テ御咎メモナカリケル、

〔北越家書〕　六月飛驒國白河ノ鹽屋筑前守許ヨリ兩士ヲ以書翰ヲ呈シ、江間常陸介同左馬允ヲ討テ國中平均ナサシムヘシ、援兵撿使ノ將ヲ賜ン乎ト云々、

公○虎輝則腹心ノ輩ヲ集メテ評議ヲ問玉フ、○中器夫ヨリ七月下旬春日山ヲ首途有テ、越中魚津城ニ著陣在シ、河田豐前守長親ニ有坂備中守長澤筑前守平子和泉守ヲ差副先登ニ命セラレ、都合六千餘騎飛驒國征伐ノ人數ニ定メ、其餘ノ軍士ハ直江大和守實綱、齋藤三郎兵衛利實、頼信カ男號下野守長尾權三郎景嗣ニ相屬、魚津水橋ニ殘シ置ル、婦負郡加賀澤ヨリ飛州小豆澤口ヘ押入玉フヘキ內試ナレハ騎馬ニテ通リ難キ難所、多勢却テ惡カリナントテ、態ト寡兵ヲ用ヒラレタリ、

〔甲陽軍鑑〕　天正四年子の歳ゐ、飛驒の國半國の主、をらや筑前子息監物、前々より是ハ長尾謙信の旗下ゐるゐ、謙信へ申甲州武田の旗下江間常陸を御退治尤と申て、越後勢を引出し、飛驒を皆乘取、謙信の國ゐ仕る、軍役の定ハ弓千張鐵炮千丁との儀也、其上越中の國侍椎名をも越後謙信とり倒、川田豐前と云輝虎れ內衆ゐくをらるゝ、此時を勝頼公後詰ゐをるへきと仰らるる、高坂彈正御異見申、輝虎と御取合ゐさを候ハゝ、則時ゐ武田の御家滅亡疑有間敷候と申故、飛驒越中の後詰ゐき也、○中器乍去飛驒越中の儀ハ勝頼ゐ樣ゐ候上ハ、捨らるゝ遠州口へ出る事も次第ゐ成間敷候、美濃三河遠州の城大形信長家康ゐとらをたるときく、飛驒越中も後を信長ゐとらを申へく候間、其たを當方へ取候とく、謙

信手つゐひ申さゞ、越中の椎名飛驒の江間常陸退治候て其跡謙信衆取也、

〔三州志〕 魏蹠餘考七　天正元年癸酉廻間、江間輝盛越中新川郡七萬石ヲ領シ、今茲中地山（新川郡千垣ニ在リ村南ニ）ニ新壘ヲ築キ、世臣川上中務（一ニ左工門ニ作リ、又經殿介ニ作ル）和仁經氏神代某（此二氏ノ通ヲシテ守ラシメ、自ラ甲府ニ到ル、永祿七年、輝盛武名知レス）三木（休庵ヲ）ン廣瀨（廣瀨京域ハ永祿十一年休庵ニ殺サ其子カ、然レハ茲ニ廣瀨ト云ハ其）ル、輝盛是ヲ聞テ信玄ニ告ケ、手兵三百ヲ率キテ飛州ニ到リ、川上、神代、飛州ヘ走ル、輝盛是ヲ聞テ信玄ニ告ケ、手兵三百ヲ率キテ飛州ニ到リ、川上、和仁、神代ノ兵ヲ併セ、船倉城（休庵ノ副ヘ、永祿十一年ヨリ此ニ居ス、男三木秀綱ニ小島三八郎ヲ圍ム、廣瀨牛丸、下文ニ云、又太郎ナルヘシ、祿周按スルニ是ノ牛丸ハ親カ兵子ヲ率キ來テ城子ナラン、牛丸ト三木トハ永祿十年相攻ム、其後和ス）ニ入リ、小島時光（三木ノ將）後拒ス因テ輝盛ノ軍敗走スレトモ輝盛拒シ偃月刀ヲ以テ敵ヲ斬リ八日町ノ橋邊（新川郡ニ在リ）憩フヲ牛丸又太郎（享年十七）來擊シテ輝盛ヲ斬殺シ其偃月刀ト首トヲ併持シテ踊躍スレハ、川上和仁神代各戰亡ス、此時江間氏十世ニシテ宗祀ヲ絶ツ、實ニ夏四月二十二日也、（江間常陸介輝盛ハモト飛州ノ城主ニシテ、永祿五六年ノ頃、越中ニ來レルカ、越中新川郡七萬石ニテ領メラレ、中地山ノ城主トナレリ、然ルニ輝盛、永祿七年武田信玄ノ降ル、飯富昌景ニテ攻メラレ、中地山ノ城主ハ猶ホ中ノ地ニ在リ、云、然レトモ此ノ椎名等ハ、江間氏ノ後絶ユ、越中ノ江間ハ亡ヒ、謙信ト共ニ飛州ヨリ越中ノ椎名等ヲ擊ツコトアリ、然レト今年越中ノ江間ハ猶ホ存セルカ、後ノ識ル者ニ待テ定ムヘシ、）

〔三州志〕 故墟考二　中地山（下山郷中地山領ニ在リ、）

天正元年江間常陸介輝盛（新川郡七萬石ヲ領ス）新城ヲ築キ其將川上中務（或ハ左衛門又ハ左衛殿助ニ作ル）

和仁某神代某ヲ置キシニ、三木休庵廣瀨宗域之ヲ攻メ川上等怯レテ去ルノ後、謙信又之ヲ攻取ルト云、（一說ニ飛州ノ士川上中務此城ニ居シ三室郷湯端城主村名モ今之ヲ唱カス、）畑九郎ト通合ト云、按ルニ湯端城名未聞カス、三室郷ノ

〔飛州軍覽記〕　然ル處ニ江間常陸介輝盛ハ越中新川領分中地山ニ城ヲ搆テ譜代ノ家老神代川上和仁等ヲ入置、其身ハ甲斐ノ信玄ニ仕ヘアリシニ、謙信方ヨリ中地山ヘ押掛ケ攻ケレハ、川上神代和仁等タマラスシテ方々ヘ逃落タリ輝盛甲州ニテ此有樣ヲ聞、彌信玄ニツカヘ、其上高原ノ圓城寺ハ舍弟ナレハ、甲州ニ迎テ信玄ヘ人質ニ渡シケレハ、信玄是ヲ還俗サセテ、江馬右馬允ト名乘ラセ手勢ヲ預ケ幕下ノ先鋒トシテ、既ニ飛驒國退治セント極ム、三木自綱是ヲ聞キ大キニ驚キ、國中ノ諸將ヲ觸カタラヒテ、手勢一千餘人引卒ス、廣瀨山城守モ此時ハ三木ニ緣ヲ組シ故休庵ニ加ル、江馬常陸介手勢三百余騎ニ越中落去ノ

家臣和仁川上神代等ノ士卒ヲ引卒シテ相加ル、故ニ高原ヲ出馬シテ荒城ニ討出責戰フ、三木ノ勢幷ニ廣瀨牛丸大勢ナリトイヘトモ、輝盛物ノカストモセス、手イタク相戰ヒ自身一文字ノ大薙刀ヲ以テ大勢ヲ切崩シ、追立〳〵勝ニ乘ジテ戰ヒケレバ、小島時光三木方ニ加勢シ寄來ル故ニ、サシモノ江馬モ戰ヒ疲レ、八日町ト云所ノ橋ノ邊ニ立ヤスラヒ居タル所ニ、牛丸又太郎生年十七歳一騎カケ來リ切テカヽル、輝盛彼薙刀ヲ取直シタリシカ、運命是迄トヤ思ヒケン、長刀ヲ打捨テ、牛丸ヲ呼テ汝大將ノ首ヲ取ル法ヲ知リタルヤト云フテ、首ヲ指ノヘテ牛丸ニ討セケリ牛丸首ヲ得テ立去リシカハ、江馬ノ家臣川上左衛門尉、仝縫殿介、和仁經氏、神代其以下ノ者共走歸リ、此有樣ヲ見テ同枕ニ討死ス、哀レムヘシ、先祖輝經ヨリ數代弓箭ニ携リテ譽ヲ取シ家ノ一時ニ亡ヒ失シ事痛ハシキ有樣ナリ、輝盛ノ骸ハ八日町ノ橋ノ邊リニ塚トナス、代々ノ領主タルニヨリ尊敬シテ御墳ト云、長刀ハ牛丸取ッテ後ニ金森ニ進上スルトアリ

十一月癸未朔

二十日、壬寅、織田信長、書を謙信に寄せ富山城兵の降を納れ、兵を信毛間に出たして、信玄を挾撃せんことを勸む、

〔大行院文書〕（○新編會津風土記所載）

○（前書全文ハ七月廿二日條ニ收ム）去秋可被聞及、歟信長以取懇、越甲一和意見候處、信玄如何分別候哉、朝倉義景於取刷者、越甲無事可落着候、織田信長至于取刷者、爲同心間布由候而、德川家康へ手出シ、同濃州向遠山信玄立色候、家康息者信長むこにて、信長芳志故家康三州口州被入手候、依之遠州參州へ信玄手出シ、信長江事切も同前ニ候、處猶濃州之內遠山江信玄出物色候間、彌信長家康無二無三當方へ浮沈共ニ以數通之誓詞被申合候信玄可押詰ヲ存時者、當口者少口ニ候條、早々令歸馬、信關江之調義存詰候、

去秋當口へ爲自出馬度々勝利、當陣及二三度敵間近押詰候故歟、正月賀州越中ノ凶徒令悃望候間、關信之依心懇、同悃望口口爲號富山地利爲出城、半途迄納馬候

天正元年三月五日　　謙信（花押）

遊足菴

〔歷代古案〕

從所々申來分者、賀州凶徒可敗北由申來候、左樣にも候歟、初雅名何も敵躰之者

共雖悃願候、とても見詰候間、此度撃取向後迄此口爲可心易、何ことも申拂候、如何樣ニ只者除間敷候條可心易候、乍去夜中敗北候者無了簡候、〇略中

元亀三ナリ

十月十八日　謙信

河田伯耆守殿

信玄向遠州參州立武色之條、德川家康織田信長依好深、家康信長無二無三ニ事切、當方へ入魂、信玄可押詰內談事終而、信長意見早々從越中愚老納馬關信、當秋一切肝要候、左候と家康申合、從參濃後詰涯分可致之由、殊上口之義と小敵於信玄、撃手を以其餅不及弓箭、可消由候之條、城ニ人數無不足籠置、當廿一日至于春日山納馬候、信玄事と信長家康令談合輙候、氏政と信玄押詰者、以其足けゝ我もへく候、〇中略恐々謹言

天正元

四月廿四日　謙信

小田太郎殿

〔武家事紀〕

越中富山表之模樣具承屆候、一揆等并諸牢人種々懇望申由候、雖不珍候、堅固ニ被仰付之故候、就者恐意可啓達之旨候間、乍憚申試候、敵陣廿日卅日之間ニ可相果候趣ニ付而者、押詰可被使〇諸將慮狀下知狀決に作る事尤候、若又來春迄も可續之樣ニ候ハヽ、先日〇下知狀被に作る差赦候而、信上表御行可然候ハン、左候ハヽ從此方信州伊奈郡其外成次第可發向候、遠州と家康與此方加勢之者トモ一手ニ備、信玄ニ差向候者、彼是以敗軍案之圖ニ候、信玄足長ニ取出候事、時節到來、幸之儀候間、不可遁此期子細候、信玄ヲ被打果候上ニ至てゝ、賀越之一揆御成敗、雖何時候、更以不可入手間候ハン、前後之所、御校量御分別專要候、〇中略

元亀三年十一月廿日　信長判

不識菴

進覽之候

〔上杉古文書〕

態令啓上候、仍此間と不申展候、御床敷奉存知候、隨而先度と御屋形樣松倉迄之納御馬候旨示預候、信長と被仰合子細御座候旨御尤候、新地兩城［　　］け［　　］用所等付遲々敵方備指儀之有間敷存知候、併無御弓斷可被仰付事專一候、

一上方之儀、信長御上洛ニ付、公方様被去御座候而、被成御懇望、二才之御曹子様人質ニ信長へ有御渡、御無事之由、然共御館石垣以下被直候、京中一段ニ候而若君様有御供奉、江州棹山迄御納馬候處、都ニ被殘置候、信長臣下衆公方様へ有被申事再亂由而、又自棹山御上洛と承候、如何之相果可申候哉、海道説之分、申入候、一信玄之義、甲州へ御納馬候、然間御煩由候、又被成死去候共申成共、如何不審存知候、

一濃州尾州之義、甲州入之有陣觸由申候、此段者信玄御越度も實説りと存知候、右此條々御屋形様へ雖可申上候、巷説不實存知候付無其儀候、事實々承候者可申入候、定而其方へも種々雖可被聞召候、海道説之分申入候、替子細候者追而可申上候、恐惶謹言、

卯月廿五日　　河上中務丞 富信（花押）

河田殿参人々御中

〔北越軍記〕　謙信越中在陣ヨリ長與一郎ヲ使者ニテ信長へ被申通、信長ヨリ返簡極月（天正元年正月ノ誤）謙信富山城ヲ攻落、二千余被打果、右信長ヨリハ家康ト信玄遠州口ニテ取合候間、謙信ハ越中ヲ指置、信州へ働、信玄カ留守ヲ被攻候ハヽ、表裏ニ敵ヲ受、信玄遠州ヨリ可引入トノ申合ナリ、

天正元年癸酉（紀元二千二百三十三年）　三月（辛巳朔）

五日、（乙酉）富山城兵復背く、謙信之を攻め、尋て兵を諸城に置き師を班へす、

〔大行院文書〕（○新編會津風土記所載）　正月賀州越中之凶徒合梱望候間、關信之依心懸伺梱望□爲號富山地利爲出城半途迄納馬候處、自信其使號長延寺者表裏申ニ付而、敵富山へ引返候間、恐老事も押返、富山へ凶徒追入、稲荷同岩瀬逢候、二重押上向城敵地之間、上道或半里又一里又十町有之處も候ニ押詰向城取立普請五日之内ニ出來、其上仕置申付可納馬候、左候者其方可招候、早々大義ニ候共被越靜ニ雑談申度候、扨亦賀州越中之凶徒者神通川向ニ陣取候、富山之外ニ一ケ所も敵城神通ヨリ内ニ無之候、果而富山持募義者有之間布候、（○中略）萬吉重而恐々謹言

（○中略）

天正元年
三月五日　　遊足庵

〔越中文書〕

今度啓達候處、御懇報畏悦候、其表之御樣體具承滿足候、雖不及申候、堅固ニ御備可爲專一候、輝虎和與之懇望候共、信玄江無御相談而ハ、一向無勿體候、敵計略ニ中族可有之候、御一味中被示合、互於同心者別條候、御門主樣江も右之通連々得御意候、○略中恐惶謹言、

二月廿六日　長政（花押）

勝與寺御同宿中

〔上杉謙信公年表〕

正月、公越中ニ陣ス、

四月晦日、河田長親越中ヨリ晴信ノ死去ヲ報ズ、

七月廿三日、是ヨリ前公再ビ越中ニ入リ、河田長親山浦景國ヲシテ加賀ニ入ラシム、

七月廿九日、公將軍義昭ノ敗亡ヲ聞キ本願寺光佐等窮蹙シ門徒等ノ消沈セルヲ慮リ、長親等ヲシテ加賀ノ同徒ヲ壓セシム、八月十日公加賀ニ入リ、朝日城ヲ攻ム、

十月十九日、公越中太田下郷ヲ河田長親ニ給フ

是歳、善德寺福光より城端に移る、

〔城端御坊善德寺由來〕　受誓坊○左善の法名ハ聖人ニ御別レ申、六年ノ間コヽカシコ經廻致シ、越前ノ國四位ノ庄荒川村ニ小庵ヲ結フ、頃ハ建暦二年、則元祖法然御往生ノ年也、○略中城端御坊先祖是也、○略中延慶元年中ノ三月、祖師聖人ノ御舊跡ヲ覺如上人御巡廻ノ砌、此道場ヘ御立寄有テ、○略中善德寺ト寺號ヲ成シ下サレ、是ニ依テ重キ寺柄トナル、○略中夫ヨリ同國石田ト云處ヘ移リ、御法義彌增々弘通アリシ處、○略中永享十二年ノ秋、甲斐ト朝倉ト合戰ニ及ヒ、國中大騷動ニ相成、此時石田岡崎御坊燒亡ニ及ヒ、○略中嘉吉三年ノ年、越前ノ石田ヲ退出シ、岡崎御坊ヲ加州河北郡伊賀ノ庄砂子坂ニ移シ奉ル也、○略中大永二年ヨリ山本ノ里ヘ引移リ、○略中永祿二年ノ春福光ヘ引移リ宗意ヲ敎喩スルニ昼夜ヲ云ハス、老若男女參詣シテ繁昌申ス斗リナリシ、サレハ此處ニ元龜三年迄居住有テ、凡十五年ヲ經タリ、時ニ福光ヨリ東十五町ヲ隔テ國主アリ荒木善太夫ト號ス、彼地ヲ大驛ニ致ス望アリ、是ニ依テ福光善德寺ヲ招請シ玉フ、數遍辭退アリト云ヘトモ、國主ノ命ソムキガタク、止事ヲ得ズシテ御掛所ヲ福光ニ殘シ、城端ヘ轉敢

ナリ、頃ハ人皇百七代正親町院ノ御宇天正元年ノ年也、扨國主ノ歸依淺カラズ、世上人夫力ヲ盡シ懇志ヲ持運フ事申斗リナシ、扨善德寺大門ハ則國主ノ城門ヲ御寄附也、（荒木善太夫二ノ丸ノ門也、此門ヲ苗加村萬福寺ヘ讓ル也、）設寺ノ義ハ人皇百五代永正年中ヨリ御觸頭越中惣祿寺頭也、扨又御本山九代目實如上人ハ連枝ノ御子ニテ、大永五年二月二日六拾八歳ニテ御遷化ナリ、世上ニ御二日樣ト敬ヒ奉ル也、此御眞筆ノ御書ニ、（中略）右實如上人御眞筆ニテ御坊所ヘ成下サレ、今（瑞龍院）一ノ御書物也、

天正二年甲戌（紀元二千二百三十四年）

四月乙巳朔

十七日、辛酉、越中一向宗徒糧食を本願寺に贈る、是日、顯如報書して之を嘉みす、

〔南系圖歷代誌〕

十四代　南兵衛光信（元和三年九月十五歳行年九十四日）

同妻（寛永七年四月三日行年九十三歳）

時ニ天正二年大坂本願寺顯如上人樣之御代、信長ヨリ顯如樣ヲ奉攻候依テ、諸國同行御願付、兵衛光信此時俵藏百五十石、六渡寺湊町竹内千四郎船ニ積登リ四月十六日夜首尾能右米城中ニ納メ、川下ヘ下リ候處、船中江城中ヨリ顯如樣御直翰之御書被爲下、難有頂戴仕候、則御家老御添翰アリ、

かへも〳〵心得へくは往生の一儀也、眞心決定して淨土の往生願ふへくあり、夫いかほとつみ深き身なるとも、彌陀ゑまかせまいらせて、おんたもけんへと、一念たのみまふもはかりにて、淨土往生とくへく者あり、今度米百五拾石入城まんぞくにゆかしく、

天正戊四月十七日　釋顯如判

越中國南兵衛

今度爲御勝米、被登遠國積、不淺段被思召ゆ、依而御書被爲下ゆ、謹言、

天正二年戊四月十七日　下間刑部卿法橋　顯康

上野法橋正秀（花押）

越中射水郡田子村　南兵衛殿

今度遠國厚志之段、御表一流被思召、御滿足ゆ、依而御直書如此ニ候、已上

天正戊四月十七日　松井内記（花押）

越中射水郡田子村　兵（雨脱カ）術殿

〔雲龍山勝興寺系譜〕元龜天正ノ間、石山本願寺ト織田家ト不快ニテ戰爭アリ、其節家臣ヲ始メ北國ノ軍勢ヲヒキヒテ大阪ノ後詰ヲナス、依之細川北條上杉長尾朝倉諏訪淺井武田土肥等ト軍事ノ掛引申合ノ書翰アリ、諸將直書ノ内加州小松中納言利光卿宰相綱紀卿ノ所望ニヨリ數通ヲサシイダシヌ、顯如上人ヨリモ軍功ノ感狀數通アリ、

天正四年丙子　紀元二千二百三十六年

三月　甲午朔

十七日、庚戌、謙信越中に入り、是日神通川を渡る、

〔新集古案〕

態令啓入候、先以于今御在陣之由、御太儀令存候、將又越府より御出馬之儀如何未相知候哉、今程御馬罷出爲者、御本意眼前ニ候、描者式別而御先手仕御馳走可申上候、此旨越江可被仰上候、恐々謹言、

二月廿日　　温井備中守　景隆

平加賀守

色部宗四郎殿

齋藤下野守殿

岩井民部少殿

小倉伊勢守殿

五十公權右衞門殿

高知

遊佐四郎左衞門

盛光

長九郎左衞門

綱連

〔長文書〕

如被申越長職（神保越中守）日（宮城主）色々被歎候間、不圖出馬、十七日神通越河、十九三日之内敵地悉落居、内々守山（射水郡）湯山（射水郡）可擬落處、六同寺（六渡寺）斷而水增故、于今不被越河候、於時宜者可心安候、被入心飛脚早々喜悅候、可加懇意心中ニ候間、同意肝心候、恐々謹言

三月廿日

温井　兵庫助殿
長九郎（綱連）左衛門殿
平　新左衛門殿
遊佐孫太郎殿

〔上杉謙信公年表〕　二月四日、能登七尾城主畠山義隆、其臣長對馬、三宅備後等ニ鴆セラル、部將黨援國内大ニ亂ル、温井兵庫、長九郎左衛門、遊佐孫太郎等我ニ屬シ、對馬備後等信長ニ通ジ三月公越中ニ入リ、十七日神通川ヲ渡リ、廿日狀ヲ温井兵庫等ニ報ズ、

〔参考〕

〔北越軍記〕　三月謙信越府ヲ立テ、越中ヘ發向、椎名泰種カ籠ル所蓮沼城ヲ攻落、泰種自害、ソレヨリ謙信ハ飛驒國ヘ打入、（○下略）

〔武隈文書〕（○下新川郡松倉村）　柚山金ケ崎等籠城之時、暦應元戊寅七月、新田方加勢トシテ出羽北越後ヨリ大井田彈正、中條入道鳥山左京輔風間信濃守、禰津掃部等、其勢弐萬騎ヲ以テ當國ヲ押通リ、其時越中守護桃井播磨守直常右黒左近輔

在京シテ有シカ、松倉城主普門藏人俊清、黒部川江出張シテ防クト雖モ、僅五六百ニモ不足、無勢ニテ大軍ニ打破ラレ、俊清無僉方、居城松倉城江引籠シカ、跡ヨリ大軍押掛リ、終ニ落城ス云々、鎌倉北條九代之將軍高時入道崇鑑沒落之後、暦應四辛巳五月、相州住人椎名孫八入道胤明、尊氏將軍ノ命ニ隨ヒ、松倉城主ニ轉シテ來城ス、領知六萬石、其時奥州武隈之郷主五郎源元長、胤明之應需同腹シテ此地ニ來テ三百山ニ住ス、知行八百貫地ト云々、椎名氏十六代右衛門太夫康胤公ノ愛妻暦女者稻見七郎右衛門茂周ノ二女也、且當家十一代左門五郎元員之室、瀧女ノ妹也、永正十七庚辰三月初ニ、康胤公愛妻暦女ヲ具シテ當家ニ至リ、鎮守社頭ニ老桂木有リ、此木ヨリ八重櫻奇生ス、此華ヲ一見ノ爲ニ其樹下ニ至リ、一覽有ル否ヤ、愛妻暦女俄ニ發異疾、當家ニ歸ル、康胤公ニ向テ遺言シテ曰、我身沒後解腹シ、玉フ可シ、必以悲愛、冥遠之也、即座ニ及命終、康胤公如其遺辭、果而有徴、胎子不死、男子得出生也、然モ左跟ニ有疵、爲跟、是故追思母之冥福ノ爲ニ出家得道ス、執行成就之後、常泉禪寺三代之住持職松室文壽和尚是也、壽五十一歳、元龜元庚午正月廿日入寂也、旦康胤公妻暦女時年二十三歳、永正十七庚辰三月朔卒、法號賀運自慶大姉是也、則常泉寺開ヲ領ス、而後椎名氏拾五代孫六入道道三義胤

之代天文十一壬寅九月、越之後州春日山城主長尾信濃守爲景、當國江乱入シテ働キシカ、神保氏、石黒氏、土肥氏、土屋氏等蜂起シテ合戦ス、爲景終ニ討死ニス、□□天文十七戊申八月廿一日、越之後州春日山城主長尾彈正少弼景虎當國江頻リニ乱入ス、依之椎名氏、神保氏等宮崎江出張シテ防戦ス、景虎、同九月三日歸國スト云云、天文十八己酉二月廿五日當家十一代左門五郎元員ヲシテ肥前守康胤公之使者トシテ甲州江令使、三月八日甲府江至着ス、九日ニ登城シテ武田大膳太夫晴信公江御目見シ、康胤公ヨリノ願書ヲ指上、尙口演ヲ以テ達スルニ、去申八月廿一日ヨリ長尾景虎越中江乱入之處防戦ス、又當年モ風評如斯、依之及危難候ニ付與力ヲ奉願旨、恐入テ言上ス、時ニ晴信公願書ヲ御披見有、大悅之氣色ニテ御盃ヲ被賜、暫有テ御返簡並信州更級郡之内ニテ數千畝ノ田地ヲ可被附御上意ニテ被仰下旨、難有頂戴仕、同十一日甲府出立シテ信州丹波島ニ至リ、折節川洪水ニテ二日滯留、復越後不親知等ニ三日逗留ス、三月廿七日松倉江歸府ス、即刻登城シ甲州ヨリ之御返簡ヲ指上、並ニ御上意之趣ヲ相達處、主人康胤、椎名氏、知行高之内四万石上杉江貢ク、殘四万石越中賀積布施之内ニ領ス、外ニ信州ニテ武田家ヨリ賜分椎名氏ノ持分ニテ和睦調、暫ク無事也、○中畧、永祿七年八月廿三日條に收む、且椎名氏沒落ハ、天正四年丙子三月七日、上杉彈正大弼輝虎入道謙信當國天神山ノ城江來着ス、且椎名肥前守、康胤嫡子康信嚴命ヲ輕シテ防戦スト雖モ、輝虎方ヨリ城東ノ茅原江夜ニ紛レ忍入、兵火ヲ打掛シニ、忽ニタチアカリ水便ヲ殘切、終ニ三月十日落城スト云云、其時當家拾二代祐太郎元直時年六十二歳ニテ老母ヲ具シテ所持之武具鎧弓、具足、馬具等、知音之太皇寺ニ預置、浪々スル事既ニ貳年ヲ經テ、天正五丁丑十月蓦跡ニ歸、老母竝妻子等ヲ具シ、氏神ノ社頭江再詣シテ、先祖之古規ヲ追慕シ、我カ不運ヲ願ミ、感涙ヲ流シ、不覺就睡眠、夢中忽然トノ鎭守神異形老翁ト現ジ大悅不淺、是ヨリ松倉城ヲ守ル事愈堅固也、此時ニ當ラ椎名氏事良黨有功名者、小幡口郎早留、内山安藝時忠、溝口伊右衛門知春、廣瀨新兵衛生清、武隈左門五郎元員、嫡子祐太郎元直、椎名源内左門照康、寺崎半之進喜龍、内山外記哉在、稻見七郎右衛門茂周、荻原内記求常、小田惣之進榮敬、伊藤喜内久斤、杉原源左雉正、越野兵衛一但、澁谷八平故第、淺井久平都等、前原次左衛門朝退、波邊瀨馬平、城五左衛門成忠、吉川源内忠陳、松田清五達仲、本庄喜次郎照仲、深間兵衛道信、此盡勇悍死節之臣也、天文二十辛亥二月十八日、長尾景虎使者河田豐前守當國將之内、土屋美作守、由淺次郎方江至着ス、元來國中之密談ヲ内

聞スト云、天文廿一壬子五月十三日景虎當國江發向シ、神保、椎名、土肥、石黒等殿戰ス、同六月廿八日歸國也、天文廿二癸丑七月廿五日景虎黒部迄發向シ、同八月二日歸陣也、天文廿三甲寅八月朔日、上杉彈正大弼景虎當邦江發向シ、天神山ニ城ヲ築ク、其時椎名氏菩提所雲門寺兵火ニ罹リ廢亡ス、依テ國中之諸將蜂起シテ防戰スト云、永祿二己未四月廿一日、上杉彈正大弼輝虎入道謙信當國江發向シテ椎名肥前守康胤神保安藝守氏春等和睦ヲ調、六月九日越後江歸國ス、且シテ告テ曰、汝今武運盡テ如是、是則宿緣之爲處也、汝速ニ此地ニ安住ス可シ、是有緣之地成カ故ニ、子孫永ク連綿タラン、我ハ武隈家之守護神也トノ玉ヒテ、桂木ノ中エ入リ玉フ、正睡已ニ覺テ、謹テ奉ニ再拜、卽チ任神慮而、此地ニ安住ス、於是家名左衛門ト改、祖先ノ得祭事而後天正六戊寅年上杉氏ヨリ河田豐前守ヲ松倉城主トナス、此時左衛門ノ住地何人江貫ヲ附屬スルヤト糺問ス、僞テ隣邑之分地ト答ルヤ、天正九辛巳六月、河田豐前守、小津城代吉井、織部兩士ニテ小津ニ籠城シ、信長公之勢ヲ請ル、其時惣大將ニハ柴田修理進勝家ヲ遣シム、豐前田又左衛門尉利家、佐々內藏助成政、神保安藝守氏春、佐久間玄馬亮盛政、丹羽五郎左衛門長秀、青木紀伊守、山口玄馬、德山五兵衛、推名孫六等四万八千餘騎ヲ以取卷、終ニ落城ス、河田吉井討死ト云、天正十壬午三月、佐々成政ヨリシテ左衛門住地誰人江貫ヲ附屬スルヤト强テ糺問スルニ、隣邑之互農者ト答、天正十四丙戌年新川郡者羽柴筑前守利家公ノ御領トナリ、其後文祿四年乙未十一月左衛門住地開發所無見地ヲ以テ、里名ヲ小管間村ト改、令下而、御印書被仰付也、依之子々孫々代々聖恩ヲ蒙リ、農行シテ可安住事ヲ得タリト云爾、

文祿四年乙未　　武隈十三代左衛門

元重（花押）

〔松倉城椎名氏之傳寫〕

椎名氏松倉居城ノ歷代

孫八入道　　胤明
次　郎　　胤常
六　郎　　胤平
四　郎　　時胤
道　山　　胤勝
孫六入道　　佐胤

肥前守（始右衛門太夫ト云ナリ）、康胤
孫　六（始小四郎）　胤好

推名氏ノ紋在鎌倉笹龍膽、當國來テ九ノ内ニ揃鷹ノ羽、

〔三州志〕（樋爪餘巻八）　今年三月謙信越中ニ出軍蓮沼（今礪波郡猫遺跡アリ、）ヲ攻ム、城主椎名肥前守泰種自盡シテ城陥ル、（一説ニ謙信松倉城ヲ攻ス、然レトモ泰種堅守シテ陥チズ謙信土民ヲ賞テ北故ヲ問フ、一老婦ノ曰、東ノ險阻ヲ踰テ信州ニ通シ軍糧ヲ運入シ城後即チ東山ノ樋路ヲ伏テ断水ヲ引ユヘ也、若此二道ヲ断ツナラハ城落ツヘシト云、謙信即チ茅原ニ火ヲ放ツテ水路ヲ河田ケレハ八月十日城落ツ、泰種ハ氷見庄朝日ニ退テ、又茅原ニ火ヲ放ス、因テ謙信松倉城ニ河田豐前ヲ置ク、或云、此事永禄元年ニ在リ、永禄九年謙信増山城ヲ攻ル、注文ニ小出城ヲ河田ヲ圍ムコトハ元亀二年也、又按スルヲ以テ、一説ニ此時謙信攻取リ、疑ラクハ是ト一事ナラン、小幡家傳ニ松倉城主椎名泰種領分ハ新川郡加積郷河南庄十八萬三千石トアリ、今ノ小幡雅樂助先祖九兵衛ハ泰種ノ外孫也、）

夫ヨリ又越中ニ來リテ富山城ヲ攻ム、城主神保安藝守氏春、其男清十郎、同姓越中守正武富山城ヲ棄テ守山城ニ保ミ城邊ニ湖水ヲ激入シテ固守ス、石黒左近ハ木舟城ニ在テ之カ援勢ヲナス、神保兵庫氏信（氏春ノ叔父）増山城ヲ守ル、（一説ニ此時謙信増山城ヲ陥シ氏信自殺スト云、承周又古記ヲ考フルニ天正ノ間、神保カ將婿瓦邪下瀬邑ニ于城ヲ築キ、釣瓶城ト號セシハ此時ナルカ、）因テ謙信小笠原右馬助、上杉民部ヲシテ富山ヲ守ラシメ、神通川ヲ渉リテ射水郡ヘ亂入ス、

神保ノ黨久世但馬、益木中務、游佐信濃、小島、倉光、鞍智、寺崎、唐人野（今ノ高岡）ニ出張シテ之ヲ拒ム謙信夜之ヲ擊テ追拂ヒ加州ヘ向フ、（小島以下古記名ヲ欠ク等關）

九月（辛卯朔）

八日、（戊戌）謙信、椙尾、増山の二城を陥れ、之を栗林政頼に報す、

〔上杉謙信公年表〕　九月八日、椙尾、増山二城ヲ陥レ、之ヲ栗林政頼ニ報ズ、

天正六年戊寅（紀元二千二百三十八年）

四月（壬午朔）

七日、（戊子）信長、佐々長秋に命し、神保長住を助けて越中に入らしむ、

〔信長記〕　戊寅四月七日、越中神保殿（○長住）、二條御新造へ被召寄、此比御對面無御座、子細二位法印佐々權左衛門（○長秋）を以て被仰出、黄金百枚並志々良百端被參、輝虎被相果付て、飛驒國司へ被仰出、佐々權左衛門相添、越中へ入國候也、

〔上杉古文書〕

態令啓達候、仍謙信不慮御死去被成候儀、言語之外候、尤近年雖可申達候御國御法度大切候而、乍存知無音候キ、隨而豐州御身上之義、此節候條、上樣へ御一味被成可然存候、於御同意者、御報ヨリ御前之儀涯分馳走可申入候、越國之内方々ヨ

リ御侘言申仁多候得共、其方より、于今何共不被承候、さ候てハ江州御本國之儀候間、御分別可行之儀候、神保殿入國之儀付而、爲御使飛州迄被下、幸之事と存知、豐州へ以書狀申入候間、御内存可蒙仰候、近日可被上候、可達上聞候、將亦先年給候定器、未所持候、御懇意之段忘不申候、次拙者名乘判形少ク替リ申候、御不審候ハん間如此候、恐々謹言

卯月晦日　　佐々權左衛門尉　長穎（花押）

若林助左衛門尉
御宿所

猶以、從前之御入魂候事候間、如此申入候、是非共此時御一味可然奉存候、縱豐州何ゟと被仰候共、達而御異見尤候以上、

〈總見記〉　今年大臣家、北國御退治ノ儀、御定有之、先ヅ越中國ハ神保氏ノ緣者佐々内藏助成政ニ仰付ラル、成政越前國府中ノ居城ヨリ彼國ニ到リ是ヲ退治スヘシト云々、能登ノ國ハ、前田又左衛門利家ニ彼仰付、菅屋九右衛門長賴、福富平左衛門ヲ相添ラル、利家モ又同ク越府ヲ立テ能州ヘ相趣ク、能越兩國退治ノ後ハ、直ニ越後ノ國守長尾景勝ヲ退治セラルヘシト云云、抑能越ノ先守護畠山修理太夫義元、義繼二代、所領ヲ長尾家ニ掠メ取ラレ、義繼カ子義則縱カナル所帶ヲ領シテ長尾家ニ身ヲ寄セ居タリ、其家臣國人等、各一分ヲ割據シ、末タ長尾家ニ從ハサルハ往々尙有之、近年此者トモ便宜ヲ求テ、大臣家ノ味方トナル、四月七日、越中住人、神保安藝守長治、二條新造ノ御所ヘ召寄セラレ、二位ノ法印、佐々權左衛門兩使トシテ頃日御對面無之子細仰出サレ、黃金百枚、縮子百卷被下之、是大臣家御緣者ナリ、當春上杉謙信入道病死ニツイテ、飛驒ノ國司姉小路左京太夫賴綱方ヘ仰付ラレ、佐々權左衛門相添ラレ、長治越中入國ト云々、長治或ハ氏治ト號ス、

九月己酉朔

二十四日、壬申、信長、齋藤新五郎を遣はして、越中を略せしむ、

〈信長記〉　九月廿四日、齋藤新五、越中ヘ被仰付出陣、國中大田保之内つけの城、御敵權名小四郎、河田豐前人數入置候、尾濃兩國之御人數打向之由、承及聞落に致退散、則つけの城ヘ神保越中人數入置、齋藤新五、三里程打出陣取候て在在所々ヘ相働、

〈甫庵信長記〉　九月廿三日、信長公御上洛有ケルカ、越中國一揆共分蜂起之由

注進有ケルニ、齋藤新五馳參可致退治旨被仰出ケレハ、承テ急キ發向、

十月己卯朔

四日、壬午、齋藤新五郎、河田豐前守、椎名小四郎等を擊ちて之を破る、

〔黃薇古簡集〕

注進之趣披見候、仍去四日、河田豐前守○豐前親長椎名小四郎合一味、相催一揆動候處、則及一戰切崩、三千餘人討捕候條、粉骨之段無比類、感情不淺候、誠天下之覺可然候、彌可勵戰功、事簡要候也、

十月十一日　信長（黑印）

齋藤新五殿

書狀並鈴木越後口上之趣聞屆候、河田至大田面罷出候由、幸之儀候、問此爲可打果、重而毛利河內守、坂井越中、森勝藏以下、遣之可相談、事專一候、齋藤次郎右衛門、別而可抽忠儀候、而神妙候、然者朱印之儀、遣之何も神保越中守○長住相談尤候、猶鈴木越後守可申候也、

十月十一日　信長（朱印）

齋藤新五郎殿

尙々寒天之時分一入苦勞察候、

注進之趣披見候、仍其面敵取出候處二、即時覃一戰、得大利、首三千餘打捕之由、寔無比類仕合、令大慶候、彌無越度樣、可被申付、事專一候、尙自是爲加勢、毛利河內守二相添、森勝藏、坂井越中守、佐藤六左衛門尉差遣候、重而追々可申付候、切々注進待入候、謹言、

十月十二日　信忠（花押）

齋藤新五殿

注進之趣委細聞屆候、其面事、今度切々動、誠心地、能天下之覺、旁以感情不淺候、然者其元可相勵、所ニ能々申付候者、早及寒天之間、加勢之族相談、急速歸陣可然候、神保越中守、是又可相談候也、

十月廿八日　信長（黑印）

齋藤新五殿

〔信長記〕　寅十月四日、齋藤新五越中國中大田保之内本郷ふ陣取、御敵河田豐前守椎名小四郎、今和泉ふ楯籠候、彼城下迄放火候て未明より被罷退之處ふ人數弦付候、齋藤新五、節所へ引かけ月岡野と云所ふて人數立合、既及一戰追崩頸かも三百六十討とり、此競弦不休懸まゐり所々人質執固神保越中所へ相渡し歸陣候也、

〔甫庵信長記〕　角テ十月五日、越中國ニ下向セシ齋藤新五郎ハ、河田豐前守椎名小四郎楯籠シ今泉城ノ近邊九月下旬ニ相働民屋令放火、翌日未明ニ罷退候處ヲ河田椎名節所へ引懸、人數ヲ出シ募候ト云共、無左右節所ヲ差越、平地ニ出テ引返、及一戰、數刻相戰テ終ニ切崩、究竟ノ兵五百六十討捕、其競ヲ以國中ノ人質等取固、神保安藝守ニ渡置申旨飛脚到來シテ申ケリ、

〔參考〕

〔三州志〕　健齋餘考　信長公、齋藤新五ヲシテ越中ヲ攻ンコトヲ命ス、此時、津毛城ニハ椎名小四郎アリ、景勝ヨリ副將トシテ村田縫殿助ヲ置ク、按ルニ椎名ハ上文ニ景勝ヲ恐レ三戸田ニ匿ル、然ルニ越後ノ將村田ト居スハ、新五ノ來ルヲ恐レ又景勝ニ降リ屈スルコト此故ニヤ松倉城ニ據ルコト下文ニ見ユ　冬十月、新五信濃、美濃二國ノ鋭甲ヲ率キ飛州ヲ經テ（此ハ姉小路小川郡ノ咽喉ニ在リ飛松谷今云松ケ崎カ）へ抵ル、椎名等之ヲ聞テ、八日ノ夜半、津毛城ヲ出テ松倉ニ入ル、新五ハ斯トモ知ラス、津毛城ヲ圍ムニ空城ナレハ、即チ神保越中守ヲ置キ、近村ニ縱火シ、今泉城（新川郡ニ在リ此時椎名河田ノ手將之ヲ守ル）攻取リ、齋藤喜右衛門、同忠兵衛ヲシテ守ラシム、（北國太平記ニハ此時今泉昭ヲ、翌曉新五軍ヲ欲メントスルヲ椎名、河田カ兵之ヲ難所ニ支擊ハシ、新五ノ兵多ク靡ニトイヘトモ守返シ越士亦多ク之ニ死テスト云、又一說ニ齋藤忠兵衛子孫忠助農夫トナリ、今泉村ニ享保中マテ衰微フシテ在シト也、又人碑ニ十月八日夜、津毛城ノ兵トナリ、悉レテ走ルヲ翌曉新五遂ニ發シ新庄村ノ地藏堂ノ東小坂口（一ニ尾唾阪ニ作ル）ニ陣ス、時ニ荒川ノ戰ヒ兩軍共ニ死士多シ、因テ齋藤兵引テ太田本郷城ヘ入リテ景勝ノ兵新庄ヲ攻ム、城兵防ク詳ナラス、又「泉逸記」ニ「井田城ニ保ミ城主齋藤一鶴ト併守スト云、此勝ノ二三ノ說皆詳ナラス、又「泉逸記」ニ今年九月二十四日、信長公新五ヲ發向セシ云、飛州神保氏春ノ頼綱ニ置キ、而シテ新五四方三里許出馬シ寺院等ニ放火ス、且信長越ニテ副ヘ長途ニテ新五六百ヲ率シ兵ノ尾張ニ加勢セシ、其家ヲ亂妨シ大吉斐子ヲ殺ス、此時誤テ石黑左近ノ銀箱ヲ得ス、手兵ニテ美濃ノ兵ト辨キ、流矢頼綱ニ中ル、ヲ以テ頼綱石黑ヲ信長ニ讒ス、因テ公左近ヲ疑フニヨリ左近ハ公ニ背キテ景勝ニ從フトアリ、以上諸說一ナラス、疑フノ誤リナラン、今ヲ以テ是正シカタシ、然レトモ雜肌ノ事刪除ニ堪ヘサレハ爰ニ頼列シテ後案ニ具フ、

〔三壺記〕　ニ　其年九月、信長公御上洛まします所へ、越中に一揆起り上方へ切て上る由聞へけれは、齋藤新五郎を越前へ被遣、早々罷下り可討よし被仰處に、越前并能美江沼郡の大將共、殘所なく馳參魚津の此方迄發向す、一揆の大將、椎名小四郎と申は、尊氏の時分は、椎名孫六といふ其孫なり、越後より河田豐前と

いふ強兵を遣し置、此者共所爲なれは上方勢は此度滅却せんと汗水に成て終には皆々討亡して、神保に越中平均に相渡、越中阿尾の菊地も相順ふ、此合戰別で越前衆骨折御滿悅に被思召けり、

天正七年己卯　紀元二千二百三十九年

十月　癸酉朔

二十九日、辛丑、神保長住、馬を信長に遣る、

〔信長記〕　十月十九日、越中神保越中守、○長住墨斡毛御馬進上

是歳、信長、成政を越中に封す、成政富山城に徙る、

〔三州志〕　來因概覽　七年己卯、佐佐内藏助成政越中一國ヲ賜リ、富山城ヘ徙ル

○此事有澤武貞考ニ出ツ、「城主記」ニハ之ヲ六年トナシテ、此時采邑高三十六萬石（一說五十三萬石）トアリ、其他「三壺記」「年譜」ニハ八年トシ、或ハ九年トナシテ、神保氏ハ信長公ノ妹ヲ嫁セシムルトキ、成政ニ新川郡ヲ賜テ神保氏ノ後見トナス、其實ハ神保氏ヲ懲サントノ陰計也トアリ、尋周按ルニ此「三壺記」等ノ文義ニテハ十二年ニ秀吉公三郡ヲ除キ、新川一郡ヲ成政ニ賜フコト、脗合セス、故貞ノ說ニ今武ニ從フ、

〔加賀藩史稾〕一　是歳佐佐成政越中ニ封セラル　有澤武貞考

〔富山市沿革志〕　天正九年、神通川營ツテ呉服山（呉服一ニ呉福ニ作ル或ハ御福ニ作ル）ノ麓ヲ過キシカ、洪水ノ爲ニ東ニ遷レリ、成政乃チ神通川ヲ堅固トシ、又鮎川ヲ引キ、市内ニ入レ、壘ヲ高クシ、壕ヲ深クシ、塀櫓ヲ完修シ、九月功ヲ竣ヘ以テ居城トナス、一說ニ曰ク、富山城ハ今ノ地ニアラス、成政居城ノ舊地ハ今ノ星井町ニシテ字四ツ屋ノ用水塘ハ總曲輪ノ堀河ナリト、然レトモ古ノ富山城ハ乃チ今ノ富山城歟ト看做セハ可ナラン、

天正八年庚辰　紀元二千二百四十年

四月　庚子朔

十一日、庚戌、神保長住、使を信長に遣はして、馬を獻す、

〔信長記〕　四月十一日、長光寺山、御應ぜりいさるへきよて、出御之處に百々の橋にて神保越中の使者、御馬二匹進上、

十五日、甲寅、本願寺顯如、紀州雜賀より書を勝興寺、及其宗徒に遣りて信長と媾和せし旨を告ぐ、

〔勝興寺文書〕　○射水郡伏木町

態令啓達候、仍信長公與和平之儀舊冬已來、以勅使度々被仰出候間、於旨趣者、條々令言上候キ、彼憤大坂退出之段ニ相究候間、加思案應勅命候、其子細別紙ニ、門徒中ヘ染一輪候、被遂披覽、當國坊主分、并門徒之輩ニ、一々不聞違樣、可被申渡事肝要候、開山尊像守申、去十日至雜賀下着候間、可被得其意候、若不審之儀在之者、

態染筆候、仍信長公與和平之儀、爲禁裏被仰出、互之旨趣、種々及其沙汰候キ、彼憤大坂退出之儀ニ相極候間、此段新門主令直談候、其後禁裏ヘ進上之墨付ニも被加判形候、此和平之儀者、大坂并出城所々其外兵庫、尼崎之拘樣兵粮玉薬以下此已來之儀、不及丁簡候、中國衆之儀、岩屋、兵庫、尼崎引退歸國候、今ハ宇喜多別心之條、海陸之行不可相叶由候、たとへハ當年中之儀者可相拘歟、乍去敵多人數取結長陣以後者扱之儀も不可成候、然時ハ有岡三木同前ニ可成行事眼前候、忽開山尊像をハしめ悉相果候ハヽ、可爲法流斷絶事歎入計候、就其加思案叡慮ヘ御請申候、如此相濟候、以後新門主不慮之企、併いよゝ者のいひなしニ同心せら被

態令啓達候、仍信長公、和平之儀、旧冬已来以勅使度々被仰出候間、於旨趣者条々令言上候キ、彼憤大坂退出之段ニ相究候間、如思案應勅命候、其子細別紙、披覽、當國坊主分并門徒之輩ニ一々不聞達様可被申渡事肝要候、開山尊像守申去十日至雑賀下着候間、可被得其意候、若不審之儀在之者、可示給候、万端御馳走、此節候、猶刑部卿法眼少進法眼可申候也、穴賢〳〵

卯月十五日　顯如（花押）

勝興寺殿

剩恣之訴訟中々過法候將又予今隱居云世務　更無其儀候佛法相續之儀猶以
不及其沙汰候處諸國門下へ申ふるゝ趣言語道斷虛言共ニ候所詮開山影像守
申去十日至紀州雜賀下向候間此以來諸國門徒之輩遠近ニよらぬ難路をゝれ
きても開山聖人御座所へ參詣ゝさるへき事可爲報謝候就中老少不定の
人間れゝらひなれゝ一日も片時もいそき〳〵雜行雜修ゝてゝ一心ゝ彌陀
佛をたれみ申候人々ゝ必極樂ゝ往生すへき事ゆめ〳〵疑あるましく候此上
ゝは佛恩報盡のためゝ念佛申され候へく候相構て〳〵無由斷法義能々たゝ
なみ肝要ゝて候猶刑部卿法眼少進法橋可申候也穴賢々々

卯月十五日　顯如花押

越中國
坊主衆中へ
門徒衆中へ

〔參考〕

〔善德寺文書〕○東彌波郡城端町

善德寺御房　敬如

正親町天皇天正八年

今度大坂拘様之儀思立候處、予一味之段誠志之程難忘事候、たとひ入眼之儀相調候共、身上之儀聊不可有機遣候、特連々馳走之儀神妙候、就中師弟共ニ信心決定候と今度之報土往生をとけらるへき事肝要候、此等之旨門徒中へも可申傳候、爲其染筆候也、猶按察法橋可申候、穴賢々々、

三月廿八日　　敕　如（花押）

善德寺御房

善德寺殿
玉案下

端書不申入候
只今被成下御書候、謹而御頂戴候而悦可有御聽聞候、仍今度御間之儀ニ付別而當御所様之御儀御馳走之段神妙ニ被思食候、向後彌可被抽御粉骨事肝心ニ候、自然御兩所様御間御入眼候共不可有御機遣候、今般御一味被申輩者迚も御見放有間敷候條可御心安候、爲可被止御疑心如此ニ被仰出候、恐々謹言、

按察法橋（ノリ）
　　紀明

卯月三日　　□明（花押）

善德寺殿
玉案下

〔信長記〕　三月朔日、抑從禁中大坂爲御無事、近衛殿勸修寺、庭田殿被成御敕使訖、信長公より爲御目付宮内卿法印佐久間右衛門被相添進候去程に大坂退城可仕之旨、忝も從禁中被成御勅使、門跡北方年寄共可有如何哉否之儀、不恐權門心中之存知旨趣不殘可申出之由、尋被申處、下間丹後、平井越後、矢木駿河、井上藤井藤左衛門初として致評定退屈の驗ゟ、又ゝ世の中見究申故歟、今度ゝ上下御一和尤と申事ニ候、爰ゟて御院宣を違背申ニ付てハ天道の恐もいゟゝ也、其上信長公、被成御動座荒木、波多野別所如御退治根を斷葉を枯して可被仰付候、近年大坂端城五十一ケ所相均上下苦勞の者共ゟ賞祿をこそ不宛行共責ての芳恩ゟ命を助可申旨門跡被相知、來七月廿日以前ゟ大坂退散ゟ相定、御勅使近衛殿、勸修寺殿、庭田殿幷宮内卿法印佐久間右衛門等に御請を申、誓紙御撿使被申請候、此旨安土へ言上之處ニ青山虎、爲御撿使被仰付候、閏三月六日安土より天

王寺ヘ日通ゐ參着候、翌日閏三月七日誓紙之筆本見被申候也、〇下略

〔大谷光尊家譜〕　天正八年三月、右府奏請、天皇遣大納言庭田重保、中納言勸修寺晴豐、下詔講和、罷兵退去、光佐奉勅不敢擬議、彼此互呈盟書、和議方成、

〔大谷光時家譜〕　第十一世光佐、法號顯如、〇中略天正三年、毛利氏遣艘數百艘、而信長數遣兵、必期殄滅、然遂不能拔、八年三月、天皇遣廷臣庭田重通勸修寺晴豐來諭和議、信長亦使楠友閑來焉、於是光佐大衆徒屬議之、家老下間刑部等皆贊其和、光佐乃從之、互結盟約、

六月己亥朔

八日、丙午、新川郡立山温泉を發見す、

〔新庄警察署調査〕　立山温泉ハ、天正八年六月八日、深見六郎右衛門トイフ者、發見開湯シ、代々同家ニ於テ繼續營業ナシ來リシ所、安政五年大地震ノ爲メ温泉場ヲ土砂ニ埋沒シ三ヶ年間開湯シ能ハザリシガ、文久元年七月、舊ノ如ク設備ヲ爲セリ、

〔富山縣衛生第一次年報〕　明治三十二年

湧出地名　上新川郡大山村大字有峰村　立山温泉　温泉　硫黄泉　五十六度

泉質　温泉　温泉　冷泉　別泉　呼稱

十一月丁卯朔

成政、神通川渡舟の制を定む、

〔船橋原由之事〕　富山涉

掟

一、涉賃諸百姓、諸被官、商人以下不嫌權門、如先規可取事、

一、船に不可大乘事

附夜舟を聊示ゐ不可越事、

一、爲出船を不可返事、

右之趣於相背輩者、速に可處殿科者也、依而掟如件、

天正八年十一月　日　佐々内藏之助　書判

〔參考〕

〔船橋原由之事〕　知行方

參百拾俵ハ　山室之内、中市村

貳百貳拾六俵壹斗六舛八、山室之内、江口村
合五百參拾六俵壹斗六舛、

右之分宛行者也、

天正拾三　壬　八月十三日　　佐々内蔵之助　印
神通川船頭中

天正九年辛巳　紀元二千二百四十一年

一月　乙未朔

二十日、甲寅、成政、廩米を、有澤圖書助齋藤豐左衛門に授く、

〔武家事紀〕古案雑家下

折紙
爲扶助、以當郡内五百俵申付候、忠節次第尙可宛行之狀如件、

天正九二月廿日　　成政
有澤圖書助殿

〔最上記追加〕

齋藤織部方より所持之證文四通（織部ハ齋藤市伯高祖父也）

爲扶助、當郡内以參百俵申付候、忠節次第猶可宛行者也、仍如件

天正九二月廿日　　成政判
齋藤豐左衛門殿

〔參考〕

〔武家事紀〕

一札

一、當家一圓ニ申付、上者諸奉行圖書助申付、可爲次第事、
一、其方噂表裏申者於有之者、引合可相聞事、
一、諸事於如何樣之儀モ、引寄可爲聞事、
以上

天正十年　正月二日　　政繁（上條入道宜順齋景綱の後名）
有澤圖書助殿

三月　乙丑朔

二十四日、戊子、松倉城主河田長親、景勝と軍を合して小井手城を攻む、信長、佐々成政、神保長住及ひ前田、柴田の諸將をして之を援はしむ、是に至り、景勝

兵を收めて還り、成政、守山城に入る、

〈信長記〉　三月六日、神保越中、佐々内藏助並國衆上國へ加賀、越前、越中三ヶ國の大名、今度の御馬揃ゑ各在京也、今の透ゑ、人數を可出之行ゑて名譽の鄉の刀作たる松倉といふ所ゑ楯籠、御敵河田豐前、以調略越後より長尾喜平次を呼越、大將として催一揆、佐々内藏助、人數入置候小井手の城を三月九日取詰候、又加賀國白山の麓二曲（フタクク）と云所ゑ、卒度、足かゝりをこしらへ、柴田修理、人數三百計入置近邊知行の所務納置候處、加州一揆手合として令蜂起二曲へ取懸責破入置候者、悉討果候、爰ゑ國の爲警固佐久間玄蕃を殘置候、則玄蕃頭二曲へ攻上り乘返一揆共數多切捨、手前之高名無比類、

三月十二日、神保越中幷國衆、至安土參着、御馬九ッ國衆より進上、佐々内藏介も御鞍、鐙、轡、黑鎧進上候也、

三月十五日朝、松原町御馬場ゑて御馬めさせられ候、越中衆いつれも御禮被申一々被加御詞、忝次第也、爰ゑて長尾喜平次越中へ罷出、小井手の城取卷の趣、言上之處ゑ則先勢として越前衆不破、前田、原、金森、柴田、修理人數不移時日、可致出勢之旨被仰出、各御暇被下、夜を日ゑ繼て至越中着陣候キ、

三月廿四日、佐々内藏助、神通川、六渡寺川打越、中部の内中田と云所へ被鬼付候處に、上方の御人數參陣のよし承及、

卯刻、御敵長尾喜平次、河田豐前致陣拂、小井手表引拂、火之手の間三里ゑ見ゑけ、成願寺川、小手川打越、人數を被付候へ共、とや諸手引取候間不及是非、併籠城運を開、

○信長記、三月六日ゑ係け九日小井手城取詰と爲し、三州志之に據り、當代記市庵信長記ハ、二月二十八日に係け三月九日は飛報安土に達するの日とす、景勝年譜、二月五日に係け十八日景勝納馬となす、今前後諸書を通考するに、年譜の二月、恐らくは三月の訛にして、五日は景勝發兵の日なる可し、又景勝年譜に據れば、景勝の兵を收る十八日にして、河田長親の死其二十四日ゑゑ、本書佐々等の返擊により景勝長親兵を收むと云ふ疑ふへし、今當時の情勢を考ふるに六日景勝、長親等小井手城を圍み、佐々神保等之を擊走し、十二日を以て安土に至りしなるへし、固より攻圍中に在り自ら安土に至るへからす、蓋二十四日長尾河田は其兵にして景勝長親に非るに似たり、猶考を俟つ、

二月廿八日、此馬揃ニ越前越中、加賀國ノ衆ハ不相上、其故ハ長尾景勝彼表エ出

〔當代記〕

張、加賀越中ノ一揆爲手合フトフケノ城ヲ取卷、○中略

三月十二日、佐々内藏助、神保越中守安土ヘ參上、翌日出仕進物夥、然所長尾喜平次景勝出張シテ越中國小井手ノ城ヲ圍之由、注進到來、信長宣フ久々ニテ相上間、於京都一興可仰付旨思設給フト云トモ、急罷下後詰可仕由也、佐々神保夜ヲ日ニ次テ下ル、廿四日、越中ノ中郡エ打出ル、長尾聞此事未明ニ引退四五里カ程追之敵曾テ不見、此間籠城之者對談シテ感悅ス、

〔甫庵信長記〕

二月廿八日條、越前、加賀、越中國ヨリモ各馬揃ニ上洛有ヘキト沙汰アリケレハ、越中松倉城ニ栖籠ル河田豐前守越後ノ長尾喜平次方ヘ於京都信長公馬揃ノタメ越前、加賀、越中ノ武士トモ上京スヘキノ儀也、是願フ所ノ幸、此透ヲ便リ早々於被打出可得勝利事案ノ内ナリト飛脚ヲ遣ケレハ、長尾卽可打立トソ約シケル、

三月十二日、佐々内藏助、神保越中守安土參著ノ、其夜ニカクト言上致シケレハ可有御對面トテ、十三日ノ朝、御禮ヲ請サセ玉フ、進物、イト夥シカリケリ、斯ル處ニ長尾喜平次景勝、越中國ニ出張シ、内藏助人數入置小井手城如稻麻竹葦、取圍

山注進アリ、信長公、内藏助ニ仰有ケルハ、久々ニ上國タル間、京都ヘモ上セ一興有ヘシトコソ思召シカモ、小井手城長尾取卷タルノ由オホツカナク覺フル條、急可令下向旨被仰出ケレハ、夜ヲ日ニ繼テ急ケル程ニ、同廿四日ニハ、佐々、神保モ越中ノ國ニ參著シ中郡邊ヘ早打入處ニ、今日卯刻ニ長尾ハ小井手表ヲ引拂罷退ノ由告來ル、内藏助怒リモタヘッ、四五里カ程勢ヲ付テ見タリケレモ、未明ニ退タル事ナレハ不及力所也、角テ籠城ノ者共呼出シ、此間各苦勞タル由士ニ向イ禮ヲ厚ク其中志勝タル者ヲ尋聞或ヲナシ賞ヲ行テ居城守山ヘ人數ヲソ引入タル、

〔景勝年譜〕

二月

同月五日、近年ノ騷亂ニ軍士力勞レ財乏ク、民間モ居安シ難キ折節ヲ窺ヒテ、信長越中ニ心ヲカケテ味方ノ壘ヲ攻ムヘキト相計フヨシ聞フ、先越中ノ佐々内藏助カ許ニ達ス、内藏助、神保越中守モ江州安土ニ赴キ信長ト軍議アルノ由告來ルニヨリ、○神保佐々ノ安土ニ至ル信長記三月十二日ノ明文アリ此時猶越中ニ在ルモノニ似タリ但此間ノ事信長記當代記猶記載明暢ナラス未タ遽ニ斷定シ難シ三月廿四日條參看スヘシ公ハ越中ノ小井手城ニ出張シ玉フ、此ノ故ニ越中、加州ノ御味方兵馬ヲ催シ小井手城ニ馳集ル、加州尾山城ニハ信長ノ從士佐久間玄蕃允出合相戰フ、此事安土ニ聽ヘシカハ、佐々、神保夜ヲ日ニ繼